

	班	班 長	副班長	研 究 課 題
1	課題公募班（一般A班）	長野 仁	平岡隆二 高井たかね	日本鍼灸医術の形成—近世医学史の再構築
2		外村 中	稲本 泰生	「見えるもの」や「見えないもの」に関わる東アジアの文物や芸術についての学際的な研究
3		三輪眞弘	岡田 暁生	「システム内存在としての世界」についてのアートを媒介とする文理融合的研究
4		竹元 規人	古勝 隆一	清代～近代における経学の断絶と連続：目録学の視角から
5		重田 みち	菊地 暁	「日本の伝統文化」を問い直す
6		モハーチ ゲルゲイ	石井 美保	実験性の生態学——人新世における多種共生関係に関する比較研究
7	課題公募班（若手A班）	諫早 直人	向井 佑介	東アジア馬文化の研究
8		朴 沙羅	福家 崇洋	西部講堂を中心とする戦後文化空間の研究
9		正清 健介	森本 淳生	小津安二郎映画の欧米における批評的受容に関する研究
10		高橋 早紀子	稲本 泰生	東アジアにおける阿弥陀如来の表象
11		小川 道大	村上 衛	「長い19世紀」におけるインド・中国の社会経済史の比較—税制に注目して
12	班員公募班（B班）	池田 巧	-	チベット文明の継承と史的展開の諸相
13		高木博志	-	近代京都と文化
14		岩城 卓二	-	環境問題の社会史的研究
15		村上 衛	-	近現代中国の制度とモデル
16		竹沢 泰子	-	人の分類と人種化に関する国際比較研究
17	基盤研究班（C班）	矢木 毅	-	東方文化学院京都研究所旧蔵漢籍の整理と研究
18		Wittern Christian	-	漢籍リポジトリの基礎的研究
19		宮宅 潔	-	秦代出土文字史料の研究
20		稲本泰生	-	龍門北朝窟の造像と造像記
21		岡田暁生 小関 隆 佐藤淳二	-	21世紀の人文学 — Our Ageを問う
22		籠谷直人	-	帝国日本の「財界」形成についての研究：1895年-1945年
23		岩井茂樹 古松崇志	-	前近代ユーラシア東方における戦争と外交
24		森下章司 (副：向井佑介)	-	3世紀東アジアの研究
25		稲葉 穰	-	前近代内陸アジアとその隣接地域の社会と文化
26		石川禎浩	-	20世紀中国史の資料的復元
27		安岡孝一	-	古典中国語のコーパスの研究
28		岡村秀典	-	北朝石窟寺院の研究（二）
29		高階絵里加	-	芸術と社会—近代における創造活動の諸相—
30		船山 徹	-	中国在家の仏教観：唐道宣撰『広弘明集』を読む



# 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の3年目)

## 1. 研究課題

日本鍼灸医術の形成—近世医学史の再構築

Formation of Japanese acupuncture-moxibustion : Reconstruction of the medical history in medieval and early modern Japan

## 2. 研究代表者氏名

長野 仁

Nagano Hitoshi

## 3. 研究期間

2018年4月-2021年3月(3年目)

## 4. 研究目的

現代鍼灸は、極端な欧化政策による鍼灸廃絶の危機を回避するために、医科学的アプローチによる臨床研究を最優先課題とし、医道の伝統を継承しつつも歴史的な側面は置き去りにしている。日本医学の通史を振り返る時にも、近代医学の系譜として先駆的業績を顕彰するに止まり、近世に大いに発展した鍼灸医術の種々の流儀や理論的構造に論及することはない。しかし、京都大学の富士川文庫をはじめとして、数多くの流儀書、理論書が伝存しており、日本医道における技術的伝統は手がつけられないままに埋没している。

そこで、本研究では、鍼灸関連の古医書の総合的な考察を試み、鍼灸医術の形成、伝承形態の具体的様相を明らかにし、多角的なアプローチによって鍼灸医術の本質的特色を探る。そして、「日本鍼灸学」という新分野を開拓し、医薬、鍼灸の学界に遡及的考察を行う研究基盤を構築することによって、近世医学史の再構築を図る。

In order to avoid the crisis of the abolition of acupuncture and moxibustion due to Europeanization policy, the modern proponents and practitioners of the field have made clinical research from a medico-scientific perspective a top priority, while they have not made much of historical research in spite of inheriting from the tradition. When looking back on history, they have only praised the pioneering achievements related to modern medicine, and have seldom discussed diverse methods and theories that have been greatly developed in the early modern period. However, in such collection of medical books as the Fujikawa collection of Kyoto University, there remain many books on such methods and theories and these technical traditions are still buried untouched.

In this study, we aim to comprehensively evaluate these medical books, clarify the specific aspects of the formation and tradition of acupuncture and moxibustion medicine, and explore the essential features of the medicine from historical perspective. Through these, we will attempt to reconstruct the history of early modern medicine, as well as to develop a new field of “Japanese acupuncture and moxibustion studies” which would provide a foundation to reflect the research results in the fields of medicine, pharmacy, and acupuncture and moxibustion.

## 5. 本年度の研究実施状況

今年度は海外からの特別講師を招いて特別講演会を実施予定であったが、感染症拡大の影響のため来年度に延期せざるを得なくなり、また本研究班は班長をはじめ、班員にも医療従事者が多いことから、共同研究会の開催計画等においても大幅な変更を余儀なくされた。こうした計画の変更はあったものの、個々の班員や小規模グループによる資料調査や読解をすすめることにより、とくに鍼術流儀書の成書や流派の成立年代に関する従来の学説を重点的に再検討し、その成果を持ち寄って年度後半に集中して共同研究会を開催、各研究成果に関する討議をおこなった。また、研究期間中にすでに刊行した近世医家新出史料集第一冊・第二冊を改訂・増補し、近世医家新出史料集Ⅰ 武田時昌監修・長野仁編集『改訂版 儒医姓名録—後藤良山門人録の影印・翻刻』（長野仁解説の加筆訂正）、近世医家新出史料集Ⅱ 武田時昌監修・永塚憲治編集『一本堂南洋先生 門人録 増補版』（人名索引の補正及び附録として新出資料『修庵香川先生易弁』の影印・翻刻および解題（武田時昌））として刊行した。班員によるこれまでの研究成果をまとめた論文集を来年度に刊行するための準備も進めている。

## 6. 本年度の研究実施内容

2020-12-20 鍼灸流儀書の再検討 『五躰身分抄』および『百腹図説』『五十腹図説』の考察 司会 高井たかね 人文科学研究所 栄西と桑粥 — 平安中期から鎌倉期の糖尿病史 — 発表者 富田貴洋 湧貴堂鍼灸院 『百腹図説』『五十腹図説』の書誌的考察 発表者 長野仁 森ノ宮医療大学大学院

2021-01-31 医学・鍼灸各流派の成立と伝承（一） 粕谷流と杉山流 司会 高井たかね 人文科学研究所 粕谷流の流儀書について～雲海士流・扁鵲新流との関係性～ 発表者 松木宣嘉 四国医療専門学校 杉山流の形成史～入江流・圭庵流を中心に～ 発表者 大浦慈観 東洋鍼灸専門学校

2021-02-14 医学・鍼灸各流派の成立と伝承（二） 古方派医学と雲海士流 司会 長野仁 森ノ宮医療大学大学院 後藤良山の生涯とその一族について 発表者 今井秀 今井整形外科 雲海士流について 発表者 松岡尚則 公益財団法人研医会

2021-03-21 司会 長野仁 森ノ宮医療大学大学院 室町期における医学・医書受容の一樣相—五山僧が繋ぐ知のネットワーク— 発表者 田中尚子 愛媛大学 『倭名類聚抄』におけ

る『本草和名』の引用 発表者 武倩 中国海洋大学外国語学院 翻訳と導入～中国南北朝期の  
の仏教と医学 発表者 多田伊織 大阪府立大学 江戸時代医学公教育を取り巻く経穴学派の  
諸相 発表者 加畑聡子 北里大学東洋医学総合研究所

#### 7. 共同研究会に関連した公表実績

2021年3月刊行

近世医家新出史料集Ⅰ 武田時昌監修・長野仁編集『改訂版 儒医姓名録—後藤良山門人録  
の影印・翻刻』（長野仁解説の加筆訂正）

近世医家新出史料集Ⅱ 武田時昌監修・永塚憲治編集『一本堂南洋先生 門人録 増補版』  
（人名索引の補正及び附録として新出資料『修庵香川先生易弁』の影印・翻刻および解題  
（武田時昌））

#### 8. 研究班員

所内

平岡隆二、高井たかね、古勝隆一

学内

赤澤久弥(附属図書館)、成高雅(人間・環境学研究科)、中神由香子(医学研究科)、劉青  
(人間・環境学研究科)

学外

荒川緑(東洋鍼灸専門学校)、猪飼祥夫(猪飼鍼灸院)、ウォルフガング・ミヒェル(九州大学・  
名誉教授)、浦山きか(森ノ宮医療大学)、浦山久嗣(赤門鍼灸柔整専門学校)、大浦宏勝(はり  
きゅう処 路傍庵)、郭秀梅(順天堂大学医学史研究室)、加畑聡子(北里大学東洋医学総合研  
究所)、梶谷光弘(公益財団法人いつも財団事務局)、梁永宣(北京中医薬大学)、小曾戸洋([公  
財]武田科学振興財団杏雨書屋)、佐々木友子(森ノ宮医療学園専門学校)、島山奈緒子(明治  
国際医療大学)、鈴木達彦(平成帝京大学薬学部)、高津 孝(鹿児島大学法文学部)、多田伊  
織(鈴鹿医療科学大学)、宗敦浩(鍼灸洌心堂)、谷田保啓(たにだ鍼灸院)、中神源一(中神内  
科クリニック)、長谷川佳与子(奈良女子大学大学院)、東昇(京都府立大学文学部)、深水美  
和(大阪府立平野支援学校)、松木 宣嘉(四国医療専門学校)、真柳誠(茨城大学・名誉教授)、  
三鬼丈知(大谷大学文学部)、横山浩之(森ノ宮医療大学鍼灸情報センター)、富田貴洋(鍼灸  
湧貴堂)、豊田裕章(大阪府立豊中支援学校)、長谷川宗輔(長谷川鍼灸院)、名和敏光(山梨県  
立大国際政策学部)、武田時昌(京都大学名誉教授)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
			(1)	(1)	(1)	(1)		(1)	(1)	(1)	(1)
学内(法人内)	3	5	1	1	1	1	13	1	1	1	1
		(2)	(1)	(1)	(1)	(1)	(5)	(1)	(1)	(1)	(1)
国立大学	1	1	0	0	0	0	1	0			0
		(1)	(0)	(0)	(0)	(0)	(1)	(0)			(0)
公立大学	2	6	1	1	1	1	12	3	3	3	4
		(2)	(1)	(1)	(1)	(1)	(7)	(3)	(3)	(3)	(4)
私立大学	16	22	0	4	3	1	38		10	4	2
		(11)	(0)	(2)	(1)	(0)	(19)		(5)	(1)	(0)
大学共同利用機関法人	0	0									
		(0)									
独立行政法人等公的研究機関	0	0		0	0		0		0	0	
		(0)		(0)	(0)		(0)		(0)	(0)	
民間機関	5	7		0	0		19		0	0	
		(2)		(0)	(0)		(8)		(0)	(0)	
外国機関	3	3	1	2	1		4	1	2	1	
		(1)	(1)	(2)	(1)		(1)	(1)	(2)	(1)	
その他	4	48	1	7	3		84	4	13	5	
		(22)	(1)	(3)	(1)		(35)	(4)	(5)	(1)	
計	34	92	4	15	9	3	171	9	29	14	7
		(41)	(4)	(9)	(5)	(1)	(76)	(9)	(16)	(7)	(4)

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
	うち国際学術誌掲載論文数			
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	1			
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)				
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	2			
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)				
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)				

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

雑誌名	掲載 論文数	掲載 年月日	論文名	発表者名
日本大学人文 科学研究所 研究紀要	1	R2.9	孫思邈の医学思想	<u>舘野正美</u>
Chinese Traditional Medical Journal	1	R2.6	A Medical Hypothesis of Traditional Chinese Medicine Indicates the Status of Autonomic Nervous System	<u>Yoshinobu Nakamura,</u> <u>Mayumi Watanabe,</u> <u>Chikako Tomiyama,</u> <u>Zaigen OH</u>
医薬の門	3	R2.9	尾張徳川家の旧蔵書 を有する～名古屋市 蓬左文庫～	<u>永塚憲治</u>
わかりやすい 臨床中医臟腑 学 第4版	1	R2.5	わかりやすい臨床中 医臟腑学 第4版	<u>王財源</u>
近世医家新出 史料集Ⅰ『改 訂版 儒医姓 名録—後藤良 山門人録の影 印・翻刻』	1	R3.3	儒医姓名録 解題	<u>長野仁</u>
近世医家新出 史料集Ⅱ『一 本堂南洋先生 門人録 増補 版』	2	R3.3	『南洋先生門人録』 解題	<u>永塚憲治</u> ・ <u>松岡尚則</u>

共同利用・共同研究による成果として発行した研究書

研究書の名称	編著者名	発行年月	出版社名
近世医家新出史料集Ⅰ『改訂版 儒医姓名録—後藤良山門人録の影印・翻刻』	武田時昌監修・長野仁編集	R3.3	京都大学人文科学研究所
近世医家新出史料集Ⅱ『一本堂南洋先生 門人録 増補版』	武田時昌監修・永塚憲治編集	R3.3	京都大学人文科学研究所

11. 費目の30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

なし

12. 次年度の研究実施計画

なし

13. 次年度の経費

なし

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

中医学、韓医学と比較しながらの検討を目的に、台湾、韓国からの特別講師を招いた講演会を今年度に予定であったが、感染症拡大の影響により延期となったため、来年度中に、可能であれば対面方式も取り入れた形態での開催を予定している。同様に計画通りの作業が困難となった松江歴史館・いつも財団・島根県立盲学校と協力しての芦田家文書の目録作成については、やはり予定を繰り下げて来年度以降も作業を継続する。また、班員によるこれまでの研究成果をまとめた論文集刊行のための編集作業を進め、来年度中の刊行を目指している。今後は、本研究班に参加した中堅、若手研究者を中心に国内各所の鍼灸関連書の発掘と研究調査をおこなうグループを組織し、研究に資する基礎資料と成果の蓄積、人的資源の継続的な発展、拡充を図り、日本鍼灸医術研究進展への布石としたい。



# 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の2年目)

## 1. 研究課題

「見えるもの」や「見えないもの」に関わる東アジアの文物や芸術についての学際的な研究  
An Interdisciplinary Study on East Asian Works of Arts and Culture Concerning the Visible and/or Invisible Entities

## 2. 研究代表者氏名

外村 中

Sotomura Ataru

## 3. 研究期間

2019年4月-2022年3月(2年目)

## 4. 研究目的

東アジアの文物や芸術を解釈する上での共通の基盤の形成をめざすために、その前提として、あるいは「見えるもの」なのかもしれないが、普通であればまずは「見えない(と思われる)もの」にまつわる理論や事象について、従来の分野の枠組をこえて国際的にかつ学際的に探求することが、本研究の主な目的である。中でも仏身や道をめぐる議論は特に有効な指針を与えるものであるから、重点的にとりあげる。そして、様々な分野の研究者が一堂に会し、外来あるいは固有を問わず東アジアにおける多種多様な理論や思想から読み取られる共通点や相違点などを確認しながら、理論と作品との間に認められる矛盾点にも注意を払いつつ、上記の探求と関連する具体的な事例(特定の芸術作品など)を選定し、その文化史上における位置づけをおこない、実地に即した解釈のモデルをしめす。対象とする作品は、考古遺物から彫刻絵画、建築庭園、芸能音楽などにまで及ぶ予定である。

We carry out international and interdisciplinary research beyond the framework of the conventional academic fields, as a preparation for establishing a common basis to the understanding of works of arts and culture of East Asia. Researchers from various fields come together to explore theories and works concerning the visible and/or invisible entities, which are supposed to be invisible to ordinary people. Since, we think, discussions on Buddhist and Daoist theories give a particularly effective guideline, we lay special emphasis on them. We not only confirm common and different points explained in a variety of theories and thoughts,

no matter whether they may be indigenous or not, but also pay careful attention to contradictions, which may be recognized between theories and works. We select concrete examples (specific works of art etc) and position them in East Asian cultural history so as to show practical models of interpretation. The works, which we investigate, range from archaeological relics to sculptures, paintings, gardens, architecture, music, performing arts, etc.

## 5. 本年度の研究実施状況

本年度も班長の年間四度の来日に合わせて四回の研究会（6月・9月・12月・3月）を実施する計画を立てたが、コロナ禍で6月の第一回は8月に延期となり、最終的にオンラインで開催した。第二回以降も班長は資料蒐集のため来日を要したが、結果的に二週間の待機を経て研究所で副班長とともにオンラインで開催した。第二年次の本年度は仏典のほか儒・道の基本文献にも視野を拡げ、第一回は浄土三部経、第二回は『淮南子』『呂氏春秋』『易経』など、第三回は『老子』『荘子』『管子』『韓非子』『列子』などの文献とこれと関連する作品について検討を行った。班長入国時の待機にかかる滞在費で大幅な予算超過が生じたため、3月開催分は通例の研究会ではなく当班の関連企画として、儒・道・仏に日本神道を加えた四宗教の交渉をテーマにしたオンライン形式の国際ワークショップ「中国三教と日本神道の「見える」ものや「見えない」もの」を公開で開催した。当日は班長・副班長及び班員2名、計4名による研究発表と質疑応答が行われ、50名の参加者があった。

## 6. 本年度の研究実施内容

2020-08-22 浄土三部経などに関連作品 宋代仏画の「展開点」としての清浄華院「阿弥陀三尊像」-見える画像から見えない画像へ- 発表者 増記隆介 神戸大学 鏡像の考察-図像を見いだす- 発表者 瀧朝子 大和文華館

2020-08-23 浄土三部経などに関連作品 「浄土三部経」などが説く「見える」ものや「見えない」もの 西方浄土変は阿弥陀浄土を描いたものではない 発表者 外村中 ヴェルツブルク大学 「見える」浄土を「観る」-唐代西方浄土変と道綽 発表者 大西磨希子 佛教大学

2020-09-19 『淮南子』『呂氏春秋』『易経』などに関連作品 『淮南子』が説く「見える」ものと「見えない」もの 一道はまったく「見えない」もの- 発表者 外村中 ヴェルツブルク大学 漢代神仙思想と像の崇拜 発表者 森下章司 大手前大学

2020-09-20 『淮南子』『呂氏春秋』『易経』などに関連作品 見えない天意を何に見たか-正史五行志の役割 発表者 塚本明日香 岐阜大学 墓の中の「見えるもの」と「見えないもの」-漢魏晋墓の神坐と墓主図像- 発表者 向井佑介 京都大学

2020-12-26 『老子』『荘子』『管子』『韓非子』『列子』などに関連作品 外村中（ヴェルツブルク大学）道家（老荘）が説く「見える」ものや「見えない」もの：「一なる」もの

こそ「道」である 発表者 外村中 ヴェルツブルク大学 后稷は天に配せられたのか—

『詩』大雅「生民」から『孝經』へ 発表者 古勝隆一 京都大学

2020-12-27 『老子』『莊子』『管子』『韓非子』『列子』などに関連作品 中国飲食史における〈炒める〉〈揚げる〉をめぐる—『齊民要術』から元代まで 発表者 高井たかね 京都大学 医家と道家の体内観 発表者 横手裕 東京大学

2021-03-28 国際ワークショップ：中国三教と日本神道の「見える」ものや「見えない」もの 道家系と儒家系と伊勢神道の「一なる」もの：「一なる」ものは「道」か「気」か 発表者 外村中 ヴェルツブルク大学 仏像と道教像の図像的關係性再考—南北朝～唐時代— 発表者 齋藤龍一 大阪市立美術館 道学諸派における『太極図説』解釈 発表者 福谷彬 京都大学 北宋真宗期の仏教美術と三教理解—舍利莊嚴を中心に— 発表者 稲本泰生 京都大学

## 7. 共同研究会に関連した公表実績

2021年3月28日、関連行事として国際ワークショップ「中国三教と日本神道の「見える」ものや「見えない」もの」をオンラインで開催し、班員4名による研究発表と質疑応答が行われた。50名の参加者があった。発表者と題目は以下の通り。外村中「道家系と儒家系と伊勢神道の「一なる」もの：「一なる」ものは「道」か「気」か」、齋藤龍一「仏像と道教像の図像的關係性再考：南北朝～唐時代」、福谷彬「道学諸派における『太極図説』解釈」、稲本泰生「北宋真宗期の仏教美術と三教理解—舍利莊嚴を中心に」。また、開催にあわせて『国際ワークショップ 参考資料集 仏教と道家系の「見える」ものや「見えない」もの』と題する冊子を刊行した。

## 8. 研究班員

所内

稲本泰生、岡村秀典、船山徹、安岡孝一、古勝隆一、倉本尚徳、向井佑介、高井たかね、福谷彬

学内

内記理(文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター)、マリア・カルロッタ・アヴァンツィ(文学研究科)

学外

大西磨希子(仏教大学)、大原嘉豊(京都国立博物館)、黄盼(中国社会科学院考古研究所)、重田みち(京都芸術大学)、清水健(東京国立博物館)、高橋早紀子(愛知学院大学)、瀧朝子(大和文華館)、田中健一(文化庁)、中西俊英(東大寺華嚴学研究所)、中安真理(同志社大学)、西谷功(泉涌寺宝物館)、増記隆介(神戸大学)、森下章司(大手前大学)、横手裕(東京大学)、パトリシア・フィスター(日文研・名誉教授)、シビル・ギルモンド(ヴェルツブルク大学)、ベッティーナ・ゲーシュ(関西大学・甲南大学)、ガリア・トドロワ・ペドコワ(京都コンソ

ーシアム)、大平理紗(京都府立大学大学院文学研究科)、リサ・コチンスキー(南カリフォルニア大学)、折山桂子(九州国立博物館)、マリサ・リンネ(京都国立博物館・連携協力室)、ヒラリー・ピーダセン(同志社大)、魏藝(龍谷大学)、斎藤龍一(大阪市立美術館)

#### 9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
学内(法人内)	11	11	1	3	2	1	56	5	11	5	5
		(2)	(1)			(1)	(12)	(5)			(5)
国立大学	3	3		1			16		7		
		(1)		(1)			(7)		(7)		
公立大学	1	1		1	1	1	6		6	6	6
		(1)		(1)	(1)	(1)	(6)		(6)	(6)	(6)
私立大学	7	7	2	2	2	2	37	11	12	12	7
		(6)	(2)	(2)	(2)	(2)	(33)	(11)	(12)	(12)	(7)
大学共同利用機関法人	1	1	1				1	1			
		(1)	(1)				(1)	(1)			
独立行政法人等公的研究機関	7	7	2	3	1		25	2	14	7	
		(3)	(2)	(2)	(1)		(9)	(2)	(7)	(7)	
民間機関	3	3					9				
		(1)					(4)				
外国機関	4	4	3	1	1		20	13	6	6	
		(3)	(3)	(1)	(1)		(13)	(13)	(6)	(6)	
その他											
計	37	37	9	11	7	4	170	32	56	36	18
		(18)	(9)	(7)	(5)	(4)	(85)	(32)	(38)	(31)	(18)

#### 10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

なし

#### 11. 費目の30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

なし

#### 12. 次年度の研究実施計画

最終年度である次年度は三回の研究会を実施し、併せて研究成果をとりまとめた論集の公刊に向け準備にあたる。6月開催の第一回研究会は2020年3月に予定されていたがコロナ禍で延期となった『般若経』『維摩経』『大智度論』と関連作品の回を、改めて実施する。連続する二日間に一日あたり二本、計四本の研究発表を行い、最初の一本を班長、他三本を班員が担当する。第二回は9月、第三回は3月に開催し、これまでにカバーできなかった領域に関する各論の発表、及び参加者全員の討論を通して、3年間の総括と展望を行う。

また関連企画として12月10・11日の両日、ドイツ研究振興協会(DFG)と日本学術振興会(JSPS)の助成を得て、日独二国間学術交流セミナー『美術史学・考古学から見た伝統東アジアにおける「見えない」ものの変容』を、班長が所属するドイツ・ヴェルツブルク大学

で開催することが確定している。同セミナーでは当班所属メンバーの若手・中堅研究者7名が研究発表し、これと同数のドイツ在住研究者と対論を行うことによって、伝統東アジアの芸術を解釈するための共通基盤の形成をめざす。

### 13. 次年度の経費

		開催回数	国内出張旅費(延べ)	支出予定額
国内旅費	研究会参加費	2	8	320000
	一般旅費			
海外旅費	渡航旅費	2	2	430000
	招へい旅費			
謝金(講演謝金、研究協力者金、その他の謝金)				
消耗品等経費				
その他				
合計				750000

### 14. 研究成果公表計画および今後の展開等

次年度は3年の研究期間中に研究発表を行った者が論文を執筆、これを取りまとめた書物を編集し、翌2022年度中に公刊する。関連企画としてドイツでの開催を計画している日独二国間学術交流セミナーでは、両国の主に若手の研究者が発表、対論することによって交流・連携を強め、両者の協力関係を軸に、将来的より本格的な共同研究を立ち上げる可能性を模索する。また当班には日本在住の外国人メンバー多数が参加している。この利点をいかし、芸術を含めた東洋文化史研究の国際的な拠点としての人文研の役割を、対外的にアピールすることに貢献したい。



# 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の2年目)

## 1. 研究課題

「システム内存在としての世界についてのアートを媒介とする文理融合的研究」

Research in ‘totally-systematized world’: media-art, humanities, and natural science

## 2. 研究代表者氏名

三輪 眞弘

Masahiro MIWA

## 3. 研究期間

2019年4月-2022年3月(2年目)

## 4. 研究目的

現在、われわれ人類は人為的エネルギーに支えられた高度テクノロジーの只中で生きており、一見「自然」や「環境」や「心」と見えるものすら、システムなしに存立し得ない状況に至っている。本研究はこの認識から出発する。そして生命や心さえ含む地上の全存在が巨大システムに組み込まれていくこの時代の相貌につき、「サイバネティクス」「テクノロジー」「メディア」「情報学」を切り口とし、芸術創造に携わる申請者が媒介となることで人文学系と自然科学系の知見の総合をはかり、学知の認識を紙媒体だけでなくビデオアートや音楽作品の制作という感性的次元において発信する可能性を探る。これが本研究の目的である。つまり本研究は ①全人類的な問題についてのアートを媒介とする文理融合研究の実践モデルを示し、かつ ②学知を感性メディアを通してより直接的に社会へと接続しようとするものである。なお「システム」についての申請者の考えについては『三輪眞弘音楽藝術 全思考 一九九八～二〇一〇』（アルテスパブリッシング、2010年）を参照されたい。

We are now living in a totally systemized, high-technology world which is completely dependent on electrical energy, and even things that we regard as ‘Nature’ or the ‘Environment’ or the ‘Human Spirit’ could not continue to exist without this system. In this project, characteristics of the contemporary world will be researched in terms of cybernetics, technology, media and information theory. The overall purpose of this research is to synthesize knowledge of both natural science as well as the humanities, and to create media-based art works inspired by this research.

## 5. 本年度の研究実施状況

本年度は4回のズーム研究会のほかに、これまでの議論を触媒として制作されたオンライン・イベント「ぎふ未来音楽展 2020 三輪眞弘祭 ー清められた夜ー」(9月19日)をライブ配信し、「集えない時代」の意味を問うた。このイベントは特設サイトを設けた(英語版もあり)。当日リアルタイムのみの中継であったが、視聴回数は3156、全体の5%が海外からの視聴だった(アメリカ、インドネシア、ドイツ、イギリス、オーストリア、台湾など)。また公演当日のウェブサイト訪問者は2583人(のべではなく、個別ユーザ数)、ページビュー数 9819回である。また8月28日にはオンラインでイベント:「プロローグ「音楽の終わりの終わり」は、ここからはじまる——」を中継した。また研究班での議論に基づく論考『「第九」- 再び抱き合えるか』(8月4日 朝日新聞朝刊全国版・論考)を発表、また三輪のイベントとセットの形で9月に発行された『音楽の危機』(中公新書)は四大新聞を含む15を超えるメディアの書評等で取り上げられ、1月1日(22時~)のNHK・FMで坂本龍一により紹介された。また三輪と岡田による動画「コロナ時代の未来の音楽」を制作してYoutubeにアップした。なお9月19日のイベントは朝日新聞12月17日「2020年の回顧」欄(音楽)において片山杜秀氏により「今年の三点」に選ばれた。さらには9月の公開イベントが『佐治敬三賞』に、そして公開イベントを対象として三輪眞弘が『サントリー音楽賞』に選ばれるという、ダブル受賞の快挙を成し遂げた。

## 6. 本年度の研究実施内容

2020-06-05 オンラインによる音楽はいかにして可能か? 発表者 三輪眞弘 情報科学芸術大学院大学

2020-06-21 ルーマン社会学紹介 発表者 藤井俊之 人文科学研究所

2020-08-28 ぎふ未来音楽展 2020 三輪眞弘祭 プレトーク ライブ配信 発表者 三輪眞弘 情報科学芸術大学院大学 コメントーター 岡田暁生 コメントーター 前田真二郎 情報科学芸術大学院大学 コメントーター 松井茂 情報科学芸術大学院大学

2020-08-30 プレトーク総括討論 発表者 岡田暁生

2020-09-19 ぎふ未来音楽展 2020 三輪眞弘祭 ー清められた夜 ライブ配信 発表者 三輪眞弘 情報科学芸術大学院大学 発表者 松井茂 情報科学芸術大学院大学 発表者 前田真二郎 情報科学芸術大学院大学

2020-11-01 動画『コロナ時代の未来の音楽』制作 発表者 三輪眞弘 情報科学芸術大学院大学 コメントーター 岡田暁生

2021-03-02 人工生命とバイオアートをめぐって 発表者 岩崎秀雄 早稲田大学

## 7. 共同研究会に関連した公表実績

『ぎふ未来音楽展 2020 三輪眞弘祭 プレトーク』(ライブ配信:8月28日)および『ぎふ未来音楽展 2020 三輪眞弘祭 ー清められた夜』(ライブ配信:9月19日)。双方とも特設サイトを設けた(英語版もあり)。動画『コロナ時代の未来の音楽』(youtube)を制作



8. 研究班員

所内・

岡田暁生、瀬戸口明久、佐藤淳二、藤井俊之、上尾真道

学外

三輪眞弘(情報科学芸術大学院大学)、松井茂(情報科学芸術大学院大学)、伊村靖子(情報科学芸術大学院大学)、佐近田展康(名古屋学芸大学)、岩崎秀雄(早稲田大学)、山崎雅史(株式会社NTTデータセキスイシステムズ)、前田真二郎(情報科学芸術大学院大学)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	外国人	若手研究者	若手研究者	大学院生	総計	外国人	若手研究者	若手研究者	大学院生
				(40歳未満)	(35歳以下)				(40歳未満)	(35歳以下)	
学内(法人内)	1	6	0		1	0	23			5	
国立大学	1	1			1		3			2	
公立大学	2	4					18				
私立大学	1	1					6				
大学共同利用機関法人											
独立行政法人等公的研究機関											
民間機関	1	1					5				
外国機関											
その他											
計	6	13	0	0	2	0	55	0	0	7	0
		(1)	(0)	(0)	(0)	(0)	(5)	(0)	(0)	(0)	(0)

( ) は女性で内数

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数	
		うち国際学術誌掲載論文数
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	1	
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)		
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)		
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)		
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)		

共同利用・共同研究による成果として発行した研究書

研究書の名称	編著者名	発行年月	出版社名
音楽の危機	岡田暁生	R2. 9	中公新書

11. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由  
なし

12. 次年度の研究実施計画

研究会での人文学の先端的議論を触媒としてアート作品を制作し、社会に問うことが本研究班の中心課題であるが、来年度は「バイオ／バイオアートと時間」を中心主題に据える。細胞時計を専門とする科学者（2名）、バイオアートの実践者および研究者（3名）を共同研究の講師として予定している。そして次年度も班長の三輪および班員の松井茂・前田真二郎・佐近田展康の共同制作による音楽映像イベントを企画中である。またこれまでの議論を本媒体の形でまとめていくが、本研究班の性格上、論文集ではなく写真やエッセイやインタビュー等を活用した形式を考えている。

13. 次年度の経費

		開催回数	国内出張旅費（延べ人）	支出予定額
国内旅費	研究会参加費	6	24	480000
	一般旅費			
海外旅費	渡航旅費			
	招へい旅費		3	150000
謝金（講演謝金、研究協力者金、その他の謝金）				120000
消耗品等経費				0
その他				0
合計				750000

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

引き続き今年度もマルチメディア的な形式で研究会の議論を社会発信する。音楽映像によるイベントのほかに、2020年度に引き続き Youtube 動画によるレクチャー、そして書籍媒体によるとりまとめを構想する。

# 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の1年目)

## 1. 研究課題

清代～近代における経学の断絶と連続：目録学の視角から

(Dis)Continuation of Jingxue from Qing Period to Modern Age: From the Perspective of Muluxue

## 2. 研究代表者氏名

竹元 規人

Takemoto Norihito

## 3. 研究期間

2020年4月-2023年3月(1年目)

## 4. 研究目的

中国は独自の伝統的学術を有し、それは長い歴史のなかで大きな変遷をたどって来た。本研究は、その学術の清代から近代にかけての断絶と連続を、次の視角から明らかにすることを目的とする。まず、章学誠の「六経皆史」説などを根拠として、「経学から史学へ」という命題が中国近世・近代思想史において言われるが、学術の淵源と展開を跡付け、学術を分類しながらその統一的把握を図る章の目録学の立場から出発して、経学が史学を含む様々な学術へと転換する契機を清代学術史の中に探る。次に、「六経皆史」への解釈等、清代学術に関する通説的理解がいかんにして確立してきたのか、清末以来の学術史の言説を見直すことで跡付ける。最後に、第一の視角によって得られた清代学術史の見通しの上に、第二の視角から跡付けられた近代学術史を位置づけることで、二つの視角を総合し、それによって清代から近代にかけての、経学の断絶と連続とを、鳥瞰的に明らかにする。

China has its own traditional scholarship, which has undergone a great deal of change throughout its long history. The purpose of this study is to clarify the (dis)continuity of Chinese scholarship from the Qing period to the modern era using the following perspectives. First, based on Zhang Xuecheng's contribution to Muluxue, we look for those opportunities in the history of scholarship throughout the Qing period that have allowed for the transformation of Jingxue into various academic disciplines, including history. Zhang's Muluxue traced the origins and development of scholarship, classified it, and tried to present it in a unified manner. The theory of "Liu Jing Jie Shi (the Six Classics are all history)" does

not necessarily only apply to the transformation “from Jingxue to history”. Second, we trace how the commonly held understanding of Qing scholarship, such as the interpretation of the theory of “Liu Jing Jie Shi”, was established by reviewing the discourse on the history of scholarship that has occurred since the late Qing period. Finally, we combine these two points of view to provide a bird’s-eye view of the (dis)continuity of Jingxue from the Qing period through to the modern era.

## 5. 本年度の研究実施状況

本研究班は、『文史通義』の会読・ならびに訳注作成を通じ、清朝学術のありかたを解明することを目的としており、本年度は同書巻四の「匡謬篇」から読解を進め、1月20日現在、同巻の「砭俗篇」までの訳注稿を作成し終えた。年度末までには、巻四を読了したうえで巻五を読み始める。

また本年度は、本研究班に先行する研究班「『文史通義』研究」班の成果として、『文史通義』巻三の訳注を完成させ、『東方學報』第95号（2020年12月）に掲載した。

さらに、3月14日に、研究班主催の国際シンポジウムを開催し（Zoomを使用したオンライン会議）、台湾・日本の研究者に講演を依頼する予定である。そのほか、2月初旬には、小型のオンライン研究会を予定しており、中国の若手研究者に研究発表を行ってもらい、班員の知見を広めることとしている。

## 6. 本年度の研究実施内容

2020-05-19 『文史通義』巻四会読 16 匡謬篇（1）古勝隆一 人文科学研究所  
2020-06-02 『文史通義』巻四会読 18 匡謬篇（2）古勝隆一 人文科学研究所  
2020-06-16 『文史通義』巻四会読 18 匡謬篇（3）古勝隆一 人文科学研究所  
2020-07-07 『文史通義』巻四会読 16 質性篇（1）臧魯寧 京都大学大学院文学研究科  
2020-07-21 『文史通義』巻四会読 16 匡謬篇（2）内山直樹 千葉大学  
2020-10-06 『文史通義』巻四会読 17 黠陋（1）小島明子 新潟大学  
2020-10-20 『文史通義』巻四会読 15 黠陋（2）成田健太郎 京都大学大学院文学研究科  
2020-11-17 『文史通義』巻四会読 14 黠陋（3）道坂昭廣 京都大学大学院人間環境学  
研究科  
2020-12-01 『文史通義』巻四会読 14 俗嫌 永田知之 人文科学研究所  
2020-12-15 『文史通義』巻四会読 15 鍼名 竹元規人 福岡教育大学  
2021-01-19 『文史通義』巻四会読 13 砭異 福谷彬 人文科学研究所  
2021-02-02 『文史通義』巻四会読 砭俗① 発表者 王歆 京都大学大学院文学研究科  
2021-02-16 『文史通義』巻四会読 砭俗② 発表者 王孫 京都大学大学院文学研究科  
2021-02-07 『文史通義』研究報告会① 「章学诚的文集论与清代学人文集编纂」 発表者  
林鋒 北京大学中文系・ポスドク研究員

2021-03-14 『文史通義』研究報告会② 「中国学術史と文献学——章学誠の学術構想を起点として」 発表者 張壽安、嘉瀬達男、永富青地 台灣中央研究院近史所研究員、小樽商科大学 言語センター教授、早稲田大学創造理工学部教授

7. 共同研究会に関連した公表実績

『文史通義』内篇三訳注、『東方學報』第95号（2020年12月）

8. 研究班員

所内

古勝隆一、永田知之、藤井律之、白須裕之、福谷彬

学内

宇佐美文理(文学研究科)、道坂昭廣(人間・環境学研究科)、中原佑真(文学部)、王孫涵之(文学研究科)、臧魯寧(文学研究科)、成田健太郎(文学研究科)、田尻健太(文学研究科)、王歆(文学研究科)

学外

竹元規人(福岡教育大学教育学部)、内山直樹(千葉大学大学院人文社会科学部)、渡邊大(文教大学文学部)、重田みち(早稲田大学演劇博物館)、山口智弘(駒澤大学文学部)、白石將人(中山大学歴史学部)、小島明子(新潟大学人文学部)、古橋紀宏(香川大学教育学部)、新田元規(徳島大学総合科学部)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
学内(法人内)		13 (1)	3 (1)	6 (1)	5 (1)	4 (1)	129 (13)	28 (13)	56 (13)	50 (13)	36 (13)
国立大学		4 (1)	0 (1)	1 (1)	1 (1)	0 (1)	34 (10)	0 (10)	10 (10)	10 (10)	0 (10)
公立大学		1 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	13 (7)	0 (7)	0 (7)	0 (7)	0 (7)
私立大学		3 (1)	0 (1)	0 (1)	0 (1)	0 (1)	17 (7)	0 (7)	0 (7)	0 (7)	0 (7)
大学共同利用機関法人											
独立行政法人等公的研究機関											
民間機関											
外国機関		1(0)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他											
計		0 (3)	21 (1)	3 (2)	7 (2)	6 (1)	193 (30)	28 (13)	66 (23)	60 (23)	36 (13)

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数	
		うち国際学術誌掲載論文数
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	4	3
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)	1	0
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	9	1
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)	0	0
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0	0

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

雑誌名	掲載論文数	掲載年月日	論文名	発表者名
《單周堯教授七秩華誕國際學術研討會論文集》	1	R2. 11	《論語》 鄉黨「立不中門」 皇疏考正	古勝隆一
《大夏與北魏文化史論叢》	1	R2. 8	漢趙劉淵家屬的儒學背景	古勝隆一
『香文化録』第5号	1	R2. 5	香纓考	古勝隆一
『中国研究月報』74号	1	R2. 5	「新文化運動」と「文化主義」	竹元規人
『論叢アジアの文化と思想』(29)	1	R3. 1	『陳亮集・増訂本』抄訳(三)	中嶋諒、福谷彬共訳

『書学書道史研究』 第 30 号	1	R2. 10	法帖画像アーカイブを研 究資源として活用するた めに」	成田健太郎、 中村覚、 水野遊大、 共著
『書論』第 46 号	1	R2. 10	王羲之と衛夫人の師承関 係について	成田健太郎
『書法漢学研究』28 号	1	R3. 1	董其昌に於ける陽明学と 禅理解に基づく書画論に 就いての考察	陳佑真、 松宮貴之、 共著
東英寿主編『唐宋八 大家の探求』	1	R3. 3	蘇軾の『周易』解釋に於 ける爻位及び爻間関係の 重視——注疏との比較を 中心に	陳佑真
川原秀城主編『漢学 とは何か：漢唐お よび清中後期の学術 世界』	1	R2. 06	鄭玄と王肅	古橋 紀宏
『人文科学研究』第 1 4 7 輯	1	R2. 12	王国維「人間詞」考—青 年期作者の経歴から見た 詞の背景—	小島明子
『歴史文化社会論講 座紀要』（17）	1	R2. 2	正倉院藏王勃詩序校証 （下）	道坂昭廣
『文史』131 号	1	R2. 5	今本『毛詩草木鳥獸蟲魚 疏』辨偽	王孫涵之
『日本中國學會報』 72 号	1	R2. 10	北宋初期における「注疏 の學」：邢昺『論語正 義』の編纂をめぐって	王孫涵之

11. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

コロナ禍のため、出張費が使用できなかったため、変更が生じた。

12. 次年度の研究実施計画

『文史通義』の訳注稿の作成は、本研究班の大きな目的のひとつでもあり、またそれによって清代学術を理解し研究するための手段でもある。2021 年度も、引き続き、同書の訳注を進めることとする。2020 年度と同様の開催頻度とし、だいたい 15 回程度の研究班開催を予定している。2021 年度は、『文史通義』巻五の前半部分を会読する予定である。

また、2021年度には、すでに2020年度までに読み終えた『文史通義』巻四の訳注稿を整理し、2021年12月発行予定の『東方學報』第96号に投稿する予定である。

さらに、清代学術に関する国際シンポジウムの開催を予定している。

なお、研究班ならびに国際シンポジウムの開催については、感染症の流行状況を考慮し、可能であれば対面の開催とするが、本年同様、そのほとんどをオンライン開催とする可能性もある。

### 13. 次年度の経費

		開催回数	国内出張旅費（延べ人）	支出予定額
国内旅費	研究会参加費	5	12	450000
	一般旅費			
海外旅費	渡航旅費			
	招へい旅費			
謝金（講演謝金、研究協力者金、その他の謝金）				200000
消耗品等経費				100000
その他				
合計				750000

### 14. 研究成果公表計画および今後の展開等

2021年度には、すでに2020年度までに読み終えた『文史通義』巻四の訳注稿を整理し、2021年12月発行予定の『東方學報』第96号に投稿する予定である。

全体の計画としては、先行する『『文史通義』研究班』の成果とあわせ、期間内に『文史通義』内篇五巻すべてに訳注を施す予定である。

さらに、中国学術史・清代学術および目録学に関する研究書を刊行することを目標としている。



# 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の1年目)

## 1. 研究課題

「日本の伝統文化」を問い直す

Rethinking Japanese Traditional Culture

## 2. 研究代表者氏名

重田 みち

Michi SHIGETA

## 3. 研究期間

2020年4月-2023年3月(1年目)

## 4. 研究目的

明治期以来「日本の伝統文化」の重要な一翼をなすものと位置づけられ、紹介されてきた芸道文化―茶道・能楽・花道・蹴鞠等、及びその空間を構成する建築・庭園・絵画・器物等の文物―は、実際のところ、中世以来の芸道文化の実態を忠実に反映してはいない。

①「日本」文化とは言っても実際には大陸文化的性質が強い、②芸道文化を規定してきたとされる「禅」文化にしても、実際のところ様々な思想的・文化的要素から複雑に構成されており、単線的な影響関係を想定することが困難である、③欧米に対抗するために近代日本が要請したのが「伝統」という権威付けであり、結果、芸道が古来変わらぬものであるかのような静態的な印象を仮構している、等々の問題点である。そのような理解によって不可視化された芸道の様々な面に着眼し、あらためて歴史的・実証的な考察を加え、近代以降の理解を乗り越える視座を獲得することを本研究班の目的とする。

## 5. 本年度の研究実施状況

本年度は5回（うち1回は3月開催予定）の研究会と1回のシンポジウムをした。芸能史、美術史、音楽史、禅思想史などの分野の研究報告のほか、基本文献の会読、方法的検討などを実施した。

## 6. 本年度の研究実施内容

2020-05-31 問題提起「日本の伝統文化」とはどういうものとされてきたか：鈴木大拙と久松真一の著作をとおして 発表者 重田みち 京都芸術大学 コメンテーター 古勝隆一  
人文科学研究所

2020-07-19 リーディング：宮本常一・村井康彦・守屋毅「共同討議：雑談」 発表者 菊地暁 日本中世の諸芸と道学—発端としての世阿弥能楽論 発表者 重田みち 京都芸術大学 コメンテーター 福谷彬

2020-09-13 1937年パリ万国博覧会における「日本の伝統」を考える 発表者 高階絵里加 コメンテーター 宮崎涼子 京都芸術大学 茶禅一味説をめぐって 発表者 神津朝夫 立命館大学 コメンテーター 佐々木 孝浩 慶應義塾大学慶應義塾大学斯道文庫

2020-12-06 『宗鏡録』の成立と伝播：中国禅による仏教の統合と日本への影響 発表者 柳幹康 花園大学 コメンテーター 古勝隆一 近世音楽芸能における異相と外来文化 発表者 竹内有一 京都市立芸術大学 コメンテーター 今枝杏子 神戸女学院大学

2021-01-10 シンポジウム：「日本の伝統文化」を問い直す 漢字圏古医籍の定量・比較研究——その異・同と社会経済背景 発表者 真柳誠 茨城大学 日本絵画の向こう側——中国絵画史からの視点 発表者 宮崎法子 実践女子大学 異文化として日本を眺める——ヨーロッパ近世の眼差しとキリシタン時代の布教活動 発表者 シルヴィオ ヴィータ 京都外国語大学 司会 重田みち 京都芸術大学 司会 古勝隆一

2021-03-21 室町時代後期に何故絵入り冊子本が登場したのか？ 発表者 佐々木 孝浩 慶應義塾大学 コメンテーター 王孫 涵之 京都大学文学部 中世の巡礼僧と民衆社会—可能思想としての外来仏教— 発表者 上川 通夫 愛知県立大学 コメンテーター 菊地暁

## 7. 共同研究会に関連した公表実績

2021年1月10日ウェビナーシンポジウム「日本の伝統文化」を読み直す」を開催した。

## 8. 研究班員

所内

高木博志、菊地暁、岡村秀典、稲本泰生、古勝隆一、福谷彬、高階絵里加

学内

成田健太郎(文学研究科)、陳佑真(文学研究科)、王孫涵之(文学研究科)

学外

佐々木 孝浩(慶應義塾大学斯道文庫)、上川通夫(愛知県立大学日本文科学部)、水口拓壽(武蔵大学人文学部)、外村中(ドイツ・ヴェルツブルク大学)、井上治(京都芸術大学)、柳幹康(花園大学)、シビルギルモンド(ヴェルツブルク大学)、今枝杏子(神戸女学院大学)、西谷功(泉涌寺・心照殿)、神津朝夫(立命館大学)、ガリアペトコヴァ(関西学院大学)、田中健一(文化庁)、竹内有一(京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター)、宮崎涼子(京都芸術大学)

## 9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数				延べ人数					
		総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
学内(法人内)	1	8		2	2	1	25		6	6	3
国立大学		0									
公立大学	2	2					6				
私立大学	7	9	1	1	1		28	3	3	3	
大学共同利用機関法人	0	0									
独立行政法人等公的研究機関	1	1					3				
民間機関	1	1					3				
外国機関	2	2	1				7	3			
その他	0	0									
計	14	23	2	3	3	1	72	6	9	9	3
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)

## 10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

なし

## 11. 費目の30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

なし

## 12. 次年度の研究実施計画

第2年度にあたる次年度は6回の研究会を開催し、美術史、書道史、芸能史、科学史、禅宗思想史、儒教思想史などの分野における伝統形成の批判的検討を行い、東アジア・スケールの比較史的視野を導入しつつ、「日本の伝統文化」をめぐる理論的、実証的知見の整理を進める予定である。同時に、能、狂言、茶道、華道、作庭、建築など、「日本の伝統文化」を構成する諸ジャンルに関わる基礎文献の講読も行う予定である。また、最終年度に予定している成果報告シンポジウムの開催ならびに報告書の刊行に向けて、国内・海外（渡航可能になれば台湾、中国、韓国等）の研究者との打ち合わせ、関連アーカイブの見学・調査等の実施を予定している。

13. 次年度の経費

		開催回数	国内出張旅費(延べ人)	支出予定額
国内旅費	研究会参加費	5	20	200000
	一般旅費	2	2	60000
海外旅費	渡航旅費	1	1	60000
	招へい旅費	1	2	150000
謝金(講演謝金、研究協力者金、その他の謝金)				100000
消耗品等経費				100000
その他				30000
合計				700000

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

最終年度終了後の研究報告刊行に向けて、準備を進めていく予定である。

# 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の1年目)

## 1. 研究課題

実験性の生態学——人新世における多種共生関係に関する比較研究

Ecologies of Experimentality: A Comparative Approach to Multispecies  
Coexistence in the Anthropocene

## 2. 研究代表者氏名

モハーチ ゲルゲイ

Gergely Mohacsi

## 3. 研究期間

2020年4月-2023年3月(1年目)

## 4. 研究目的

近年、新薬の臨床試験や遺伝子組み換え作物の試験栽培が例示するように、科学実験の現場は実験室から社会へと浸透していく傾向が顕著に見られる。この展開の背景には、科学技術への市民参加の拡大や、多種多様なデータ処理技術の急激な進歩など、社会的かつ科学的な要因が挙げられる。このような従来の科学実験が閉鎖された空間と時間から、社会全体へと拡大していくという展開を、「実験性」

(experimentality) と呼ぶことができる。本研究では、この「実験性」において人間と動植物との相互作用がどのように再秩序化されるのかを、国内外の人文・社会科学で近年関心が高まる「人新世」(Anthropocene)と日本で展開している「環世界」および共生研究との対話を通して比較検討する。科学技術への期待やイノベーションの状況が共生そのものの存在論的な基盤となることを人文科学の視点から分析研究するために、本研究では目的を二つ設定する。一つ目の目的は、人間と他の生き物との共生関係をめぐる変遷を描き出す事例の比較研究を重ね、「実験性」における共生関係の政治的、科学的、情動的な結び付きを明らかにすることである。二つ目の目的は、人新世の人文科学における水平的な方法論の展開を受け止めて、実験的な多様性の可能性を提示することである。

From randomized controlled clinical trials of pharmaceutical products to the field testing of genetically modified organisms or smart city experiments, in the past half century the site of scientific testing has expanded from the

laboratory to society at large with all its political and ethical implications. These changes have been prompted by the increasing level of lay expertise and public participation in technological innovation, as well as by the rapid progress of data processing and computational infrastructures. We call the wide-ranging consequences of this transformation

“experimentality.” How has this public participation in experimentation reshaped the relationship between humans and other living things? In what sense can techno-scientific innovation be thought of as the ontological ground for multispecies togetherness in the Anthropocene? To answer these and other intellectually pressing questions, this project will engage in a comparative discussion with specialists in the environmental humanities in and outside Japan by building on existing theoretical frameworks such as *kansekai* (Umwelt) and *kyōsei* (togetherness). The aim of the project is twofold. First, it explores the political, scientific and affective reconstruction of ‘multispecies togetherness’ in the Anthropocene through specific case studies and comparative analysis. Second, it provides a methodological ground to engage with the lateral move in the humanities by creating an experimental space for the ethnographic study of multispecies coexistence.

## 5. 本年度の研究実施状況

初年度である本年度は、コロナ禍という状況の中で、全ての共同研究会をリモート形式（Zoom）にて実施してきた。班員全員が参加できることを最優先に、6回の共同研究会の一部を合併して、合計4日で開催されました。第一回共同研究会での班長（モハーチ）と副班長（石井）による本共同研究の趣旨説明のあと、第二～第六回共同研究会を通じて、「実験性」の概念を近年増加しつつある自然環境と人間社会とのかわりあいに関する人文・社会科学研究の中で位置付けるため、所内外の班員によるレビュー文献の解説と、実験性の人類学（石井）、社会学（モハーチ）、歴史学（瀬戸口・予定）、科学技術社会論（鈴木、モハーチ）などの分野における近年の研究動向に関する発表と討論を中心に研究活動を進めました。若手研究者などのゲストも交えて広く議論を行い、今後の国際的なネットワーク構築に不可欠な知識を得る活動を試みました。本年度の最後の共同研究会では、来年度の中間成果発表に向けて、具体的な内容について議論を開始しました。また、今後の執筆や議論などの共同作業のツールとして、本共同研究のウェブサイトを開設しました。

## 6. 本年度の研究実施内容

2020-07-11 実験性の生態学：人新世における多種共生関係に関する比較研究 共同研究の趣旨説明

実験性の生態学：人新世における多種共生関係に関する比較研究 発表者 石井 美保 京都大学人文科学研究所・モハーチ ゲルゲイ 大阪大学人間科学研究科

2020-09-28 実験性の生態学：人新世における多種共生関係に関する比較研究 実験性の生態学：土台と限界 発表者 モハーチ ゲルゲイ 大阪大学 人間科学研究科

2020-09-28 実験性の生態学：人新世における多種共生関係に関する比較研究 Traps and Experimental Systems 発表者 鈴木 和歌奈 日本学術振興会 PD

2020-11-28 実験性の生態学：人新世における多種共生関係に関する比較研究 自然保護、実験、生政治 発表者 石井 美保 京都大学人文科学研究所

2021-02-22 実験性の生態学：人新世における多種共生関係に関する比較研究 実験室からフィールドへ 発表者 瀬戸口 明久 京都大学人文科学研究所

2021-02-22 実験性の生態学：人新世における多種共生関係に関する比較研究  
Keywords for Experimentality Ecologies コメンテーター 班員全員

## 7. 共同研究会に関連した公表実績

なし

## 8. 研究班員

所内

石井美保、瀬戸口明久

学内

石川登(東南アジア地域研究研究所)

学外

モハーチ ゲルゲイ(大阪大学 人間科学研究科・准教授)、鈴木和歌奈(日本学術振興会)、森田敦郎(大阪大学 人間科学研究科)、中空萌(広島大学 人間社会科学研究科)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
学内(法人内)	2	9	2			2	21	5			13
		(7)	(2)			(2)	(13)	(5)			(13)
国立大学	3	6	3			2	16	9			4
		(3)	(3)			(2)	(6)	(4)			(2)
公立大学											
私立大学											
大学共同利用機関法人											
独立行政法人等公的研究機関	1	1					4				
		(1)					(4)				
民間機関											
外国機関											
その他											
計	6	16	5	0	0	4	41	14	0	0	17
		(11)	(5)	(0)	(0)	(4)	(23)	(9)	(0)	(0)	(15)

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)				
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)				
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	2		1	
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)	2	(0)	1	(0)
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)				



本年度発表された高いインパクトファクターを持つ雑誌等に掲載された場合、その雑誌名、インパクトファクター、掲載論文数、掲載された論文

雑誌名	インパクトファクター (数値)	掲載論文数	掲載年月日	論文名	発表者名
East Asian Science, Technology and Society	0.313	1	R3 (In press)	Toxic Remedies: On the cultivation of medicinal plants and urban ecologies	Mohacsi Gergely

共同利用・共同研究による成果として発行した研究書

研究書の名称	編著者名	発行年月	出版社名
不確実性の人類学	中川理・中空萌	R2.5	以文社

11. 費目の30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由なし

12. 次年度の研究実施計画

本共同研究の2年目となる来年度は、トロント大学とアムステルダム大学をはじめ、海外研究者との連携に取り組む。この連携を通じて、日本語の「共生」や「環世界」などの概念を用いることにより、国際的に注目されつつある人新世研究の蓄積に新たな視点を導入したい。また各班員は、人文学の方法と現場をつなぐという水平思考を試みながら、「実験性」の概念をそれぞれのフィールドにおける対話やワークショップを通じて科学者、環境保護運動家などに紹介し、実践者固有の概念と比較し新たな概念を生成するなど、共同作業を試みるが見込まれている。具体的な共同研究活動においては、班員や国内外のゲストによる研究発表という形で6回程度の研究会および1回程度の国際シンポジウムを予定している。

13. 次年度の経費

		開催回数	国内出張旅費(延べ人)	支出予定額
国内旅費	研究会参加費	4	4	150,000
	一般旅費	1	1	50,000
海外旅費	渡航旅費			
	招へい旅費	1	1	300,000
謝金(講演謝金、研究協力者金、その他の謝金)				50,000
消耗品等経費				
その他	RA雇用、ホームページ維持費			200,000
合計				750,000

#### 14. 研究成果公表計画および今後の展開等

本共同研究の2年目となる来年度は、初年の研究動向レビューの中間成果を踏まえつつ、研究班内の具体的なテーマを明確化・比較検討するため、「実験性」の調査研究に欠かせないとされる10個前後のキーワードを解説する用語集をプロジェクトの専用ホームページおよび学術ブログシリーズへ掲載することを計画している（仮題：A Dictionary for Experimentality）。また、最終年度に予定されているシンポジウムの開催に向けて、小規模の国際会議を開催する。

# 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(1年計画の1年目)

## 1. 研究課題

東アジア馬文化の研究

A Study of Horse Culture in East Asia

## 2. 研究代表者氏名

諫早 直人

ISAHAYA Naoto

## 3. 研究期間

2020年4月-2021年3月(1年目)

## 4. 研究目的

東アジアの諸地域は、中国でさえも家畜馬や馬車の利用において先進地域ではなく、西方からの直・間接的な影響を受けて二次的に始まったことが明らかとなつて久しい。またおおむね前1千年紀後半から後1千年紀前半にかけて、馬車から騎馬へと戦争における利用形態が大きく変化するとともに、家畜馬や騎馬の風習がそれまで認められなかった地域に急速に拡散していく。日本列島における馬の出現は、この変化の最終局面として捉えられる。このように個別の地域・時代に対する研究成果を紡ぎ合わせることによってある程度の概観は可能ではあるが、東アジアにおける家畜馬や馬車・騎馬利用の出現や普及、その後の展開のプロセスについて、資料の実態に即しつつも一貫した視野のもとに論じた体系的な研究はまだほとんどみられない。本研究は、こうした問題点に鑑み、中国・朝鮮半島・日本列島の馬車・騎馬文化と馬匹生産について、ユーラシア草原地帯と比較しつつ、関連する考古資料と文献史料の検討をもとに明らかにしようとするものである。

It has been shown that eastern Eurasia was not especially advanced in the use of domestic horses and chariots, and that even China was a secondary region compared to the direct and indirect influences derived from the West. From the latter half of the 1st millennium B.C. to the first half of the 1st millennium A.D., the way horses were used in war changed drastically as horse-riding replaced chariots and the customs associated with domestic horses and horseback riding rapidly spread to new areas. The appearance of horses on the Japanese Islands can be seen as the final phase of this change. In this way, it is possible to present a rough overview of horse culture in East Asia by collating research results for different regions

and time periods. However, there are relatively few comprehensive studies focusing on the emergence, popularization and subsequent development of domestic horses, chariots and horse-riding in Eastern Eurasia, based on actual archaeological data. In view of these problems, this study compared horse culture and horse production in China, the Korean Peninsula and the Japanese Islands with that in the Eurasian Steppes, using archaeological materials and historical documents.

## 5. 本年度の研究実施状況

本研究班では、2020 年度に3回の研究会を実施した。7月の第1回研究会では、ユーラシア草原地帯における馬利用の開始とその東方拡散について、研究報告と議論をおこなった。馬骨・歯の変形・摩耗状況やDNA分析、車や馬具の出土状況などから、前4千年紀から前3千年紀にかけて、ユーラシア各地で馬の家畜化と利用が進められていく状況が示された。12月の第2回研究会では、中国魏晋南北朝時代の馬文化をテーマとして、2本の研究報告をおこなった。まず、これまでに整理してきた中国の魏晋南北朝墓出土の陶馬や馬車・牛車明器のデータをもとに、文献史料と対比しながら、馬車と牛車の関係、鞍馬の役割、馬具の変化などを議論した。続いて、おもに5世紀の墓室壁画・漆棺画などの図像史料、および墓出土の動物骨をもとに、中国北朝の騎馬遊牧文化について検討を進めた。2月の第3回研究会では、日本古代の馬文化に着目し、おもに文献史料にもとづき古代の馬政について議論した。

## 6. 本年度の研究実施内容

2020-07-03 ユーラシア草原地帯の馬文化 馬利用の開始と東方拡散 発表者 中村大介 埼玉大学

2020-12-18 中国魏晋南北朝の馬文化 魏晋南北朝の「馬俑」について 発表者 大平理紗  
京都府立大学 考古・図像資料からみた北朝の騎馬・遊牧文化 発表者 向井佑介 京都大学  
人文科学研究所

2020-02-19 古代日本の馬文化 日本古代の馬政の特質 発表者 佐藤健太郎 関西大学博物館

## 7. 共同研究会に関連した公表実績

なし

## 8. 研究班員

所内

向井佑介、岡村秀典、古松崇志、藤井律之

学内

吉井秀夫（文学研究科）、坂川幸祐（文学研究科）

学外

森下章司（大手前大学）、井上直樹（京都府立大学）、中村大介（埼玉大学）、青柳泰介（奈良県立橿原考古学研究所附属博物館）、佐藤健太郎（関西大学博物館）、片山健太郎（奈良文化財研究所）、菊地大樹（総合研究大学院大学）、Joseph Ryan（岡山大学）、大平理紗（京都府立大学）、大谷育恵（金沢大学）

9. 共同利用・共同研究の参加状況

	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
学内(法人内)	2	6		1	1	1	15		3	3	3
国立大学	3	3		1	1		7		4	2	
		(1)					(2)		(2)		
公立大学	2	3		2	1	1	6		3	2	2
		(1)		(1)	(1)	(1)	(3)		(2)	(2)	(2)
私立大学	3	3					4				
		(1)					(1)				
大学共同利用機関法人	1	1					3				
独立行政法人等公的研究機関	2	2					3				
民間機関											
外国機関	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
		(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)
その他											
計	14	19	1	5	4	3	39	1	11	8	6
		(4)	(1)	(2)	(2)	(2)	(7)	(1)	(5)	(3)	(3)

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	0			
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)	0	(0)	0	(0)
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	2			
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)	0	(0)	0	(0)
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0		0	

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

雑誌名	掲載論文数	掲載年月日	論文名	発表者名
埼玉大学紀要 (教養学部)	1	R2. 9	先スキタイの馬具成立に 関する諸問題	<u>中村大介</u>
柳本照男さん 古稀記念論集	1	R2. 12	日韓における馬冑・馬甲 研究の現状と課題	<u>諫早直人</u>

11. 費目の30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

なし

12. 次年度の研究実施計画

なし

13. 次年度の経費

なし

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

昨年度の若手A班「東北アジアの騎馬文化と馬匹生産の研究」および今年度の若手A班「東アジア馬文化の研究」において蓄積した知識と経験をふまえ、その研究領域をさらに拡大・発展させるかたちで、2021年度から共同研究A班「東方ユーラシア馬文化の研究」を新たに発足し、3年計画で研究を進めていく予定である。そのなかで、今年度までに実施してきた若手A班の研究成果については、まず2021年度に一般向けの公開シンポジウムとして成果を公表し、その後、さらに一般向けの書籍などのかたちで公刊していく計画である。

# 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(1年計画の1年目)

## 1. 研究課題

西部講堂を中心とする戦後文化空間の研究

A study of post-war cultural space focusing on SEIBUKODO

## 2. 研究代表者氏名

朴 沙羅

Park Sara

## 3. 研究期間

2020年4月-2021年3月(1年目)

## 4. 研究目的

冷戦後の世界における世界的な価値観の動揺が、人文・社会科学の研究者から指摘されるようになって久しい。近年の「先進国」における経済成長の停滞と貧困問題は左右のポピュリズムを生み、それらは反権威・反エスタブリッシュメントとして、今や政治的・社会的に主流となった多様性の寛容を攻撃している。しかし「かつての価値観」や対抗文化の動揺がしばしば指摘されるのに比べて、実際のところそれらは何であったのかについて具体的な研究は多くない。本研究は、西部講堂という自主管理空間に関わった人々の回想を通じて＜ポスト68年＞の中で再生産されてきた価値観の内実を明らかにすることを試みる。こうした空間は「広い意味での5月の運動やその伝播の中で示された価値転換」（宮島喬「新しい社会運動とポスト68年の社会学」p.178）の産物である。地域社会において、またそこに関わった個々人の歴史においてこうした空間は一体何であるのか、それは価値観の動揺が指摘される現代社会において何を教えるのかを明らかにする。

Scholars in humanities and social sciences have been pointing out the shake of values in post-Cold War world. Recession and poverty in “developed” countries generates populism in both right and left sides, leading to attacks to diversity that is now a political/social mainstream. However, compared to the academic suggestions of uneasy “old values” in counterculture, scholars are lacking empirical studies to support the claim. This project tries to cast lights on values of “post-68” and practices that have reproduced them in Seibu Kodo, a milieu of autogestion, through personal recollections of the people who have joined there.

A place like Seibu Kodo is a product of “transformation of values indicated in May Events and its spread” (Takashi Miyajima, Atarashi shakai undo to posuto 68 nen no shakaigaku, p.178). The research project will clarify the meaning of the autonomous place in local community, personal histories, as well as its lessons to contemporary society, where certain values has no longer seem stable.

#### 5. 本年度の研究実施状況

研究目的の達成のために、1年を通して、西部講堂に関係した人々にインタビューの実施を重ねて、彼らから当時の文献の提供を受けることで、戦後日本文化運動史、学生運動史における西部講堂および関係者の検証をすすめた。また「21世紀の人文学」班や京大内の関連分野の研究者に積極的に声をかけることで、インタビューをより充実させるとともに、共同研究会で活発な議論を展開することができた。西部講堂の先行研究はこれまでなく、主に基礎を充実させるために本研究班の活動は割かれたが、今後の研究において重要な作業を推し進めることができた。

#### 6. 本年度の研究実施内容

- 2020-06-23 新開純也へのインタビュー
- 2020-07-10 山中透へのインタビュー
- 2020-10-22 高瀬照美、新開純也、飯田俊の鼎談及びインタビュー
- 2020-10-22 新開純也へのインタビュー
- 2020-10-22 共同研究会及び今後の打ち合わせ
- 2020-10-23 飯田俊へのインタビュー
- 2020-10-23 木村英輝へのインタビュー
- 2020-10-23 飯田俊へのインタビュー
- 2020-10-30 シモーヌ深雪及びBUBUへのインタビュー

#### 7. 共同研究会に関連した公表実績

なし

#### 8. 研究班員

所内

福家崇洋

学内

田所大輔（人間・環境学研究科）

学外

安岡健一（大阪大学）、伊藤存（京都市立芸術大学）



9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
学内(法人内)	3	7				1	21				8
		(1)					(1)				
国立大学											
公立大学	2	3					4				
		(1)					(1)				
私立大学											
大学共同利用機関法人											
独立行政法人等公的研究機関											
民間機関											
外国機関	1	1					1				
		(1)					(1)				
その他	7	7					16				
		(2)					(2)				
計	13	18	0	0	0	1	42	0	0	0	8
		(5)	(0)	(0)	(0)	(0)	(5)	(0)	(0)	(0)	(0)

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
	うち国際学術誌掲載論文数			
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	11			
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)				
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)				
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)				
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)				

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

雑誌名	掲載論文数	掲載年月日	論文名	発表者名
大原社会問題研究所雑誌	1	2020年6月	全国労農大衆党結党の検討	福家崇洋
大原社会問題研究所雑誌	1	2020年7月	転向に生きる苦悩 小林杜人の転向論に焦点をあてて	福家崇洋
筒井清忠編『昭和史講義』【戦後篇】(上)	1	2020年8月	戦後共産党史 レッドパージから六全協まで	福家崇洋
歴史学研究	1	2020年8月	書評 河西英通『「社共合同」の時代 戦後革命運動史再考』	福家崇洋
人文学報	1	2021年3月	映画「武器なき斗い」と戦後自主製作・上映運動	福家崇洋
出原政雄・望月詩史『「戦後民主主義」の歴史的研究』	1	2021年3月	大正デモクラシーと戦後民主主義 松尾尊兌の研究を中心に	福家崇洋
EURO-NARASIA Q	1	2021年3月	養徳社の風景(二)	福家崇洋
『社会民衆新聞・社会大衆新聞』復刻版	1	2021年2月	『社会民衆新聞』『社会大衆新聞』解題	福家崇洋
長妻三佐雄・植村和秀・昆野伸幸・望月詩史編『ハンドブック近代日本政治思想史』	1	2021年2月	満川亀太郎・国家社会主義	福家崇洋
大原社会問題研究所雑誌	1	2020年7月	社会主義運動史研究会から運動史研究会へ : 伊藤晃氏インタビュー	伊藤晃, 黒川伊織, 宇野田尚哉, 戸邊秀明, 福家崇洋
図書新聞	1	2020年6月	書評 武藤秀太郎『大正デモクラットの精神史 東アジアにおける「知識人」の誕生』	福家崇洋

11. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

なし

12. 次年度の研究実施計画

なし

13. 次年度の経費

なし

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

2021 年 7 月開催の、日本学生新左翼運動史に関する国際ワークショップで西部講堂と京大学生運動について成果報告をする予定である。またインタビューの文字起こしを適宜行い、解説を付すなどして、西部講堂関係資料として紹介していくことができると考えている。



# 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(1年計画の1年目)

## 1. 研究課題

小津安二郎映画の欧米における批評的受容に関する研究

Studies of the critical reception of Yasujiro Ozu' s films in the Occident

## 2. 研究代表者氏名

正清 健介

Masakiyo Kensuke

## 3. 研究期間

2020年4月-2021年3月(1年目)

## 4. 研究目的

本研究の目的は、小津安二郎映画が英国で公開された1957年から、米国のD. ボードウェルが『映画の詩学』を発表し小津研究がピークを迎える1988年までの欧米における小津受容の実態を当時の映画批評の考察を通して明らかにすることである。

小津研究は既に多くあるが、その殆どは1970・80年代の研究に代表される作品研究である。しかし本研究は、作品が歴史的にどのように受容されたかを明らかにする受容研究であり、中でも欧米での受容に着目する。このような受容研究は、生前の小津の国際的評価の低さもあって未だ進んでいない。またそもそも、本研究が考察対象とする欧米の小津映画批評の殆どは未邦訳であり、その存在自体が日本では知られていないという現状がある。本研究は、その未だ手付かずの小津批評を今回初めて網羅的に調査・考察しようと試みる点で有意義であり、小津作品の最初期の国際的評価を新たに提示するものとなる。

The purpose of this study is to analyse film criticism in order to shed new light on the reception of Yasujiro Ozu' s films in the Occident, from 1957 when his crowning achievement Tokyo Story (1953) was shown in London for the first time through to 1988 when the American film historian David Bordwell wrote Ozu and the Poetics of Cinema (1988) - the definitive work on Ozu' s films in English.

Although there are many studies of Ozu' s films, almost all of them, especially 1970s-' 80s works, consist of analysis of both the narrative and the cinematic textuality of the films. In contrast, this study is a study examining how Ozu' s films were received historically overseas, especially in the Occident (the United

States, England, and France). Such historical reception studies of Ozu's films have not been carried out before because of Ozu's lag in terms of overseas popularity. Also, since Western criticism of Ozu's films has not been translated into Japanese, it is almost unknown in Japan. This study intends to analyze this previously untouched Western criticism for the first time, thereby highlighting the beginnings of international appreciation for Ozu's cinematic art.

## 5. 本年度の研究実施状況

2020年4月～9月は、班員それぞれが小津映画を対象にした欧米の映画批評を、図書館や国立映画アーカイブ等にて調査し、リストを作成した。役割分担は次の通りである。正清と板井は仏国における映画批評を調査した。特に正清は映画批評誌『カイエ・ドゥ・シネマ』、板井は『ポジティブ』における小津映画批評を調査し、その考察まで進めた。伊藤と宮本は英語圏の小津映画批評を調査した。伊藤は英国の批評、宮本は米国の批評を調査し、リストを作成した。

2020年9月18日、オンライン（Zoom）で第一回研究会を開催した。班員は発表者としてそれぞれ4月からの調査の報告を行った。またこれに合わせて、副班長・森本はコメンテーターとしてそれぞれの報告に対してコメントをした。

10月～3月は、プロジェクト経費を活用し関係資料（書籍）を補いつつ調査で得た批評の読解・考察を進めた。

2021年3月12日、人文科学研究所内において第二回研究会を開催し、班員それぞれ研究成果の報告を行なった。

## 6. 本年度の研究実施内容

2020-09-15 小津安二郎映画の欧米における批評的受容に関する研究 フランス『カイエ』の小津映画評 発表者 正清健介 一橋大学大学院言語社会研究科 フランス『ポジティブ』の小津映画評 発表者 板井仁 一橋大学大学院言語社会研究科 アメリカの小津映画批評 発表者 宮本明子 同志社女子大学表象文化学部 イギリスにおける小津映画批評 発表者 伊藤弘了 関西大学文学部 コメンテーター 森本淳生 京都大学人文科学研究所

2020-03-12 小津安二郎映画の欧米における批評的受容に関する研究 フランスにおける小津映画受容 発表者 正清健介 一橋大学大学院言語社会研究科 発表者 板井仁 一橋大学大学院言語社会研究科 アメリカにおける小津映画受容 発表者 宮本明子 同志社女子大学表象文化学部 イギリスにおける小津映画受容 発表者 伊藤弘了 関西大学文学部 (コメンテーター 森本淳生 京都大学人文科学研究所)

## 7. 共同研究会に関連した公表実績

なし

8. 研究班員

所内

森本 淳生(副班長)

学外

正清 健介(一橋大学大学院言語社会研究科)、板井 仁(一橋大学大学院言語社会研究科)、  
宮本 明子(同志社女子大学表象文化学部)、伊藤 弘了(関西大学文学部／京都大学大学院  
人間・環境学研究科／京都府立大学文学部)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
学内(法人内)											
国立大学				1		1			2		2
公立大学											
私立大学				2					4		
大学共同利用機関法人				(1)					(2)		
独立行政法人等公的研究機関											
民間機関											
外国機関											
その他											
計	0	0	0	3	0	1	0	0	6	0	2
		(0)	(0)	(1)	(0)	(0)	(0)	(0)	(2)	(0)	(0)

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

なし

11. 費目の30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

なし

12. 次年度の研究実施計画

なし

13. 次年度の経費

なし

#### 14. 研究成果公表計画および今後の展開等

本研究は2021年3月に終了するが、それ以降、4人の班員それぞれは、研究期間中に得た研究成果を論文ないし研究ノートとして公表する予定である。その発表媒体は、4人の班員が所属する学会（日本映画学会、表象文化論学会、日本映像学会等）の学会誌、もしくは所属研究機関の紀要・機関誌になる。

今後の展開としては、今回の研究で対象とした欧米の小津映画批評のいくつかを班員自ら邦訳し、「欧米小津映画批評集」として集成し、共訳書として刊行することを目指したい。



# 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(1年計画の1年目)

## 1. 研究課題

東アジアにおける阿弥陀如来の表象

The Representation of the Amitabha Tathagata in East Asia

## 2. 研究代表者氏名

高橋 早紀子

Takahashi Sakiko

## 3. 研究期間

2020年4月-2021年3月(1年目)

## 4. 研究目的

西方極楽浄土の教主である阿弥陀如来は、大乘仏教の中心的な尊格である。阿弥陀如来に関する造形芸術は独尊形式や三尊形式の尊像、浄土変相図や来迎図と多様で、そこには阿弥陀如来に対する様々な思想や信仰の反映が考えられる。

そこで本研究の目的は、東アジアにおける阿弥陀如来の表象についての考察を通じて、阿弥陀如来に対する多様な思想や信仰の一端を追究することにある。具体的には、中国や日本の作例を主な対象として阿弥陀如来の像容や極楽浄土の様相について検討し、図像上の特色や思想的背景に関する議論を深めることを目指す。

日本・中国・西域・ガンダーラの美術史学や考古学を専門とする班員を中心に、広い視野から阿弥陀如来の造形芸術について考究する本研究には、分野横断的学際研究としての意義がある。さらに、当該分野の第一線で活躍する若手研究者の講演を計画する本研究班には、研究期間終了後にも持続可能な若手研究者の学術ネットワークを構築するという意義もある。

The Amitabha Tathagata, the ruler of the Western Pure Land, is one of the primary Buddhas of Mahayana Buddhism. The various artworks that have been created, such as the images of individual Amitabha or the Amitabha Triad, the representation of the Western Pure Land, and the image of the descent of Amitabha, all reflect various thoughts or expressions of faith in the Amitabha Tathagata. This research team seeks to investigate these various aspects of religious thought or faith by examining how the Amitabha Tathagata and the Western Pure Land have been

represented in East Asia. For instance, we will hold two workshops and discuss the various iconographic and religious functions, based on the differing imagery and representations of the Amitabha Tathagata and the Western Pure Land in China and Japan. This research team, including art historians and archaeologists who specialize in Gandhara, the Western Regions, China, and Japan, will also help advance interdisciplinary studies.

#### 5. 本年度の研究実施状況

東アジアにおける阿弥陀如来の表象についての考察を通じて、阿弥陀如来に対する多様な思想や信仰の一端を追究すべく、二回の研究討論会（11月7日・12月5日／Zoomによるオンライン実施／参加者約60名）を開催した。第一回の研究討論会「日本の仏教彫刻—作品生成の場」は、高橋とゲストスピーカーの山口隆介氏（奈良国立博物館）、三田覚之氏（東京国立博物館）を発表者とし、第二回の研究討論会「尊像の姿と作用—阿弥陀仏と四天王を例に」は、班員の田中健一氏（文化庁）、高志緑氏（日本学術振興会）、檜山智美氏（京都大学）、ゲストスピーカーの佐藤有希子氏（奈良女子大学）を発表者とし、班員以外の当該テーマに関心をもつ研究者にも公開した。いずれも、当日は約60名が参加し、最新の知見に基づく活発な質疑応答が行われた。

#### 6. 本年度の研究実施内容

2020-11-07 日本の仏教彫刻—作品生成の場 広隆寺講堂阿弥陀如来・地藏菩薩・虚空蔵菩薩坐像と道昌 発表者 高橋早紀子 愛知学院大学 快慶の阿弥陀仏造像 発表者 山口隆介 奈良国立博物館 法隆寺金堂における四天王の世界 発表者 三田覚之 東京国立博物館  
2020-12-05 尊像の姿と作用—阿弥陀仏と四天王を例に 飛鳥時代の阿弥陀造像 発表者 田中健一 文化庁 懺法との関わりから見た阿弥陀像—淳熙十年銘「阿弥陀浄土図」を中心に 発表者 高志緑 学振特別研究員・人文科学研究所 西域北道の仏教石窟壁画に描かれた四天王とその眷属の図像 発表者 檜山智美 京都大学白眉センター 中世絵巻に表された毘沙門天像（補足・質疑） 発表者 佐藤有希子 奈良女子大学

#### 7. 共同研究会に関連した公表実績

なし

#### 8. 研究班員

所内

稲本泰生、岡村秀典、向井佑介

学内

根立研介(文学研究科)、内記理(文学研究科)、檜山智美(京都大学白眉センター)、高志緑

(人文科学研究所)、折山桂子(文学研究科)、カルロッタ・アヴァンツィ(文学研究科)  
学外

折山桂子(独立行政法人九州国立博物館)、田中健一(文化庁)、田林啓(白鶴美術館)、佐々木  
守俊(清泉女子大学人文科学研究所)

#### 9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	外国人	若手研究者	若手研究者	大学院生	総計	外国人	若手研究者	若手研究者	大学院生
				(40歳未満)	(35歳以下)				(40歳未満)	(35歳以下)	
学内(法人内)	3	8	1	2	1	2	17	2	4	2	4
		(4)	(1)	(1)	(1)	(2)	(10)	(2)	(2)	(2)	(4)
国立大学	6	22	6	2	0	17	33	9	3	0	26
		(13)	(3)	(2)	(0)	(11)	(20)	(5)	(3)	(0)	(17)
公立大学	2	2	1	0	0	1	2	1	0	0	1
		(1)	(1)	(0)	(0)	(1)	(1)	(1)	(0)	(0)	(1)
私立大学	17	30	7	3	2	17	38	7	4	3	21
		(14)	(4)	(2)	(2)	(7)	(14)	(4)	(2)	(2)	(9)
大学共同利用機関法人	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
独立行政法人等公的研究機関	13	17	1	4	4	0	20	1	4	7	0
		(9)	(1)	(1)	(3)	(0)	(10)	(1)	(1)	(5)	(0)
民間機関	3	3	0	0	0	0	3	0	0	0	0
		(1)	(0)	(0)	(0)	(0)	(1)	(0)	(0)	(0)	(0)
外国機関	8	9	7	0	0	1	9	7	0	0	1
		(5)	(4)	0	0	1	(5)	(4)	0	0	1
その他	4	0	0	0	0	0	6	0	0	0	0
		(2)	0	0	0	0	(3)	0	0	0	0
計	52	95	23	11	7	38	128	27	15	12	53
		(49)	(14)	(6)	(6)	(22)	(64)	(17)	(8)	(9)	(32)

#### 10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
	うち国際学術誌掲載論文数			
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)				
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)				
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	2			
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)				
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)				

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

雑誌名	掲載論文数	掲載年月日	論文名	発表者名
京都美術史学	8	R3.3（刊行 予定）	広隆寺講堂阿弥陀如来 像の造像背景と道昌	<u>高橋早紀子</u>
鹿園雑集	5	R3.3（刊行 予定）	兵庫・浄土寺裸形阿弥 陀如来立像	<u>山口隆介</u>

11. 費目の30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

なし

12. 次年度の研究実施計画

なし

13. 次年度の経費

なし

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

次年度の研究成果公表計画として、高橋が広隆寺講堂阿弥陀如来像に関する研究内容を進展させ、広隆寺講堂地藏菩薩・虚空蔵菩薩像に関する論文を執筆する計画である。また、今後の展開として、阿弥陀の印相の問題に焦点を当てた共同研究を構想している。本研究班の研究発表で施無畏与願印・説法印・定印・来迎印の作例が取り上げられたが、儀礼における機能の問題については今後の課題とする点も多く、本研究班を通じて形成した若手研究者の学術ネットワークを活用して共同研究の推進を図りたい。

# 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(1年計画の1年目)

## 1. 研究課題

「長い19世紀」におけるインド・中国の社会経済史の比較 -税制に注目して

A Comparative Study of the Socio-Economic History of India and China throughout the Long Nineteenth Century - with Special Reference to Tax Systems

## 2. 研究代表者氏名

小川 道大

Ogawa Michihiro

## 3. 研究期間

2020年4月-2021年3月(1年目)

## 4. 研究目的

本研究の目的は「長い19世紀」におけるインドと中国の社会経済史を比較する注目点を見出すことである。近年のアジア経済の興隆の中で、アジアからの世界史再考が近年の歴史学の重要な課題となっている。特に欧米による植民地支配が展開された18世紀後半から20世紀前半にかけての「長い19世紀」に関して、アジア間貿易研究の進展などによりアジア史の見直しが進められている。アジアの大国であるインドと中国の「長い19世紀」における社会経済史研究も個別にこの文脈で進展してきたが、日本における両国の歴史研究は交流が極めて少なく、アジアという枠組みで歴史を論じる研究視座も整っていないのが現状である。本研究が目指す「長い19世紀」における中印史の比較は、欧米からのアジア史観に捉われずに、アジア史が内包する多様性やアジアという枠組み自体を日本から再考するものであり、アジアからの世界史再考の一助となる。比較に当たっては、国家を支えた税制に注目し、前年度に行われた「長い19世紀」におけるインド・中国の社会経済史の比較」班よりもより具体的に中印の史的比較を行う。

This project aims to compare key points of Chinese and Indian socio-economic history throughout “the long nineteenth century”. Due to the recent growth of Asian economies, it has now become important to review global history from Asian perspectives - especially the way in which intra-Asian trade and other characteristics developed throughout the period of colonial rule by Europe during “the long nineteenth century”. Although much research has been carried out on the socio-economic history of China and India, which are both great Asian powers, the study of Asian history as a whole during “the long nineteenth century” has yet to be established in Japan because of the limited amount of academic

communication between scholars and historians who study each of these countries. By comparing Chinese and Indian history during the nineteenth century, Japanese scholars in this project reconsider the diversity of Asian history within a purely Asian framework, independent from Western views of Asian History. This project compares Chinese and Indian history by focusing specifically on the tax systems which not only supported both states financially, but greatly affected socio-economic relations in both states.

#### 5. 本年度の研究実施状況

本年度は対面の研究会を予定していたが、全てオンラインとなった。4月25日に第1回研究会を開催し、世界経済史会議パリ大会（WEHC2022）に応募するパネルの内容について検討を行った。その結果、巨大国家における資源配分をテーマにして土地制度、財政、航運、金融、商業を検討することとし、“Resource Distribution in the Mega-states with Small Governments: A Comparison between China and India, 1750-1950”というタイトルで申請することを決定した。9月18日には第2回研究会を開催し、社会経済史学会大会で実施するパネルについて、「趣旨説明」を村上、「空間・分配・秩序：土地制度をめぐる中印比較」を田口・小川、「工場労働者をめぐる中印比較」を神田・富澤、「中印海域ネットワークの比較分析ーボンベイと香港を中心にー」を木越が報告して討論を行った。

#### 6. 本年度の研究実施内容

2020-04-25 中印比較史の今後の計画について 発表者 村上衛

2020-09-18 転換期「巨大国家」における資源配分：中国・インドの土地・労働力・航運  
趣旨説明 発表者 村上衛 空間・分配・秩序：土地制度をめぐる中印比較 発表者 田口宏  
二郎 大阪大学 発表者 小川道大 金沢大学 工場労働者をめぐる中印比較 発表者 神田さ  
やこ 慶應大学 発表者 富澤芳亜 島根大学 中印海域ネットワークの比較分析：ボンベイ  
と香港を中心に 発表者 木越義則 名古屋大学

#### 7. 共同研究会に関連した公表実績

なし

#### 8. 研究班員

所内

村上衛

学外

小川道大（金沢大学国際基幹教育院）、岡本隆司（京都府立大学文学部）、神田さやこ（慶應義塾大学経済学部）、木越義則（名古屋大学大学院経済学研究科）、城山智子（東京大学大学院経済学研究科）、田口宏二郎（大阪大学大学院文学研究科）、富澤芳亜（島根大学教育学部）

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数				延べ人数					
		総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
学内(法人内)	1	1					2				
国立大学		6					13				
		(1)					(2)				
公立大学		1					2				
私立大学		3					5				
		(1)					(2)				
大学共同利用機関法人											
独立行政法人等公的研究機関											
民間機関											
外国機関											
その他											
計	1	11	0	0	0	0	22	0	0	0	0
		(2)	(0)	(0)	(0)	(0)	(4)	(0)	(0)	(0)	(0)

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数		
		うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	1		
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)	0		
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	4		
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)	0		
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0		

11. 費目の30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由  
なし

12. 次年度の研究実施計画  
なし

13. 次年度の経費

なし

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

2021年5月の社会経済史学会大会、2022年7月の世界経済史会議のパネルにおいてその成果を報告する予定である。



# 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の3年目)

## 1. 研究課題

チベット文明の継承と史的展開の諸相

Aspects of Historical Development and Transmission of the Tibetan Civilization

## 2. 研究代表者氏名

池田 巧

IKEDA Takumi

## 3. 研究期間

2018年4月-2021年3月(3年目)

## 4. 研究目的

チベット文明は、周辺諸地域との歴史的交流を通じて、宗教・儀礼・言語・社会制度などを広く浸透させ、独自の文明圏を築きあげた。本共同研究班では、交流史の諸相に関する研究成果を学際的に集積し、チベット文明の史的展開を多角的に分析して、ユーラシア世界におけるその位置づけの再評価を行なう。7世紀以降、チベット・ヒマラヤ地域は周囲の先行文明の影響を受けつつ、独自の文明を展開させてきた。11～12世紀に仏教を完全に消化して以降、より強固となったチベット文明は周辺文化と交流を繰り返しつつモンゴル～東アジアにその影響力を伸張させた。さらに20世紀半ば以降もその発信力は欧米社会までにも影響を与えている。このような発信力と柔軟性をチベット文明は如何に獲得したのか、また周辺諸文明とどのように相克・調和してきたのか。その具体像を探るべく、多様な視点からチベット文明の諸相と継承を学際的に分析する。

From the 7th century, the Tibetan civilization—its unique religions, rituals, languages, and social systems—gradually permeated the neighboring cultural areas via direct communications and trade. Our project compiles the results of interdisciplinary research carried out on the inter-cultural communication among these areas, reviewing and evaluating the aspects of the historical development and expansion of the Tibetan civilization in the Eurasian world. The Tibeto-Himalayan area, while influenced by preceding Asian civilizations, has developed an individual civilization. The Tibet civilization grew stronger after assimilating Buddhism in the 11-12th century, and by communicating with the neighboring cultural

areas, it spread through Mongol to East Asia; Moreover, its influence proved effective even in the modern European world of the late 20th century. How did the Tibetan civilization maintain such power and flexibility? How did the Tibetan civilization come in conflict and how did it attain reconciliation with neighboring civilizations? And how have elements of the Tibetan civilization been transmitted in modern society, even after the country itself ceased to exist? To find answers to such questions, we shall analyze the historical aspects and transmission of the Tibetan civilization from various academic angles.

#### 5. 本年度の研究実施状況

最終年度に当たる本年度は、大きく分けて以下の2つの活動を中心に実施した。

1) 本研究班の活動成果を反映した概論『チベットの歴史と社会』(岩尾一史・池田巧 [共編] 臨川書店) の刊行に向けて、編集会議と必要な修訂作業を継続して行った。

2) 研究動向の把握と研究情報交換を目的として Zoom による研究会議を開催した。1) については諸般の事情から内容の大幅な再編と調整の必要があり、編集作業の遅れが出ていたが、今年度で無事に編集作業を終え、年明け年度内に刊行した。2) については、班員からの話題提供により、\*チベットの地理情報と地図について \*チベットに伝わる日本人の起源伝説について \*チベット語典籍史料における時代区分の意識 といった研究報告と討論を行った。

#### 6. 本年度の研究実施内容

2020-10-17 チベット研究の諸問題 チベットの地図製作と地理情報について 発表者 池田巧

2020-11-21 チベット研究の諸問題 チベットにおける日本人の起源伝説について 発表者 池田巧

2020-12-12 チベット研究の諸問題 チベット語典籍史料における時代区分の意識 — 「サキャ派時代」と「バクモドゥ派時代」 発表者 山本明志 大阪国際大学

2021-01-23 チベット研究の諸問題 『チベットの歴史と社会』口絵写真ページの構成について 発表者 池田巧

2021-02-13 チベット研究の諸問題 『チベットの歴史と社会』刊行記念ウェブセミナーの開催計画について 発表者 池田巧

2021-03-19 チベット研究の諸問題 次年度人文研アカデミー：ウェブセミナーの開催方法について 司会 池田巧／柴田秀樹

7. 共同研究会に関連した公表実績

本研究班の研究報告書である岩尾一史・池田 巧 [編]『チベットの歴史と社会』上下  
(臨川書店、2021年3月)を刊行した。

8. 研究班員

所内

池田巧、稲葉穰、中西竜也

学内

熊谷誠慈(こころの未来研究センター)、マルク=アンリ・デロッシュ(総合生存学館)、  
安田章紀(こころの未来研究センター)、長岡慶(アジア・アフリカ地域研究科)

学外

武内紹人(神戸市外国語大学)、西田愛(神戸市外国語大学)、大川謙作(日本大学)、別所  
裕介(駒澤大学)、星泉(東京外国語大学)、根本裕史(広島大学)、池尻陽子(関西大学)、  
海老原志穂(東京外国語大学)、山本明志(大阪国際大学)、小西賢吾(金沢星稷大学)、山  
本達也(静岡大学)、小野田俊蔵(佛教大学)、三宅伸一郎(大谷大学)、小松原ゆり(明治  
大学)、村上大輔(駿河台大学)、井内真帆(神戸市外国語大学)、加納和雄(駒澤大学)、大  
羽恵美(金沢大学)、大西啓司(龍谷大学)、黒田有誌(龍谷大学)、岩尾一史(龍谷大学)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
学内(法人内)											
国立大学		7				28					
公立大学		(2)				(10)					
私立大学		3				9					
大学共同利用機関法人		(2)				(8)					
独立行政法人等公的研究機関		10				40					
民間機関		(2)				(5)					
外国機関											
その他											
計	0	20	0	0	0	0	77	0	0	0	0
		(6)	(0)	(0)	(0)	(0)	(23)	(0)	(0)	(0)	(0)

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

なし

11. 費目の30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

コロナ禍により対面による研究班の開催が難しくなったため、旅費に相当する予算を研究成果報告書の刊行と寄贈分買取の諸経費に振り替えて充当した。

12. 次年度の研究実施計画

本研究班は最終年度を迎えたが、コロナ禍の影響で、研究報告書の『チベットの歴史と社会』の刊行が遅れ、また企画していた出版記念講演会も開催できなかった。そこでC班として1年間の継続延長を行ない、研究報告書『チベットの歴史と社会』出版記念講演会をウェブセミナー形式で開催することを計画している。

13. 次年度の経費

なし

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

研究報告書の『チベットの歴史と社会』を関係機関や研究成果を共有すべき個人研究者に寄贈する。また同書の構成に基づき、歴史篇、宗教篇、社会篇、言語篇ごとに執筆者2名を講演者として出版記念連続セミナーを4回にわたり開催したいと考えている。講演会はウェブセミナー形式で行うべく準備を進めている。

# 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の2年目)

## 1. 研究課題

近代京都と文化

Modern Kyoto and Culture

## 2. 研究代表者氏名

高木博志

Takagi Hiroshi

## 3. 研究期間

2019年4月-2022年3月(2年目)

## 4. 研究目的

本研究では、近代の京都と文化を対象としつつ相対化する。今日、京都は、年間5500万人以上が訪れる世界でもっとも人気のある観光都市である。「日本文化を創り出してきた京都」、「おもてなしの文化」、雅な貴族文化などとバラ色に表象され、文化庁移転のうたい文句にもなる。こうした京都イメージは、近現代を通じて、政治的、社会的に創り出された側面が強い。それに対して近代京都の文化について、民衆の生活・花街の性・差別の問題といった周縁性や、文化をめぐる政治や地域社会とのかかわりなどを含み込んだものとして捉えなおしてゆきたい。そのために、政治・教育・社会運動・経済・社会・宗教・思想や美術・映画・文学・建築・造園など多様な歴史学の分野を専攻する研究者が、自分の専門領域から一歩踏み出して、近代京都の「文化」を広くとらえ直して考えてゆきたい。今まで行った、「近代京都研究」(2003~2005)「近代古都研究」(2006~10年)「近代天皇制と社会」(2011~16年)の共同研究を踏まえ、地域をめぐる学際的で批判的な共同研究会を展開したい。

## 5. 本年度の研究実施状況

本研究班は、対面による研究会実施を原則としているため、本年前半は、新型コロナウイルスの感染拡大及び緊急事態宣言の発令により、当初予定していた研究会が実施できなかった。本年最初の研究会は、9月12日に開催した宇治川巡見である。感染対策を十分に講じた上で、宇治川周辺の茶園や天ヶ瀬ダムを見学し電力開発や生業の歴史を資史料から検討した。10月31日には、京都文化博物館の「舞子モダン」展との共催企画として、同博物館学芸員・植田彩芳子氏による展示解説と研究報告を行い、班員全体で深い議論を行った。11月7日には、「大正期京都のロマン主義」に関するシンポジウムを開催した。本来は一般

公開する予定であったが、感染症対策のため、班員内部にのみ公開するクローズドな会となったが、地理学・歴史学・美術史・文学・映画研究と学際的に大正期の文化とロマン主義概念を鍛え直す内容となった。研究会参加者は両日ともに20人前後に及び、活発な議論が繰り広げられた。2021年3月27日には、久保田米僊・吉川観方という単に美術の領域にとどまらず、ジャーナリズム・映画など広く文化や社会にはみ出す、本研究班の趣旨に沿う報告を得た。

## 6. 本年度の研究実施内容

2020-09-12 宇治川巡見

2020-10-31 「舞妓モダン」展をめぐる研究会・観覧 展覧会「舞妓モダン」展のガイダンス 発表者 植田彩芳子 京都文化博物館 舞妓「モダン」展の観覧 「舞妓モダン」をめぐる鼎談 発表者 植田彩芳子・加藤政洋・高木博志 京都文化博物館・立命館大学・京都大学人文科学研究所

2020-11-07 「大正期京都のロマン主義—吉井勇・花街・国展・映画」シンポジウム 大正期京都のロマン主義 発表者 高木博志 人文科学研究所 『五足の靴』『夢の女』の発見—異国憧憬のまなざしと〈祇園〉 発表者 細川光洋 静岡県立大学 大正期京都の都市空間—〈光と影〉三景— 発表者 加藤政洋 立命館大学 国画創作協会結成の位置と意義 発表者 中野慎之 文化庁 マキノ映画における京都の花街・舞妓表象 一万博から「祇園小唄 繪日傘 第一話 舞ひの袖」(1930)へ— 発表者 富田美香 国立映画アーカイブ

2021-03-27 「久保田米僊と明治期京都画壇」 発表者 森光彦 京都市学校歴史博物館 「吉川観方と京都文化」 発表者 松川綾子 奈良県立美術館

## 7. 共同研究会に関連した公表実績

なし

## 8. 研究班員

所内

高木博志、岩城卓二、高階絵里加、福家崇洋、永田知之、池田さなえ

学内

谷川穰(文学研究科)、藤原学(人間・環境学研究科)、田中智子(教育学研究科)、木下千花(人間環境学研究科)、

学外

長志珠絵(神戸大学大学院国際文化学研究科)、國賀由美子(大谷大学文学部歴史学科)、北野裕子(龍谷大学)、丸山 宏(名城大学農学部)、玉城玲子(向日市文化資料館)、日向伸介(大阪大学言語文化研究科)、高久嶺之介(同志社大学)、山本真紗子(立命館大学)、平山 昇(神奈川大学 国際日本学部国際文化交流学科)、加藤政洋(立命館大学文学部)、市川秀之(滋賀

県立大学人間文化学部)、清水重敦(京都工芸繊維大学)、並木誠士(京都工芸繊維大学)、植田彩芳子(京都文化博物館)、大矢敦子(京都文化博物館)、中野慎之(文化庁 文化財第一課)、原田敬一(佛教大学歴史学部)、本康宏史(金沢星稜大学 経済学部)、中川理(京都工芸繊維大学)、ジョン・ブリー(国際日本文化研究センター)、細川光洋(静岡県立大学国際関係学部)、イリナ・ホルカ(東京大学大学院総合文化研究科)、鈴木則子(奈良女子大学)

### 9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
学内(法人内)		4	0	1	1	0	16		2	2	
		(1)	(0)	(1)	(1)	(0)	(7)		(2)	(2)	
国立大学		5	1	4	1	0	10	1	4	1	
		(1)	(1)	(2)	(1)	(0)	(4)	(1)	(2)	(1)	
公立大学		2	0	1	0	0	2		1		
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)				
私立大学		8	0	1	1	0	16		1	1	
		(3)	(0)	(1)	(1)	(0)	(9)		(1)	(1)	
大学共同利用機関法人		1	1	0	0	0	4	1	0		
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)		
独立行政法人等公的研究機関		4	0	2	1	0	4		2	1	
		(3)	(0)	(1)	(0)	(0)	(3)		(1)	(0)	
民間機関		0	0	0	0	0	3		3	3	
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(3)		(3)	(3)	
外国機関		0	0	0	0	0					
			(0)	(0)	(0)	(0)					
その他		0	0	0	0	0	0				
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)				
計	0	24	2	9	4	0	55	2	13	8	0
		(8)	(1)	(5)	(3)	(0)	(26)	(1)	(9)	(7)	(0)

### 10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	3		0	
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)	0		0	
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	32		11	
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)	0		0	
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0		0	

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

雑誌名	掲載 論文数	掲載 年月日	論文名	発表者名
史学雑誌	1	R2. 5	一二 天皇・宮中(近現代, 日本, 二〇一九年の歴史学界-回顧と展望-)	池田 さなえ
歴史地理教育	1	R2. 8	都市とモダニズムー金沢を中心に	本康 宏史
北国文華	1	R2. 9	金沢港建設論に火をつけた北國新聞	本康 宏史
岩城卓二、石井美保、田中祐理子、藤原辰史編著『環世界の人文学』人文書院	1	R3. 3	震災後文学の動物と書き直しー中森明夫、川上弘美、古川日出男のテクストを中心にー	ホルカ イリナ
Irina Holca, Carmen Sapunaru Tamas, Forms of the Body in Contemporary Japanese Society, Literature, and Culture	1	R2. 5	Home Is Where Mother Is, and the Way to a Man's Heart Goes through His Stomach: Bodies in the Kitchen (Yoshimoto Banana)	ホルカ イリナ
曹雪芹研究	1	R2. 9	林語堂『紅樓夢』英訳稿的日文転訳本研究	宋丹
中国翻訳	1	R2. 11	井波律子中国古典文学翻訳的守成与创新	宋丹
日本衣服学会誌	1	R2. 10	京都・染織祭と女性時代風俗衣裳ー服飾史の可視化に挑んだ人々ー	北野 裕子
山中弘編『現代宗教とスピリチュアル・マーケット』弘文堂	1	R2. 8	近代日本の鉄道と社寺参詣	平山 昇



教育史フォーラム	1	R2. 6	書評 新編『同志社の思想家たち』	田中 智子
同志社大学人文科学研究so『社会科学』	1	R2. 8	時局匡救事業と道路—昭和戦前期京都府の道はどのように変わってくるか—	高久 嶺之介
デザイン理論	1	R2. 7	和歌浦図研究一名所風俗図・試論	並木 誠士
Hiroshi Maruyama, John Breen and Hiroshi Takagi (eds.), Kyoto's Renaissance: Ancient Capital for Modern Japan, Renaissance Books, Kent, United Kingdom, 2020年7月	1	R2. 7	Buddhism and society in modern Kyoto	Yutaka Tanigawa
日本教育史研究	1	R2. 8	高橋陽一『共通教化と教育勅語』を読んで	谷川 穰
『鈴木大拙：禅を超えて』(山田将・John Breen 編)	1	R2. 10	序説	John Breen
『鈴木大拙：禅を超えて』(山田将・John Breen 編)	1	R2. 10	鈴木大拙と神道：批判の構造	John Breen
日文研	1	R2. 9	新型コロナウイルスの日々：日本とイギリスの間	John Breen
Journal of Religion in Japan	1	R2. 9	Sannō Matsuri: Fabricating Festivals in Modern Japan	John Breen

『近代日本宗教史 第1巻 維新の衝撃 ——幕末～明治前 期』（島藺進・末木文 美士・大谷栄一・西 村明編）	1	R2. 9	天皇、神話、宗教： 明治初期の宗教政策	John Breen
『「明治」という遺 産：近代日本をめぐ る比較文明史』（瀧井 一博編）	1	R2. 7	勲章外交：明治天皇 と世界の君主たち	John Breen
Hiroshi Maruyama, John Breen and Hiroshi Takagi (eds.), Kyoto's Renaissance: Ancient Capital for Modern Japan, Renaissance Books, Kent, United Kingdom, 2020年7月	1	R2. 7	Preface.	John Breen
Hiroshi Maruyama, John Breen and Hiroshi Takagi (eds.), Kyoto's Renaissance: Ancient Capital for Modern Japan, Renaissance Books, Kent, United Kingdom, 2020年8月	1	R2. 7	Introduction: In Search of the Kyoto Modern	John Breen, Maruyama Hiroshi and Takagi Hiroshi
Hiroshi Maruyama, John Breen and Hiroshi Takagi (eds.), Kyoto's Renaissance: Ancient Capital for Modern Japan, Renaissance Books, Kent, United Kingdom, 2020年9月	1	R2. 7	Performing History: Festivals and Pageants in the Making of Modern Kyoto	John Breen

Japan Focus	1	R2. 6	The Quality of Emperor-ship in 21st Century Japan: Reflections on the Reiwa Accession.	John Breen
ブリタニカ国際年間	1	R2. 7	令和の始まりに見る天皇制の現在	John Breen
The Meiji Restoration: Japan as a Global Nation (Robert Hellyer and Harald Fuess ed.)	1	R2. 4	Ornamental Diplomacy: Emperor Meiji and the Monarchs of the Modern World.	John Breen
谷川建司編『映画産業史の転換—経営・継承・メディア戦略』森話社	1	R2. 7	近現代史のなかの映画『祇園祭』—もう一つの明治百年	高木博志
Hiroshi Maruyama, John Breen and Hiroshi Takagi (eds.), Kyoto's Renaissance: Ancient Capital for Modern Japan, Renaissance Books, Kent, United Kingdom, 2020年8月、	1	R2. 4	The Restoration of the Ancient Capitals of Nara and Kyoto and International Cultural Legitimacy in Meiji Japan	Hiroshi TAKAGI
國華	1	R2. 9	岡本神草筆 口紅	植田彩芳子
鹿島美術研究 年報 (別冊)	1	R2. 11	太田喜二郎の研究—雑誌『徳雲』をめぐる京阪神文化人ネットワーク—	植田彩芳子
『日本美術のつくり方 佐藤康宏先生の退職によせて』羽鳥書店	1	R2. 11	描かれた舞妓—竹内栖鳳筆《アレタ立に》の史的位	植田彩芳子
日本建築学会計画系論文集	1	R2. 12	1930年代の台湾における武徳殿の建設	中川理・西川博美

短歌	1	R2. 5	北原白秋、吉井勇一 歌つくりと歌よみと	細川光洋
国際関係・比較文化 研究	1	R2. 9	吉井勇の戦中日記一 —「洛東日録」抄	細川光洋
『寺田寅彦『物理学 序説』を読む』窮理 舎刊	1	R2. 12	物理学序説 注釈	細川光洋

共同利用・共同研究による成果として発行した研究書

研究書の名称	編著者名	発行 年月	出版社名
MADE IN JAPAN 京都の匠： 世界を変える日本の伝統 工芸	前崎信也・山本真紗子 編	R2. 6	I B Cパブリッ シング
記憶の灯り 希望の宙へ いしかわの戦争と平和	本康 宏史監修、石川県 平和委員会	R2. 8	戦争をさせない 石川の会
Forms of the Body in Contemporary Japanese Society, Literature, and Culture	Irina Holca, <u>Carmen</u> <u>Sapunaru Tamas</u>	R2. 5	Rowman& Littlefield
近代図案帖 寺田哲朗コ レクションに見る機械捺 染の世界	並木誠士・ <u>上田文</u> ・青木 <u>美保子</u>	R2. 4	青幻舎
鈴木大拙：禅を超えて	<u>山田将</u> ・John Breen	R2. 10	思文閣出版
空想から計画へ	<u>中嶋節子</u> ・ <u>砂本文彦</u> ・中 <u>野茂夫</u> ・ <u>大田省一</u> ・中 川理編	R3. 3	思文閣出版

11. 費目の30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由  
なし

12. 次年度の研究実施計画

次年度が最終年度となる。「近代京都と文化」というテーマで歴史学・造園学・美術史・建築史・民俗学などの学際的な共同研究を3年間、続けてきたが、研究報告書の刊行に向けて準備してゆきたい。毎月2名の報告者をたて、9月には丹後への巡見も実施予定である。次年度の報告者はのべ18人、巡見1度の開催予定である。

今年度はコロナ禍で対面の研究会ができず開催回数が減ったが、次年度は情勢次第ではZOOMによる実施も検討し、予定通りの研究会開催に努力したい。共同研究のまとめを大きく二つの方向性で考えており、日本の「ロマン主義」の概念を明治後期の文化のみならず、近現代を通じた思想・政治・歴史顕彰・メディアなどの総体として鍛え直すことと、もう一つは「近代京都と文化」についても同様の切り口で再考することである。

### 13. 次年度の経費

	開催回数	国内出張旅費（延べ人）	支出予定額
国内旅費	研究会参加費	10	400000
	一般旅費		
海外旅費	渡航旅費		
	招へい旅費		
謝金（講演謝金、研究協力者金、その他の謝金）			
消耗品等経費			
その他			
合計			400000

### 14. 研究成果公表計画および今後の展開等

次年度中に、「近代京都と文化」にかかわる原稿を依頼し、2022年度に思文閣出版から共同研究報告書を刊行したい。今年度には「大正期京都のロマン主義」にかかわり、映画・美術・花街論・文学など大正期の思潮を再考する6本の報告をしたが、この核となるテーマの論文化とは別に、共同研究班のテーマ「近代京都と文化」に関わる論文を集約し、論文集の刊行に向けて努力したい。思文閣出版からの刊行物以外にも『人文学報』の特集号も考えている。「近代京都研究」「近代古都研究」「近代天皇制と社会」「近代京都と文化」と共同研究班の系譜においては、地域をめぐる学際的で批判的な共同研究会を展開してきた。そのネットワークや学術資源の蓄積をもとに、新たな課題を見いだしてゆきたい。



# 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の1年目)

## 1. 研究課題

環境問題の社会史的研究

Studies on the Social History of Environmental Problems

## 2. 研究代表者氏名

岩城 卓二

Iwaki Takuji

## 3. 研究期間

2020年4月-2023年3月(1年目)

## 4. 研究目的

日本の近世は、生産・生活の場の拡大と、天然資源の獲得のために山野河海を切り開く大開発の時代であった。開発による諸産業の勃興は経済的発展をもたらしたが、他方でそれらに起因する環境問題が発生し、社会問題化していたことは、各地に残される近世史料から知られる。しかし、その多くは一地域内の問題に止まり、環境問題が人の健康や生活環境に関わる公害として大きな社会問題となるのは1950年代以降のこととされる。近世以降、人々は環境問題に対してどう向き合ってきたのか。そこで本研究班では、日本の近世から現代までの環境問題について、とくに環境問題に対する民衆運動・社会運動に注目し、運動が起こった現場の社会構造をふまえて環境問題を考えていきたい。あわせて、世界で発生した環境問題をめぐる民衆・社会運動と比較検討し、被害の現場に生きる住民にとって環境問題とは何かを明らかにしていく。

Early modern Japan was an era of great development but also saw an expansion of production and human living space that resulted in the devastation of nature. Although the rise of various industries brought economic growth, historical sources show that it also caused various environmental problems which are now also recognized as social problems. However, most problems did not spread beyond local communities until the 1950s, when they finally began to be recognized as serious social crises, called *kōgai*, which critically affected public health and destroyed the living environment. How, then, have people confronted such issues throughout history? This research project will explore various environmental problems from the early modern period through to contemporary times, focusing on the social movements and social structures that framed them. We also plan to compare

environmental problems in Japan with those encountered in other countries, aiming to clarify the significance and]meaning of such problems for the people living with disaster.

#### 5. 本年度の研究実施状況

本年前半は、新型コロナウイルスの感染拡大及び緊急事態宣言の発令により対面型の研究会が開催できなくなったため、当初予定よりも開始が遅れたが、6月よりZoomによる研究会を開始した。本年は、日本近世・近代史を専門としつつも古気候学や民俗学・地質学など学際的な視野から研究を進めてきた気鋭の研究者による報告を軸に、日本史のみならず中国史・西洋史、更には文化人類学・哲学など多様な参加者による活発な議論が展開された。本年はこれに加えて、人文研研究班では初の試みである、Zoomによる研究会の録画も行った。

#### 6. 本年度の研究実施内容

- 2020-06-13 近世の河川・堤防・新開 発表者 市川秀之 滋賀県立大学
- 2020-06-22 近世日本の気候変動を考えるー異分野融合研究で日本史を捉え直すためにー  
発表者 鎌谷かおる 立命館大学
- 2020-07-13 近代日本の環境に関する専門的知識と足尾鉍毒事件 発表者 ピッテル・シリ  
アン フランス国立極東学院京都支部
- 2020-11-09 日記史料からみた山間部の生業と家族・社会関係ー『鉄五郎日記』を題材と  
して 1921～1941ー 発表者 沼尻晃伸 立教大学
- 2020-11-16 森と火と環境論ー帝国日本と科学的林業をめぐってー 発表者 米家泰作 京  
都大学文学研究科
- 2020-12-07 こどもを喰う川ー都市環境汚染と隔てて保つ衛生・安全 発表者 関礼子 立  
教大学
- 2020-12-21 鉄山・銅山の「ゴミ」ー鉄屎・緑青・灰毒からみる近世社会ー 発表者 岩城  
卓二 京都大学人文科学研究所
- 2020-02-01 「自然環境」と「野生」のはざままで：近代プロジェクトとしての開発と自然  
保護をめぐる問題 発表者 石井美保 京都大学人文科学研究所
- 2020-03-08 幕末期の炭鉍開発と幕府のエネルギー政策 発表者 高久智広 神戸市立博物  
館
- 2020-03-29 近世東北の鉄生産と森林・河川ー仙台藩領を事例としてー 発表者 高橋美貴  
東京農工大学

#### 7. 共同研究会に関連した公表実績

なし



## 8. 研究班員

### 所内

岩城卓二、小関隆、高木博志、石井美保、KNAUDT, Till、瀬戸口明久、平岡隆二、福家崇洋、藤原辰史、池田さなえ

### 学内

石川 登(東南アジア地域研究研究所)、ERICSON Kjell David 学際融合教育研究推進センター)、Andrea Flores Urushima(東南アジア地域研究研究所)、土屋由香(人間・環境学研究科)、山越言(アジア・アフリカ地域研究研究科)

### 学外

井黒忍(大谷大学)、Holca Irina(東京大学大学院総合文化研究科)、岡安裕介(NPO 法人京都アカデミア)、河野未央(尼崎市立地域研究史料館)、鎌谷かおる(立命館大学)、唐澤太輔(秋田公立美術大学大学院)、斎藤幸平(大阪市立大学大学院)、佐野静代(同志社大学)、高久智広(神戸市立博物館)、武井弘一(琉球大学)、田中雅一(国際ファッション専門職大学)、友松夕香(愛知大学)、朴美貞(立命館大学)、橋本道範(滋賀県立琵琶湖博物館)、松嶋健(広島大学大学院)、松村圭一郎(岡山大学大学院)、松本望(尼崎市立地域研究史料館)、青木聡子(名古屋大学情報文化学部)、河島裕子(尼崎市立歴史博物館あまがさきアーカイブズ)、ピッテル・シリアン(フランス国立極東学院京都支部)

## 9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
学内(法人内)		15	3	1	1	0	99	19	15	11	
		(4)	(1)	(1)	(1)	(0)	(30)	(3)	(11)	(6)	
国立大学		5	1	0	0	0	24	3			
		(1)	(1)	(0)	(0)	(0)	(9)	(3)			
公立大学		2	0	1	1	0	9		3	3	
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)					
私立大学		9	1	0	0	0	24	5			
		(6)	(1)	(0)	(0)	(0)	(14)	(5)			
大学共同利用機関法人		0	0	0	0	0					
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)					
独立行政法人等公的研究機関		5	0	0	0	0	21				
		(2)	(0)	(0)	(0)	(0)	(12)				
民間機関		1	0	0	0	0	1				
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)				
外国機関		1	1	0	0	0	2	2			
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)			
その他		0	0	0	0	0					
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)					
計	0	38	6	2	2	0	180	29	18	14	0
		(13)	(3)	(1)	(1)	(0)	(65)	(11)	(11)	(6)	(0)

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	5		0	
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)	0		0	
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	23		4	
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)	0		0	
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0		0	

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

雑誌名	掲載論文数	掲載年月日	論文名	発表者名
新修豊田市史編さん専門委員会編『新修豊田市史12 資料編 近代Ⅲ』	1	R2. 3	第五章 山と生業 第一節 山の管理 一 御料林、同解説	池田さなえ
大嶋えり子, 小泉勇人, 茂木謙之介編著『遠隔でつくる人文社会学知—2020年度前期の授業実践報告—』LP 雷音学術出版	1	R2. 10	京都大学「ILAS セミナー：近現代日本における「病」の歴史	池田さなえ
豊田市史研究	1	R3. 3	御料林経営と民有下戻し—現豊田市域の事例を中心として	池田さなえ
石井美保、岩城卓二、田中祐理子、藤原辰史編『地球危機時代の人文学—生・環境・文化をめぐる歴史と理論』人文書院	1	R3. 3	過去を生きる「病む身体」—病をめぐる学生との対話の記録から	池田さなえ

岩城卓二、石井美保、田中祐理子、藤原辰史編著『環世界の人文学』人文書院	1	R3. 3	震災後文学の動物と書き直し—中森明夫、川上弘美、古川日出男のテキストを中心に—	ホルカ イリナ
Irina Holca, Carmen Sapunaru Tamas, Forms of the Body in Contemporary Japanese Society, Literature, and Culture	1	R2. 5	Home Is Where Mother Is, and the Way to a Man's Heart Goes through His Stomach: Bodies in the Kitchen (Yoshimoto Banana)	ホルカ イリナ
濱西栄司・鈴木彩加・中根多恵・青木聡子・小杉亮子『問いからはじめる社会運動論』有斐閣	1	R2. 6	なぜ成功・失敗する？どのように影響を与える？——ドイツの原子力施設反対運動から	青木聡子
荒武賢一郎・野本禎司・藤方博之編『古文書が語る東北の江戸時代』（吉川弘文館）	1	R2. 11	山林資源と仙台藩 - 一八世紀前半の史料と事例から -	高橋美貴
筒井清忠編『昭和史講義 戦後篇・下』筑摩書房	1	R2. 8	公害・環境問題の展開	小堀聡
石井美保、岩城卓二、田中祐理子、藤原辰史編『地球危機時代の人文学—生・環境・文化をめぐる歴史と理論』人文書院	1	R3. 3	炭坑化する世界——空気を満たすテクノロジー	瀬戸口明久
史学雑誌	1	R2. 6	消費論からみた中世菅浦	橋本道範
Kawanabe, H., Nishino, M. & Maehata, M. (eds.), Lake Biwa: Interactions between Nature and People: Second Edition, Springer, Dordrecht	1	R2. 8	History of Funazushi, Fermentated Fishes from Lake Biwa.	MICHINORI HASHIMOTO

石井美保、岩城卓二、田中祐理子、藤原辰史編『地球危機時代の人文学—生・環境・文化をめぐる歴史と理論』人文書院	1	R3. 3	地域環境史の自然観論—琵琶湖産フナ属のコード化をめぐる	橋本道範
人と環境とコミュニケーション—災害の記憶と履歴化	1	R2. 11	学術の動向	関礼子
応用社会学研究	1	R3. 3	「ふるさと剥奪」と「ふるさと疎外」	関礼子
松本卓也・武本一美『メンタルヘルスの理解のために—こころの健康への多面的アプローチ』ミネルヴァ書房	1	R2. 4	日本の文化と心の病い—柳田國男の視点より	岡安裕介
『こころと文化	1	R2. 10	文化精神医学考—柳田國男に導かれて	岡安裕介
精神医学史研究	1	R2. 11	日本人の再生観と湯治文化	岡安裕介
石井美保、岩城卓二、田中祐理子、藤原辰史編『地球危機時代の人文学—生・環境・文化をめぐる歴史と理論』人文書院	1	R3. 3	神・米・靈魂—柳田國男と折口信夫の循環論	岡安裕介
現代思想	1	R2. 8	イタリアにおける医療崩壊と精神保健—コロナ危機が明らかにしたもの	松嶋健
KOREA TODAY	1	R2. 6	多文化社会韓国を診断する—濟州の外国人移住政策と韓国社会の病	朴美貞
KOREA TODAY	1	R2. 5	私は王でござる—在日に刻む王利鎬の歩み	朴美貞

大谷学報	1	R3.3	生み出される「公」の水-伝統中国における水をめぐる認識とその変容	井黒忍
経済科学	1	R3.3	高度成長期日本の原子力政策：軽水炉導入とナショナル・プロジェクト創設	小堀聡
筒井清忠編『昭和史講義 戦後篇・下』筑摩書房	1	R2.8	公害・環境問題の展開	小堀聡
Geographical Review of Japan Series B	1	R3.3	Japanese Colonial Forestry and Treeless Islands of Penghu: Afforestation Project and Controversy over Environmental History. , forthcoming	Komeie Taisaku
Liu T-j and Muscolino, M. S. (eds). Perspective on Environmental History in East Asia: Changes in Land, Water and Air. Routledge.	1	R3.3	Devastation and Indigenous People in Colonial Forestry: Representations of Taiwanese and Korean Vegetation Change in the Japanese Empire	Komeie Taisaku
地理歴史人類学論集	1	R3.3	元禄期の凶作・飢饉と能登奥郡	武井弘一

共同利用・共同研究による成果として発行した研究書

研究書の名称	編著者名	発行年月	出版社名
Forms of the Body in Contemporary Japanese Society, Literature, and Culture	Irina Holca, <u>Carmen Sapunaru</u> <u>Tamas</u>	R2.5	Rowman& Littlefield
人新世の「資本論」	斎藤幸平	R2.9	集英社
はみだしの人類学 ともに生きる方法	松村圭一郎著	R2.4	NHK 出版
クローズする眼差しー欧米と極東の朝鮮半島（在日記録シリーズ2）（仮）	王清一・朴美貞	R3.3	えにし書房
肖像の政治学（仮）	朴美貞	R3.3	えにし書房

11. 費目の30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由なし

12. 次年度の研究実施計画

研究実施計画3年目のうち2年目にあたる2021年度は、2020年度と同じく、月2回(8~9、1~2月除く)のペースで研究会を開催する。4~7月は、歴史学・文化人類学を中心とした具体的事象に基づく個別研究報告、10月以降は、これに加えて文学・哲学・経済思想を中心とした理論的な個別研究報告を予定している。2020年度の成果をふまえ、前近代人の自然観、開発と自然災害の因果関係、生業と環境問題についての検討を深める予定であるが、とくに日本社会で環境が社会問題化する過程について、国内の社会的状況の検討と合わせて、世界の諸国・諸地域の事例と比較しながら検討していきたい。また、COVID19の感染状況が改善されれば、当初の計画通り、環境問題が社会問題化する背景や争論・訴訟の内容が知られる近世・近代史料の収集や、公害問題の現場の調査も行う予定である。

13. 次年度の経費

		開催回数	国内出張旅費(延べ人)	支出予定額
国内旅費	研究会参加費	10	30	300000
	一般旅費			
海外旅費	渡航旅費			
	招へい旅費			
謝金(講演謝金、研究協力者金、その他の謝金)				50000
消耗品等経費				50000
その他				
合計				400000

#### 14. 研究成果公表計画および今後の展開等

班員各自が、研究班における個別研究報告・討論の成果を研究論文として公表するとともに、今後の共同研究の方向性を再調整する計画である。これらを通じて最終年度の成果公開の準備していく予定である。





# 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の1年目)

## 1. 研究課題

近現代中国の制度とモデル

Institutions and models of modern China

## 2. 研究代表者氏名

村上 衛

Murakami Ei

## 3. 研究期間

2020年4月-2023年3月(1年目)

## 4. 研究目的

本研究班は「近現代中国における社会経済制度の再編(2012~2015年度)」班、「転換期中国における社会経済制度」(2016年~2018年度)班を引き継ぐかたちで、中国近現代史研究の立場から制度史研究をさらに進展させていくものである。

本研究班では長期の歴史の中で生成し、社会・経済を規定してきた慣習・常識・規範・秩序・行動パターンといったものを「制度」とみなす。本研究班では、実証研究をベースにしつつ、中国近現代の社会・経済変動と中国人・外国人の接触にともなう摩擦のなかで浮かび上がる社会・経済制度をとらえ、そのモデル化を行う。そのモデルを、日本・インド・ヨーロッパなどの他地域のモデルと比較し、中国の制度の特性あるいは他地域との共通性を明らかにする。この作業を通じて、中国近現代史の立場から日本における比較制度史研究を進展させ、研究成果を国内外に発信していくことが本研究班の目的である。

This research project to promote institutional history succeeds two earlier projects: Reorganization of Social and Economic Institutions in Modern China (2012-2015) and Social and Economic Institutions in China during the Period of Transition (2015-2019). Institutions are customs, common sense, rules, orders, and behavioral patterns. Based on empirical studies, this project explores the institutions which emerged during the modern period due to social and economic changes and friction between Chinese and foreigners. Using these empirical studies, these institutions are modeled and compared to models from Japan, India, Europe, and other places. The purpose of this comparison is to highlight both what is unique about Chinese institutions and what they hold in common with other areas. From the perspective

of modern Chinese history, this project aims to promote comparative historical studies of institutions and to disseminate the project results.

#### 5. 本年度の研究実施状況

本年度は3年計画の1年目にあたり、当初は中堅以上、夏からは若手の報告を中心に実施した。新型コロナウイルスの感染拡大により、当初はオンラインで、感染縮小期にはオンラインとハイブリッドの併用で、計15回の研究会を行い、そのうち1回は海外(ロンドン)からの報告となった。対面の場合は学内の参加者が多数を占めたが、オンライン化により、国内のみならず、海外の参加者も増加し、先行する研究班の参加者数が20~25人ほどであったのに対して、今年度の参加者数は平均で40人に達した。コメンテーターは専門を重視して遠方からの招聘も予定していたが、今年度は多くがオンライン参加となった。いずれの報告に関しても、遠方の参加者からコメントをいただけるのがオンライン開催の大きなメリットとなった。なお、本研究班と関連して、現代中国研究センターでは合評会を共催した(2020年8月22日、岩井茂樹著『朝貢・海禁・互市——近世東アジアの貿易と秩序』)。

#### 6. 本年度の研究実施内容

- 2020-05-15 近現代中国の制度とモデル 「近現代中国の制度とモデル」班をはじめるにあたって 発表者 村上衛 誰が人々を導くのか——世紀転換期の香港における死体遺棄をめぐって 発表者 小堀慎悟 文学研究科 コメンテーター 帆刈浩之
- 2020-05-29 近現代中国の制度とモデル Ideology and Institutions: a new interpretation and periodization of economic changes in Modern China 1840-1950 発表者 Debin Ma 一橋大学 コメンテーター 木越義則 名古屋大学
- 2020-06-12 近現代中国の制度とモデル 1920年代上海周辺での涉外民事訴訟：特に破産処理と株主の有限責任に関連して 発表者 本野英一 早稲田大学 コメンテーター 箱田恵子 京都女子大学
- 2020-06-26 近現代中国の制度とモデル 近代长江中游船民与木帆船航运业研究 発表者 陳瑶 廈門大学 コメンテーター 太田出 人間・環境学研究科
- 2020-07-10 近現代中国の制度とモデル 民国期出版統計の復元：「民国図書数拠庫」の有用性を中心に 発表者 比護遙 教育学研究科 コメンテーター 楊韜 仏教大学
- 2020-10-09 近現代中国の制度とモデル 見逃す神話：1920年代における中国のナショナリズムとジェンダー 発表者 羅亜妮 文学研究科 コメンテーター 竹元規人 福岡教育大学
- 2020-10-23 近現代中国の制度とモデル 現代中国の中央集権制と党内コミュニケーション：中国共産党の「請示報告制度」を中心に(1948-1954年) 発表者 周俊 早稲田大学 コメンテーター 石川禎浩
- 2020-11-06 近現代中国の制度とモデル 明清交替期における社会と政権：福建汀州府寧化県を中心に 発表者 梁鎮海 文学研究科 コメンテーター 森正夫 名古屋大学

- 2020-11-20 近現代中国の制度とモデル 19世紀の東南アジア・中国間の貿易ダイナミクス：米・銀・為替の流通に着目して 発表者 小林篤史 東南アジア地域研究研究所 コメントーター 岸本美緒 東洋文庫
- 2020-12-04 近現代中国の制度とモデル 壬寅奇災下の災害救済：宣教師関連資料を手がかりに 発表者 土肥歩 同志社大学 コメントーター 山本真 筑波大学
- 2020-12-18 近現代中国の制度とモデル 米国宣教師 W. R. ランバスと中国——清末上海からのグローバル布教とそのモデル 発表者 川西孝男 関西学院大学 コメントーター 土肥歩 同志社大学
- 2021-01-22 近現代中国の制度とモデル 日中戦争期における中国法学界 発表者 久保茉莉子 成蹊大学 コメントーター 高見澤磨 東京大学
- 2021-02-05 近現代中国の制度とモデル 民国期における災害と救済景観 発表者 黄崢崢 人間・環境学研究科 コメントーター 堀地明 北九州市立大学
- 2021-02-19 近現代中国の制度とモデル 創刊から発達の道へ：在華日系漢字紙『盛京時報』が歩んできた最初の20年 発表者 徐璐 文学研究科 コメントーター 上田貴子 近畿大学
- 2021-03-05 近現代中国の制度とモデル 蒲豊彦著『闘う村落——近代中国華南の民衆と国家』合評会 発表者 高橋伸夫 慶応大学 発表者 丸田孝志 広島大学 発表者 都留俊太郎

## 7. 共同研究会に関連した公表実績

共同研究班の報告書として『転換期中国における社会経済制度』を1月に刊行した。

## 8. 研究班員

### 所内

石川禎浩、岩井茂樹、籠谷直人、都留俊太郎、平岡隆二、古松崇志、瞿艶丹、陳瑶、李ハンキョル

### 学内

江田憲治（人間・環境学研究科）、太田出（人間・環境学研究科）、貴志俊彦（東南アジア地域研究研究所）、小島泰雄（人間・環境学研究科）塩出浩之（文学研究科）、鈴木秀光（法学研究科）、高嶋航（文学研究科）、秋田朝美（経済学研究科）、巫靚（人間・環境学研究科）、王怡然（人間・環境学研究科）、王天馳（文学研究科）、関藝蕾（文学研究科）、呉舒平（法学研究科）、黄崢崢（人間・環境学研究科）、谷雪妮（文学研究科）、小堀慎悟（文学研究科）、徐璐（文学研究科）、角屋敷直哉（人間・環境学研究科）、張子康（文学研究科）、趙崧（法学研究科）、比護遙（教育学研究科）、梁鎮海（文学研究科）、林淑美（国際高等教育院）

### 学外

安東強（中山大學歴史系）、石川亮太（立命館大学経営学部）、岩本真利絵（釧路公立大学経済学部）、上田貴子（近畿大学文芸学部）、易星星（兵庫県立大学経済学研究科）、王艶文（京都府立大学文学研究科）、大坪慶之（三重大学教育学部）、岡本隆司（京都府立大学文学部）、

荻恵里子（京都府立大学大学院文学研究科）、小野達哉（同志社大学）、小野寺史郎（埼玉大学人文社会科学部研究科）、郭まいか（同志社大学グローバル・スタディーズ研究科）、梶谷懐（神戸大学経済学研究科）、片山剛（大阪大学・名誉教授）、加藤雄三（専修大学法学部）、金丸裕一（立命館大学経済学部）、蒲豊彦（京都橘大学文学部）、川西孝男（関西学院大学総合政策研究科）、菊池一隆（愛知学院大学文学部）、木越義則（名古屋大学経済学研究科）、木村可奈子（滋賀県立大学人間文化学部）、久保茉莉子（成蹊大学）、久保田裕次（国士舘大学文学部）、兒玉州平（山口大学経済学部）、小林亮介（九州大学大学院比較社会文化研究院）、坂井田 夕起子（愛知大学国際問題研究所）、城地孝（同志社大学文学部）、城山智子（東京大学経済学研究科）、園田節子（兵庫県立大学経済学部）、瀧田豪（京都産業大学法学部）、田口宏二郎（大阪大学文学研究科）、陳来幸（兵庫県立大学経済学部）、土肥歩（同志社大学文学部文化史学科）、土居智典（長崎外国語大学外国語学部）、富澤芳亜（島根大学教育学部）、豊岡康史（信州大学人文学部）、根無新太郎（京都府立大学）、箱田恵子（京都女子大学文学部）、浜田直也（神戸女子大学）、平井健介（甲南大学経済学部）、彭浩（大阪市立大学社会科学系研究院経済学研究科）、彭鵬（中国歴史研究院近代史研究所）、細見和弘（立命館大学経済学部）、堀地明（北九州市立大学外国語学部）、松村光庸、丸田孝志（広島大学大学院総合科学研究科）、三田剛史（明治大学商学部）、宮内肇（立命館大学文学部）、村尾進（天理大学国際学部）、村田雄二郎（同志社大学文学部グローバル・スタディーズ研究科）、毛暁陽（閩江学院歴史系）、望月直人（大坂経済法科大学国際学部）、本野英一（早稲田大学政治経済学術院）、森川裕貫（関西学院大学文学部）、山崎岳（奈良大学文学部）、山本一（立命館大学文学部）、吉田建一郎（大阪経済大学経済学部）、鷲尾浩幸（北海道教育大学教育学部札幌校）、森時彦（京都大学名誉教授）

## 9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
学内(法人内)	5	34	19	22	16	14	300	192	182	163	127
		(11)	(11)	(9)	(7)	(4)	(105)	(99)	(88)	(70)	(34)
国立大学	14	19	2	1	1	1	62	2	1	1	1
		(1)	(0)	(0)	(0)	(0)	(4)	(0)	(0)	(0)	(0)
公立大学	6	10	2	4	2	1	77	19	46	19	15
		(6)	(2)	(4)	(2)	(1)	(56)	(19)	(46)	(19)	(15)
私立大学	16	24	4	3	1	0	122	24	24	13	0
		(5)	(1)	(1)	(0)	(0)	(26)	(7)	(7)	(0)	(0)
大学共同利用機関法人	0										
独立行政法人等公的研究機関	0										
民間機関	2	2					3				
		(1)					(2)				
外国機関	6	6	6	2	1	1	25	25	11	1	1
		(3)	(3)	(1)	(0)	(0)	(20)	(20)	(10)	(0)	(0)
その他	2	2	0	0	0	0	2	0	0	0	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
計	51	97	33	32	21	17	591	262	264	197	144
		(27)	(17)	(15)	(9)	(5)	(213)	(145)	(151)	(89)	(49)

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数		
		うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	7		1
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)	1		
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	11		
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)	0		
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0		

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

雑誌名	掲載論文数	掲載年月日	論文名	発表者名
東洋史研究	1	R2. 6	近代的衛生行政体制と「地方自治」のはざま——世紀転換期の香港における潔浄局をめぐる議論	小堀慎吾
史林	1	R2. 7	康熙朝『黒図档』から見た盛京地方の内務府包衣	王天馳
東洋学報	1	R2. 6	広西省における壬寅奇災とアメリカ救済遠征隊	土肥歩
転換期中国における社会経済制度	10	R3. 2	寄付する人と使う貨幣——清代後期の貨幣使用と格差社会	村上衛
文化資源学	1	2020年6月	日仏美術品交換の企図と挫折(1882-1885)：外務省記録から見る国際文化交流の事例として	比護遥
現代中国研究	1	2020年10月	抗戦期中国の読書と動員：政治コミュニケーションから見る『読書生活』(1934-1936)	比護遥

共同利用・共同研究による成果として発行した研究書

研究書の名称	編著者名	発行年月	出版社名
転換期中国における社会 経済制度	村上 衛	R3. 2	京都大学人文科学研究所

11. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

本年度はオンライン開催のために招聘ができなくなったため、オンライン開催のための機器と消耗品に充当した。

12. 次年度の研究実施計画

次年度は、3年計画の2年目にあたる。当面、オンラインないしハイブリッド方式を続け、新型コロナウイルスの感染が完全に沈静化したとしても、対面を重視しつつ、より外部に開かれた研究班とするために、ハイブリッド方式は継続する予定である。本年度は若手を中心とする班員が報告を行ってきたが、次年度後半からは、若手のみならず、中堅以上の報告者による、研究班論文集の中間報告的な報告を増やす予定である。本研究は時代的には明清時代から現代、テーマ的には人文科学・社会科学の双方を扱うため、コメンテーターとしては引き続き報告のテーマと関連の深い研究者を全国から招聘して専門性の向上を目指す。同時に、若手の報告については、事前のレジュメ作成指導を含め、研究班が教育的な機能を果たすようにする。このほか適宜、最近刊行された著作の合評会などを開催し、研究班としての活動に幅をもたせていきたい。

13. 次年度の経費

		開催回数	国内出張旅費(延べ人)	支出予定額
国内旅費	研究会参加費	17	9	380000
	一般旅費			
海外旅費	渡航旅費			
	招へい旅費			
謝金(講演謝金、研究協力者金、その他の謝金)				
消耗品等経費				20000
その他				
合計				400000

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

研究成果については3年目に論文の原稿の募集を開始し、4年目に原稿をとりまとめることを計画しており、次年度はそのための中間報告的な発表を行う予定である。

# 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の1年目)

## 1. 研究課題人の分類と人種化に関する国際比較研究

A Comparative Study of Classification and Racialization

## 2. 研究代表者氏名

竹沢 泰子

Takezawa Yasuko

## 3. 研究期間

2020年4月-2023年3月(1年目)

## 4. 研究目的

本研究は、ある社会や地域の間が他者をどのように分類し、名づけ、また人種化するか、それがどのように社会経済的不平等を生産・再生産するかを考察する。人の分類や人種化においてどのようなマーカー（目に「見える」身体的相違であれ、「見えない」神話的な身体的特徴とされるものであれ、あるいは差異と認識されるものの文化的具現であれ）が動員されるかを吟味する。

具体的には、ひとつは、『環太平洋の移動と人種』に加筆修正を加えて英語版を作成する。その際、アジア型の人種化と環大西洋型の人種化が、人の移動によって遭遇し、絡み合う交渉の場として環太平洋を捉えなそう。第二は、フランスのEHESS-TEPSISとの日仏共同研究をさらに発展させ、南北アメリカと異なるヨーロッパと日本の共通性、また互いの差異を考察する。第三は、遺伝子検査ビジネスにかんする文理融合の国際共同研究である。具体的には、遺伝子検査会社のウェブサイトにおける「祖先分析」をめぐる日本語・中国語・英語の記述を比較し、それぞれの社会的傾向を探る。

This project aims to examine the ways in which people in certain societies or regions categorize others, label and racialize them - resulting in the production and reproduction of various forms of socio-economic inequality. It investigates the markers mobilized to categorize and racialize others, whether they are visible phenotypical differences, invisible and mythical bodily features, or cultural embodiments of perceived "differences," which may relate to the unequal distribution of resources and power. The project addresses how various processes of racialization are reproduced or transformed over the years.

We will conduct this project using three different approaches. One approach is

based on an international comparison between various different websites, written in Chinese, Japanese and English, relating to genetic testing. It is organized around the research subjects' "discovery" of their respective ancestries. The second study aims to articulate the similarities and differences in racialization between Japan and Europe by a collaborative study with the EHESS in France. Thirdly, we will continue our discussions on the Trans-Pacific as a space of negotiation between racialization pronounced in Asia and one in the Trans-Atlantic and how the intertwined and nested structure manifest in the Trans-Pacific.

## 5. 本年度の研究実施状況

2020年5月に警察官によって殺害されたジョージ・フロイドさんの死を契機に世界中で高まったブラック・ライヴズ・マター（「黒人の命を粗末にするな」）運動を受け、2020年6月に「緊急リレートーク：ブラック・ライヴズ・マター運動の背景と課題」を主催し、国内外から500人近い参加者が集い、議論や意見交換を行った。さらに新型コロナウイルスの感染蔓延によって、日本社会においても、「目に見えない」差別が社会問題となっている。この問題を深く掘り下げて議論するために、「コロナ時代の人間のちがいと差別」と『ちがいと差別～人類学からの提言～』という二つのシンポジウムを主催した。さらに国際発信という点では、『環太平洋地域の移動と人種』（京大出版 2020年）の合評会を2回開催し、英語版出版に向けて準備している。またフランス EHESS の研究者たちとの共同研究の成果は、“ALTÉRITÉ, RACE ET UNIVERSALISME : UNE HISTOIRE JAPONAISE.” (Politica 特集号 2021年1月—3月) として刊行される。

## 6. 本年度の研究実施内容

2020-06-21 緊急リレートーク：ブラック・ライヴズ・マター運動の背景と課題 趣旨説明＋閉会の辞：ここからどこへ向かうべきか？ 発表者 竹沢泰子 人文科学研究所

2020-08-06 コロナ時代の人間のちがいと差別 ブラック・ファイヴズ・マター運動から考える身のまわりの差別 発表者 竹沢泰子 人文科学研究所 発表者 山極寿一 京都大学総長 発表者 徳永勝士 国立研究開発法人国立国際医療研究センター

2020-08-24 『環太平洋地域の移動と人種』合評会 司会 竹沢泰子ほか 人文科学研究所 発表者 田辺明生 東京大学大学院総合文化研究科 発表者 成田龍一 日本女子大学人間社会学部

2020-10-11 「ちがいと差別～人類学からの提言～ BLM運動から考える身のまわりの人種差別 発表者 竹沢泰子ほか 人文科学研究所 発表者 山極寿一 京都大学総長 発表者 徳永勝士 国立研究開発法人国立国際医療研究センター

2020-11-04 「ちがいと差別～人類学からの提言～ 反省会 発表者 竹沢泰子ほか 人文科学研究所



2020-12-01 visibilities and invisibilities コメンテーター 竹沢泰子ほか 人文科学研究  
研究所

2020-12-22 同上 コメンテーター 竹沢泰子ほか 人文科学研究所

2020-12-27 『環太平洋地域の移動と人種』合評会 司会 竹沢泰子 人文科学研究所 司  
会 田辺明生 東京大学大学院総合文化研究科

2021-1-4.5 日仏論集刊行のための研究会 発表者 竹沢泰子ほか 人文科学研究所 司会  
田辺明生 東京大学大学院総合文化研究科 発表者 太田博樹 東京大学大学院理学系研究科

## 7. 共同研究会に関連した公表実績

なし

## 8. 研究班員

所内

竹沢泰子、石井美保、瀬戸口明久、ティル・クナウト

学内

山極壽一(総長室)、松田素二(文学研究科)、徳永悠(人間環境学研究科)

学外

斎藤成也(国立遺伝学研究所)、海部陽介(国立科学博物館人類研究部)、田辺明生(東京大学  
文化人類学研究室)、陳天爾(早稲田大学国際学術院)、木村亮介(琉球大学医学研究科)、関  
口寛(四国大学経営情報学部)、長志珠絵(神戸大学国際文化学部研究科)、太田博樹(東京大  
学大学院理学系研究科)、John Russell(岐阜大学地域科学部)

## 9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
			(0)	(0)	(0)	(0)		(0)	(0)	(0)	(0)
学内(法人内)	1	8	1	2			60	1	2		
国立大学	5	5	1				30	1			
公立大学											
私立大学	2	2					12				
大学共同利用機関法人											
独立行政法人等公的研究機関	2	2					2				
民間機関											
外国機関	3	7	6				35	34			
その他											
計	13	24 (0)	8 (0)	2 (0)	0 (0)	0 (0)	139 (0)	36 (0)	2 (0)	0 (0)	0 (0)

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	10		6	
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)	0			
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	13			
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)	2		2	
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	1		1	

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

雑誌名(必須)	掲載論文数	掲載年月日	論文名(必須)	発表者名
Asian Diasporic Visual Cultures and the Americas	1	R2.7	Major- and Minor-Transnationalism in Yoko Inoue's Art: Power Dynamics and Practices of Co-production.	Yasuko Takezawa
Asian Diasporic Visual Cultures and the Americas	1	R2.7	Trans-Pacific Minor Visions in Japanese Diasporic Art	Yasuko Takezawa and Laura Kina
商工ジャーナル	1	R2.10	米国の黒人暴行死の背景と反人種差別運動	竹沢泰子
月刊保団連	1	R2.10	生物学的には「人種」は存在しない	竹沢泰子
Int' lecowk (イントゥレコウク—国際経済労働研究)	1	R2.10	ブラック・ライブズ・マター運動の背景と意義	竹沢泰子
部落解放研究	1	R2.12	中世におけるユダヤ人・「ジプシー」・河原者をめぐる「特権」言	竹沢泰子

			説	
POLITIKA (フランス国立社会科学高等研究院)	1	R3.3	Race, Cvilisation and the Japanese. Textbooks During the Meiji Period.	Yasuko Takezawa
同上	1	R3.3	同フランス語版 Race et Cvilisation au Japon. Les manuels scolaires à l' ère Meiji.	Yasuko Takezawa
百花繚乱ーひょうごの多文化共生 150年のあゆみ	1	R2.12	第1章 兵庫の多文化共生概観	竹沢泰子
同上	1		コラム GONGO-自治体とNGOの協働の先駆	竹沢泰子
同上	1		コラム 外国人学校等の炊き出し	竹沢泰子
同上	1		第4章 外国人の多様化	竹沢泰子
井原泰雄・梅崎昌裕・米田 穰編 『人間の本质にせまる科学——自然人類学の挑戦』東京大学出版会	1	R3.3	「人種と人種差別ー自然人類学と文化人類学の対話から」	竹沢泰子
『Kyoto University ACADEMIC GROOVE Vol.2 BORDER -- Humanities and Social Sciences』	1	R2.2	「生物学的グラデーションと社会的境界」	竹沢泰子
TOKYO 人権	1	R3.3	ブラック・ライブズ・マターと日本 すべての人にとっての人種問題とは	竹沢泰子
保健の科学	1	R.2.10	「新型コロナ専門家有志の会」の全世代に向けた情報発信の活動より	田中幹人

PLOS ONE	1	R2.6	Japanese citizens' behavioral changes and preparedness against COVID-19: An online survey during the early phase of the pandemic	Mikihito Tanaka
International Journal of Asian Studies	1	R2.4	Genealogies of the "Paika Rebellion": Heterogeneities and Linkages	Akio Tanabe
Anthropological Sciences	1	R2.4	Analysis of ancient human mitochondrial DNA from Verteba Cave, Ukraine: insights into the origins and expansions of the Late Neolithic-Chalcolithic Cucuteni-Tripolye Culture	Hiroki Oota
歴史地理教育	1	R2.8	いま、コロナウイルス禍の中で——社会史研究の成果に学ぶ	成田龍一
思想	1	R2.11	桐野夏生の「1972年」『抱く女』『夜の谷を行く』『夜また夜の深い夜』	成田龍一
ユリイカ	1	R2.10	原爆・被爆を描く別役実、あるいは戦後表象空間のなかの別役実——『象』	成田龍一
東京人	1	R2.11	東京裁判三部作 追究しつづけた「戦後」の正体	成田龍一
現代思想	1	R2.9	悪疫年2020 序	成田龍一
現代思想	1	R2.10	序・2 1980年代の試み	成田龍一
現代思想	1	R2.11	「越境」する西川長夫 上	成田龍一
現代思想	1	R2.12	「越境」する西川長夫 中 「フランス革命200年」のなかで	成田龍一
現代思想	1	R3.1	「越境」する西川長夫 下 『国境の越え方』をめぐって	成田龍一

本年度発表された高いインパクトファクターを持つ雑誌等に掲載された場合、その雑誌名、インパクトファクター、掲載論文数、掲載された論文

雑誌名	インパクト ファクター	掲載 論文 数	掲載 年月日	論文名	発表者名
Ethnic and Racial Studies	1.72	1	R2.4	Racialization and Discourses of “Privileges” in the Middle Ages: Jews, “Gypsies”, and Kawaramono	Yasuko Takezawa
Ethnic and Racial Studies	1.72	1	R2.5	Book Review of In Search of Our Frontier: Japanese America and Settler Colonialism in the Construction of Japan’s Borderless Empire, by Eiichiro Azuma	Yasuko Takezawa
Communications Biology	4.165	1	R2.8	Ancient Jomon genome sequence analysis sheds light on migration patterns of early East Asian populations	Hiroki Oota

共同利用・共同研究による成果として発行した研究書

研究書の名称	編著者名	発行年月	出版社名
未来からの問い—日本学術 会議 100 年を構想する	徳永勝士（執筆分 担）	R2.4	日本学術会議
Common disease 解析の最前 線	徳永勝士（執筆分 担）	R2.12	メディカルドゥ
○Special Issue: Trans- Pacific Minor Visions in Japanese Diasporic Art. Asian Diasporic Visual Cultures and the Americas	竹沢泰子編	R2.7	ADVA

○Trans-Pacific Japanese American Studies: Conversations on Race and Racializations	竹沢泰子編	R2. 8	University of Hawaii Press
The Routledge Critical Whiteness Studies Handbook	竹沢泰子(分担執筆)	R2. 7	Routledge
○百花繚乱一ひょうごの多文化共生	竹沢泰子ほか編	R2. 12	神戸新聞総合印刷
人種」「民族」概念への挑戦	竹沢泰子(分担執筆)	R3. 2	明石書店
Health Promotion: A Practical Guide to Effective Communication	Mikihito Tanaka(分担執筆)	R3. 2	Cambridge University Press
良くわかる現代科学技術史・STS	田中幹人(分担執筆)	R3. 2	ミネルヴァ書房
科学社会学	田中幹人(分担執筆)	R3. 2	東京大学出版会
科学技術社会論の挑戦 II	田中幹人(分担執筆)	R2. 7	東京大学出版会
ソーシャルメディアの現在	田中幹人(分担執筆)	R2. 5	国立国会図書館
Risk and the Regulation of New Technology	Mikihito Tanaka(分担執筆)	R2. 12	Springer
Sustainable Development in India: Groundwater Irrigation, Energy Use, and Food Production	Akio Tanabe(分担執筆)	R2. 9	Routledge
増補「戦争経験」の戦後史	成田龍一	R2. 8	岩波書店
<戦後文学>の現在形	成田龍一編	R2. 10	平凡社

11. 費目の30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由  
なし

12. 次年度の研究実施計画

次年度は、主として3つのテーマを中心に研究会を開催する。

1) 『環太平洋における移動と人種』の英語版の出版を目標として、アジア型と環大西洋型の交渉の空間としての環太平洋圏に光を投げながら、英語圏の読者に論点が伝わるよう

にいかにより修正を加えるかを議論する。

2) フランス EHESS とオンラインなどで研究会を行い、ペアを組んだ日仏の5組それぞれのなかで、類似性と差異について議論する予定である。

3) 日本における祖先ルーツをめぐる遺伝子検査ビジネスについて、関連会社に関係者でインタビューを行い、論文を共同執筆する予定である。

### 13. 次年度の経費

		開催回数	国内出張旅費(延べ)	支出予定額
国内旅費	研究会参加費	6	12	240000
	一般旅費			
海外旅費	渡航旅費			
	招へい旅費			
謝金(講演謝金、研究協力者金、その他の謝金)				150000
消耗品等経費				10000
その他				
合計				400000

### 14. 研究成果公表計画および今後の展開等

1) 『環太平洋地域の移動と人種』の英語版として Race and Migration in the Trans Pacific (Kyoto University Press & Trans Pacific Press)を刊行する予定である。

2) フランス EHESS との共同研究の成果として刊行される "ALTÉRITÉ, RACE ET UNIVERSALISME : UNE HISTOIRE JAPONAISE" の修正・加筆版を、『人種主義と反人種主義の越境と転換』(京都大学学術出版会)として日本語で刊行する予定である。





# 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(5年計画の5年目)

## 1. 研究課題

東方文化学院京都研究所旧蔵漢籍の整理と研究

A Bibliographic Research on Old Chinese Books Previously Housed in the Kyoto Institute of the Academy of Oriental Culture

## 2. 研究代表者氏名

矢木 毅

Yagi, Takeshi

## 3. 研究期間

2016年4月-2021年3月(5年目)

## 4. 研究目的

東方文化学院京都研究所は1929年に外務省の助成により設立された。今日の人文科学研究所東方学研究部(東アジア人文情報学研究センター)の前身である。旧蔵の漢籍はすべて東方学研究部に継承されており、その内容は『東方文化学院京都研究所漢籍目録』(1938年)によって詳細に知ることができる。なかでも天津の蔵書家・陶湘の旧蔵書、特に叢書を多く含むことで学術的にもその価値が高い。本研究班はこの目録に掲載された漢籍の書誌情報を再吟味し、これに詳細な典拠情報を加えることによって、現行の電子目録(KANSEKI)の情報精度をさらに向上させることを目的とする。序跋等のテキスト・データを含めた典拠情報は逐次インターネットを通して発信し、蔵書印については図録を作成して刊行する。来るべき90周年、100周年の節目に向けて、近代東アジアにおける学知の原風景を探り、学術史の再構築を図るための展示会、企画展なども開催したい。

The Kyoto Institute of the Academy of Oriental Culture was established in 1929 using a grant-in-aid from the Ministry of Foreign Affairs of Japan, and it has hence developed into the Department of Oriental Studies of the Institute for Research in Humanities, Kyoto University. The Institute has inherited all the old Chinese books that were once housed in the old one, and the details of the collection can be seen in the Catalogue of the Old Chinese Books housed in the Kyoto Institute of the Academy of Oriental Culture, published in 1938. This collection is well known and is highly valued in the academic world, particularly because it contains a series of books that were once housed by Tao Xiang, a famous

bookkeeper in Tianjin, China. Our research project reexamines the information in the Catalogue and attempts to enhance the accuracy of the KANSEKI database, an online catalogue based on the Catalogue. The project involves the creation of an additional database on the prefaces and postscripts of the books. It will also involve the collection of information about Ex-libris Ownership Stamps and their publication in pictorial books. In the near future, as part of the celebrations of the 90th and 100th anniversaries of the institute, exhibitions will be held with the objective of reviewing and restructuring oriental studies in Japan.

#### 5. 本年度の研究実施状況

毎週水曜日、14時より16時まで。(4月中は休会。本年度はオンラインで開催)。前期は5月13日より7月29日まで(計12回)。後期は10月14日より2月3日まで(計15回)。通年で27回開催。本年度は集部別集類の漢籍を検討した。毎回の検討の成果は「典拠情報」としてまとめ、「全国漢籍データベース」にリンクさせた形でウェブ上に公開している。なお、関連する成果として『京大人文研蔵書印譜(四)』と題する図録(東方学資料叢刊第28冊)を東アジア人文情報学研究センターより刊行し、リポジトリ「紅」においても公開した。

#### 6. 本年度の研究実施内容

2020-05-20	東方文化学院京都研究所漢籍目録	集部別集類南宋之属	発表者	矢木毅
2020-05-27	東方文化学院京都研究所漢籍目録	集部別集類南宋之属	発表者	矢木毅
2020-06-03	東方文化学院京都研究所漢籍目録	集部別集類南宋之属	発表者	矢木毅
2020-06-10	東方文化学院京都研究所漢籍目録	集部別集類南宋之属	発表者	宮宅潔
2020-06-17	東方文化学院京都研究所漢籍目録	集部別集類南宋之属	発表者	宮宅潔
2020-06-24	東方文化学院京都研究所漢籍目録	集部別集類南宋之属	発表者	宮宅潔
2020-07-01	東方文化学院京都研究所漢籍目録	集部別集類南宋之属	発表者	宮宅潔
2020-07-08	東方文化学院京都研究所漢籍目録	集部別集類南宋之属	発表者	高井たかね
2020-07-15	東方文化学院京都研究所漢籍目録	集部別集類南宋之属	発表者	高井たかね
2020-07-22	東方文化学院京都研究所漢籍目録	集部別集類南宋之属	発表者	高井たかね
2020-07-29	東方文化学院京都研究所漢籍目録	集部別集類南宋之属	発表者	高井たかね
2020-10-14	東方文化学院京都研究所漢籍目録	集部別集類南宋之属	発表者	永田知之
2020-10-21	東方文化学院京都研究所漢籍目録	集部別集類南宋之属	発表者	永田知之
2020-10-28	東方文化学院京都研究所漢籍目録	集部別集類南宋之属	発表者	永田知之
2020-11-04	東方文化学院京都研究所漢籍目録	集部別集類金元之属	発表者	福谷彬
2020-11-18	東方文化学院京都研究所漢籍目録	集部別集類金元之属	発表者	福谷彬
2020-11-25	東方文化学院京都研究所漢籍目録	集部別集類金元之属	発表者	福谷彬

2020-12-02 東方文化学院京都研究所漢籍目録 集部別集類金元之属 発表者 藤井律之  
2020-12-09 東方文化学院京都研究所漢籍目録 集部別集類金元之属 発表者 藤井律之  
2020-12-16 東方文化学院京都研究所漢籍目録 集部別集類金元之属 発表者 藤井律之  
2020-12-23 東方文化学院京都研究所漢籍目録 集部別集類金元之属 発表者 古松崇志  
2021-01-08 東方文化学院京都研究所漢籍目録 集部別集類金元之属 発表者 古松崇志  
2021-01-15 東方文化学院京都研究所漢籍目録 集部別集類金元之属 発表者 古松崇志  
2021-01-22 東方文化学院京都研究所漢籍目録 集部別集類金元之属 発表者 宮宅潔  
2021-01-29 東方文化学院京都研究所漢籍目録 集部別集類金元之属 発表者 宮宅潔  
2021-02-03 東方文化学院京都研究所漢籍目録 集部別集類金元之属 発表者 宮宅潔

#### 7. 共同研究会に関連した公表実績

京大人文研蔵書印譜（一）（東方学資料叢刊第 16 冊、2008 年、漢字情報研究センター） 京大人文研蔵書印譜（二）（東方学資料叢刊第 21 冊、2016 年、東アジア人文情報学研究センター） 京大人文研蔵書印譜（三）（東方学資料叢刊第 25 冊、2018 年、東アジア人文情報学研究センター） 京大人文研蔵書印譜（四）（東方学資料叢刊第 28 冊、2020 年、東アジア人文情報学研究センター） 朝鮮本十選（東方学資料叢刊第 22 冊、2016 年、東アジア人文情報学研究センター） 排印本十選（東方学資料叢刊第 23 冊、2017 年、東アジア人文情報学研究センター） 字書十選（東方学資料叢刊第 27 冊、2019 年、東アジア人文情報学研究センター）

#### 8. 研究班員

所内

矢木毅、永田知之、宮宅潔、古松崇志、高井たかね、藤井律之、福谷彬、瞿艶丹

学内

道坂昭廣(人間環境学研究科)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
学内(法人内)	1	2	1	2	2	0	54	27	54	54	0
		(1)	(1)				(27)	(27)			
国立大学											
公立大学											
私立大学											
大学共同利用機関法人											
独立行政法人等公的研究機関											
民間機関											
外国機関											
その他											
計	1	2	1	2	2	0	54	27	54	54	0
		(1)	(1)	(0)	(0)	(0)	(27)	(27)	(0)	(0)	(0)

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

なし

11. 次年度の研究成果公表計画および今後の展開等

次年度より新規に「東方文化研究所旧蔵漢籍の整理と研究」班を組織し、引き続き序跋・蔵書印等の調査・研究を進める。

# 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(5年計画の5年目)

## 1. 研究課題

漢籍リポジトリの基礎的研究

Fundamental research of the Kanseki Repository

## 2. 研究代表者氏名

ウィッティルン クリスティアン

Christian Wittern

## 3. 研究期間

2016年4月-2021年3月(5年目)

## 4. 研究目的

平成 25 年 4 月から平成 28 年 3 月開催された研究班「人文情報学の基礎研究」では文献学的な手法に基づいた漢籍電子テキストの集合である漢籍リポジトリ ([www.kanripo.org](http://www.kanripo.org)) の構築に取り組み、初歩的な形で公開ができた。しかし、テキスト集合の完成度または各テキストの適切な記述などにまた課題が残された新研究班は引き継ぎ漢籍リポジトリの基本的な整理と研究が行う予定だ。利用者の立場からも漢籍リポジトリの全体に関わる研究または特定な研究課題に絞った研究を支援するや、個人研究者や研究者グループに行う漢籍の解読を支援するツールの研究・開発も計画されている。それ以外には現時点で特に課題になると思われるのは、複数の版からなる批判校訂版の作成と画面上の表示や印刷様の組版のワークフローの検討や、漢籍リポジトリ全体の文字使用とその規範、正字と異体字の対応などを検討するが、具体的な課題とその進め方は班員の関心に沿ってきめる。

The research seminar “Fundamental Topics in Digital Humanities” held from April 2013 to March 2016 produced as one of its results a first preliminary release of a comprehensive repository of premodern Chinese texts based on clear philological principles called “Kanseki Repository” ([www.kanripo.org](http://www.kanripo.org)). However, due to the limited time, only a very rough draft could be produced and some important texts are still missing. This seminar will follow up on these results by improving the scope and descriptive depth of the texts and by developing exemplary methods for using the repository for answering specific research questions. Among these, support for the creation of text-critical editions and a general survey of the

characters used in the Repository are on the agenda, but the actual plan will be developed by the members upon start of the seminar.

## 5. 本年度の研究実施状況

今年度は漢籍リポジトリに90点の漢籍を追加した。利用者からの要望に応じて漢籍リポジトリ本体のファイル形式などの改善可能な点についての検討が行った。その結果としては新しい機能と現行のリポジトリの両立を考慮して、これから実行可能な運営形態を検討しました。その結果としては基本的には漢籍リポジトリをそのままの運営を続ける上で、新しい形のXML版に基づいて別途のAPIとインタフェースを立ち上げることが望ましいという結論を得た。今年度はその形式の基本的な枠組に必要なを作成して、GitHubで公開しました。

関連プロジェクトとしては「漢學文典」(通称TLS、Thesaurus Linguae Sericae)の支援も継続した。具体的にはプリンストン大学の東アジア研究所(米国)とボーフム大学の中國傳統文化研究センター(ドイツ)との共同研究で「漢學文典」の新しい共同研究・共同作業のためのウェブサイト(hxwd.org)の構築と実験運用をはじめました。

## 6. 本年度の研究実施内容

2020-05-12 今年度の予定

2020-05-26 次世代漢籍リポジトリに向けて(1)

2020-06-09 次世代漢籍リポジトリに向けて(2)

2020-06-23 Textual Communities & implementation of standoff markup

2020-07-14 The concept of work in digital texts

2020-10-13 Details of KanripoX format

2020-10-27 KanripoX development(1)

2020-11-24 Japanese Buddhist Manuscripts (Gaétan Rappo)

2020-12-08 KanripoX development(2)

2021-01-12 Updates to KanripoX files

2021-01-26 About the final report

## 7. 共同研究会に関連した公表実績

論文:

(2018年度のTEI国際学会の基礎講演に基づいて)

Christian Wittern, Digital Texts in Practice, Journal of the Text Encoding Initiative, Volume 13 (2020), <https://journals.openedition.org/jtei/3187>

ウェブサイト:

漢籍リポジトリ: <https://www.kanripo.org>

漢學文典: <https://hxwd.org>

8. 研究班員

所内

安岡孝一、古勝隆一、永田知之、白須 裕之

学内

宮崎 泉（文学研究科）

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	外国人	若手研究者	若手研究者	大学院生	総計	外国人	若手研究者	若手研究者	大学院生
				(40歳未満)	(35歳以下)				(40歳未満)	(35歳以下)	
学内(法人内)		7	3	2	1	1	96	42	28	14	14
		(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(14)	(14)	(14)	(14)	(14)
国立大学											
公立大学											
私立大学											
大学共同利用機関法人											
独立行政法人等公的研究機関											
民間機関											
外国機関											
その他											
計	0	7	3	2	1	1	96	42	28	14	14
		(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(14)	(14)	(14)	(14)	(14)

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	1		1	
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)				
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)				
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)				
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)				

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

雑誌名	掲載論文数	掲載年月日	論文名	発表者名
Journal of the Text Encoding Initiative	1	R2.11	Digital Texts in Practice	Christian Wittern

11. 費目の30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

なし

12. 次年度の研究実施計画

なし

13. 次年度の経費

なし

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

研究班の成果としてはデータ交換のXML形式はGitHubなどで公開中(<https://github.com/kanripox/kanripox-dev/blob/master/KRX.odd>)、又は漢籍リポジトリ(<https://www.kanripox.org>)と漢學文典(<https://hxwd.org>)にも引き続き研究成果が公開中。

これらの研究成果を踏まえて、4月から発足予定の研究班「漢籍共同研究システムの構築」で以上のデータベースなどの資料を統合する作業を計画しています。



# 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(5年計画の5年目)

## 1. 研究課題

秦代出土文字史料の研究

Study on the Excavated Manuscripts of the Qin Dynasty

## 2. 研究代表者氏名

宮宅 潔

MIYAKE Kiyoshi

## 3. 研究期間

2016年4月-2021年3月(5年目)

## 4. 研究目的

中国湖南省龍山県里耶鎮で戦国時代から漢代にかけて使用された都城遺跡が発掘され、そこから秦の行政文書を中心とする簡牘史料（総計 38,000 余簡）が発見されたのは、2002 年のことであった。簡牘には始皇帝（秦王政）25 年（前 222）から二世皇帝 2 年（前 208 年）までの紀年が現れる。里耶鎮は湖南・湖北・重慶市が接する境界付近の、険しい山間部に位置するが、始皇帝による東方六国の征服（前 221）の後、この山深い離郷にも郡県制の網の目が及び、秦帝国の統治下に組み入れられたことを物語る。本研究班は、この貴重な史料を会読形式で精読し、中国古代帝国の統治制度やその実際のありように迫ることを、主な目的とする。これと併せて、岳麓書院所蔵簡の会読も進めている。こちらの史料は、2003 年に湖南大学岳麓書院が香港において購入した盗掘簡である。すでに 5 部の報告書が出版され、第 4・5 部の報告書には律令条文が収録されている。この法律史料を併せて精読し、如上の目的を達成する一助としたい。

In 2002, a city remain from the Zhanguo period to the Han was excavated at the town of Liye, Longshan, Hunan province, over 38,000 strips and boards were discovered here. These strips comprise administrative documents, dated from 222BCE to 208BCE. It follows that the area around Liye, a small mountain village located near the boundary among Hunan, Hubei, and Chongqing, was incorporated into the Qin administrative system after the unification by the First Emperor. In this project, we will read this manuscript closely, investigate the political system of the early Chinese emperor and its reality. In addition to the Liye discoveries, the Qin

strips of unknown place were smuggled to Hong Kong and repatriated by the Yuelu Academy of Hunan University in 2003. Several parts of this material have been already published, which comprise the calendars and the records of judicial process during the Qin. The photos and transcriptions of the Qin statutes and ordinances among these strips will also appear soon. Utilizing this material, we intend to achieve our above-mentioned goal.

## 5. 本年度の研究実施状況

里耶秦簡・岳麓簡の概要を紹介し、その内容や研究状況について意見を交換したうえで、会読を進めた。今年度は新型コロナウイルスの感染拡大により、四月初めより研究会をオンラインでの開催に切り替えた。それにより会読は途切れることなく進み、計画通り3月末までに42回の研究会を開催した。

## 6. 本年度の研究実施内容

2020-04-03	岳麓簡会読 248-256	発表者	目黒 杏子
2020-04-10	岳麓簡会読 248-256	発表者	目黒 杏子
2020-04-17	岳麓簡会読 248-256	発表者	目黒 杏子
2020-04-24	岳麓簡会読 257-267	発表者	安永 知晃 関西学院大学
2020-05-01	岳麓簡会読 257-267	発表者	安永 知晃 関西学院大学
2020-05-08	岳麓簡会読 257-267	発表者	安永 知晃 関西学院大学
2020-05-15	岳麓簡会読 257-267	発表者	安永 知晃 関西学院大学
2020-05-22	岳麓簡会読 257-267	発表者	安永 知晃 関西学院大学
2020-05-29	岳麓簡会読 268-275	発表者	章瀟逸 人間・環境学研究科
2020-06-05	岳麓簡会読 268-275	発表者	章瀟逸 人間・環境学研究科
2020-06-15	岳麓簡会読 268-275	発表者	章瀟逸 人間・環境学研究科
2020-06-19	岳麓簡会読 268-275	発表者	章瀟逸 人間・環境学研究科
2020-06-26	岳麓簡会読 268-275	発表者	章瀟逸 人間・環境学研究科
2020-07-03	岳麓簡会読 268-275	発表者	章瀟逸 人間・環境学研究科
2020-07-10	岳麓簡会読 276-283	発表者	佐藤 達郎 関西学院大学
2020-07-17	岳麓簡会読 276-283	発表者	佐藤 達郎 関西学院大学
2020-07-31	岳麓簡会読 276-283	発表者	佐藤 達郎 関西学院大学
2020-09-04	岳麓簡会読 276-283	発表者	佐藤 達郎 関西学院大学
2020-09-11	里耶秦簡 会読⑧925-⑧959	発表者	宮宅 潔
2020-09-18	岳麓簡会読 276-283	発表者	佐藤 達郎 関西学院大学
2020-09-25	里耶秦簡会読⑧997-⑧1023	発表者	安永 知晃 関西学院大学
2020-10-02	岳麓簡会読 284-293	発表者	西 真輝 文学研究科

2020-10-16 里耶秦簡会読⑧997-⑧1023 発表者 安永 知晃 関西学院大学  
 2020-10-23 岳麓簡会読 284-293 発表者 西 真輝 文学研究科  
 2020-10-30 里耶秦簡会読⑧997-⑧1023 発表者 安永 知晃 関西学院大学  
 2020-11-06 岳麓簡会読 284-293 発表者 西 真輝 文学研究科  
 2020-11-20 里耶秦簡会読⑧1024-⑧1048 発表者 章瀟逸 人間・環境学研究  
 2020-11-27 岳麓簡会読 294-302 発表者 角谷 常子 奈良大学  
 2020-12-04 里耶秦簡会読⑧1024-⑧1048 発表者 章瀟逸 人間・環境学研究科  
 2020-12-11 岳麓簡会読 294-302 発表者 角谷 常子 奈良大学  
 2020-12-18 里耶秦簡会読⑧1024-⑧1048 発表者 章瀟逸 人間・環境学研究科  
 2021-01-08 岳麓簡会読 303-312 発表者 宗 周太郎 文学研究科  
 2021-01-15 里耶秦簡会読⑧1049~⑧1073 発表者 西 真輝 文学研究科  
 2021-01-22 岳麓簡会読 303-312 発表者 宗 周太郎 文学研究科  
 2021-01-29 里耶秦簡会読⑧1049~⑧1073 発表者 西 真輝 文学研究科  
 2021-02-05 岳麓簡会読 303-312 発表者 宗 周太郎 文学研究科  
 2021-02-12 岳麓簡会読 303-312 発表者 宗 周太郎 文学研究科  
 2021-02-26 里耶秦簡会読⑧1049~⑧1073 発表者 西 真輝 文学研究科  
 2021-03-05 岳麓簡会読 303-312 発表者 宗 周太郎 文学研究科  
 2021-03-12 里耶秦簡会読⑧1073~⑧1109 発表者 佐藤 達郎 関西学院大学  
 2021-03-19 岳麓簡会読 313-324 発表者 宮宅 潔

## 7. 共同研究会に関連した公表実績

「岳麓書院所蔵簡《秦律令（壹）》訳注稿 その3」を『東方学報』誌上で公開した。また人文研アカデミーの連続セミナーとして「秦帝国の実像 同時代資料が語る始皇帝の時代」（10月1日、8日、15日、22日）を開催し、研究の一端を広く一般に向けても発信した

## 8. 研究班員

### 所内

藤井律之、古勝隆一、宮宅 潔、目黒杏子、陳 捷、李 磊、魏 永康、陳 鳴、曹 天江

### 学内

宗 周太郎（文学研究科・博士課程）、斎藤 賢（文学研究科・博士課程）、章 瀟逸（人間・環境学研究科・博士課程）

### 学外

郭 聡敏（立命館大学）、佐藤 達郎（関西学院大学）、角谷 常子（奈良大学）、鷹取 祐司（立命館大学）、土口史記（岡山大学）、安永 知晃（関西学院大学）、畑野 吉則（奈良文化財研究所）

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
学内(法人内)	1	10	4	5	4	3	361	110	208	185	84
国立大学	1	1	0	1	0	0	15	0	15	0	0
公立大学	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
私立大学	3	5	1	2	2	1	203	44	87	87	50
大学共同利用機関法人	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
独立行政法人等公的研究機関	1	1	0	1	0	0	27	0	27	0	0
民間機関	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
外国機関	2	2	2	0	0	0	11	11	0	0	0
その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	8	19	7	9	6	4	617	165	337	272	134
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	3		1	
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)	1		0	
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	1		0	
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)	0		0	
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0		0	

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

雑誌名	掲載論文数	掲載年月日	論文名	発表者名
簡帛	1	R2. 5	秦遷陵鼎的物資出入與校計	曹天江
東方学報	2	R2. 12	前漢後半期における宗廟制の変容 岳麓書院所蔵簡《秦律令（壹）》訳注稿その（三）	目黒杏子 秦代出土文字史料の研究班
簡帛網	1	R2. 11	《嶽麓秦簡（肆）》中的“榦”與“除”	章瀟逸

11. 費目の30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由  
なし

12. 次年度の研究実施計画  
なし

13. 次年度の経費  
なし

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

本年度の会読分を「岳麓書院所蔵簡《秦律令（壹）》譯注稿 其の（四）」として『東方学報』誌上に発表する。併せて、《秦律令（壹）》（第四冊）分の訳注に校訂を加え、再整理して単行本として刊行する。第四冊分の残りの部分の会読は、次年度から新たに組織する研究班において行う。



# 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(5年計画の4年目)

## 1. 研究課題

龍門北朝窟の造像と造像記

Buddhist Sculptures and their Inscriptions in the Longmen Caves of the Northern Dynasties

## 2. 研究代表者氏名

稲本泰生

Inamoto Yasuo

## 3. 研究期間

2017年4月-2022年3月(4年目)

## 4. 研究目的

龍門石窟は東アジアで最も重要な仏教遺跡の一つである。本研究所東方学研究部の前身である東方文化研究所の水野清一・長廣敏雄は戦前に調査研究を行い、報告書『龍門石窟の研究』(1941年)を出版した。のちに『雲岡石窟』を出版する兩人による同書は、今日も基礎研究としての価値を失っていない。また龍門には夥しい数の造像記が遺っており、これについての研究も、清代以来の膨大な蓄積がある。水野・長廣が実施した現地調査は、僅か6日間にとどまった。このため多くの課題が後考に委ねられたが、戦後の中国における考古学の発展は、文字史料を造形資料から切り離すことなく相互に参照する研究を可能にし、新たな知見をもたらした。しかし北魏窟に限っても、開鑿の主体と過程、主要造像の編年など基本的なところで、今なお論者の見解が大きく分かれる部分が少なからずある。最近、龍門造像記の拓本多数が、所内で新たに確認されるに至った。本研究では研究所における石窟研究の伝統を継承し、北朝期の龍門における造像とその背景について、現在整理中であるこの資料群を活用して再考する。活動の中心に据えるのは造像記の文面の再確認と、内容の理解である。そこから得られる情報をもとに、石窟の造営経過や彫刻の様式・図像などの問題に対し、美術・考古・歴史・宗教・社会等の観点から総合的な検討を加え、今後の龍門研究の基盤となる共通認識の形成をめざす。

The Longmen Caves are one of the most important Buddhist sites in East Asia. In 1941, Mizuno Seiichi and Nagahiro Toshio from Institute of Oriental Studies (now Department of Oriental Studies, Institute for Research in Humanities) published the report "A Study of the Buddhist Cave-Temples at Lung-mên, Ho-nan" after

conducting fieldwork in the area. The report remains relevant to any research on the Longmen Caves today. Subsequently, the two scholars published the paramount and highly acclaimed series entitled “Yun-Kang: The Buddhist Cave-Temples of the Fifth Century A.D. in North China” on the Yungang Caves in the 1950s. Since the Qing Dynasty, there have been many studies of the enormous number of inscriptions carved in the Longmen Caves. Yet since Mizuno and Nagahiro visited the site for a mere six days, many research topics had to be left to later scholars. In the development of archeology in postwar China, comparative analysis of both textual and stylistic sources has generated new scholarly insights for future research. Yet, even within scholarship concerning the Northern Wei caves of Longmen, opinions remain sharply divided on fundamental issues such as the commissioning and the construction process of the caves, as well as the dating of the major statues. Recently, the Institute of Oriental Studies has identified a rich collection of rubbings of the Longmen inscriptions. The proposed project therefore not only continues the institute’s tradition of researching Buddhist cave temples, but it also aims to reorganize and fully utilize the information gathered thus far to rethink Northern Dynasties statues and their context. The project thus focuses on reconfirming the transcriptions of the inscriptions and understanding their contents. Based on the information gained from that research, we shall consider issues such as the process of creating the caves and the style and iconography of the sculptures through a comprehensive study integrating art-historical, archeological, historical, religious, and social perspectives. In so doing, we hope to form a common foundation of knowledge that will serve as the basis for future Longmen studies.

##### 5. 本年度の研究実施状況

当班では龍門古陽洞所在の造像記約 700 件のうち、まず有年紀分を対応する造像とともに取り上げて確認・検討を進め、2018 年末で全点の検討を完了した。2019 年 1 月からは無紀年・無銘分も含めた全ての造像について、壁面のブロック単位で網羅的に再検討する作業を進め、2021 年 2 月を以て外壁を含む全壁面の検討を完了した。当初は 2017～2019 年度の三年計画であったが、これまでの実績に鑑みて研究期間を二年間延長し、検討対象を古陽洞以外の北朝窟にも拡げて作業を継続するとともに、信頼できる資料集の公刊に向けた確認・編集作業に取り組んでいる。本年度はコロナ禍で 4 月・5 月は休会となったが、6 月末以降は基本的にオンライン、一部対面併用で研究会を再開した。造像・造像記を検討する通例の会に加え、佐藤智水氏が「古陽洞開鑿期における造営の主体について」、檜山智美氏が「クチャの仏教石窟寺院と説一切有部の分派に関する考察」、田林啓氏が「中国の神異僧像をめ



ぐって」と題して研究発表を行った。

#### 6. 本年度の研究実施内容

- 2020-06-23 古陽洞北壁下段の再検討 発表者 稲本泰生 京都大学  
2020-09-15 古陽洞開鑿期における造営の主体について 発表者 佐藤智水 龍谷大学  
2020-09-29 古陽洞北壁下段の再検討 発表者 稲本泰生 京都大学  
2020-10-27 古陽洞南壁下段の再検討 発表者 向井佑介 京都大学  
2020-11-10 古陽洞南壁下段の再検討 発表者 向井佑介 京都大学  
2020-11-24 古陽洞南壁下段の再検討 発表者 向井佑介 京都大学  
2020-12-08 古陽洞南壁下段の再検討 発表者 向井佑介 京都大学  
2021-01-12 古陽洞南壁下段・西壁北側の再検討 古陽洞南壁下段の再検討 発表者 向井佑介 京都大学 古陽洞西壁北側の再検討 発表者 稲本泰生 京都大学  
2021-02-09 古陽洞外壁の再検討 発表者 稲本泰生 京都大学  
2021-03-09 中国仏教美術研究の最前線 クチャの仏教石窟寺院と説一切有部の分派に関する考察-石窟の空間構成と壁画図像を手掛かりに- 発表者 檜山智美 京都大学 中国の神異僧像をめぐって-南北朝時代からの系譜 発表者 田林啓 白鶴美術館

#### 7. 共同研究会に関連した公表実績

なし

#### 8. 研究班員

所内

岡村秀典、安岡孝一、向井佑介、倉本尚徳、高志緑

学内

内記理（文化財総合研究センター）、檜山智美（白眉センター）、アヴァンツィ・カルロッタ（大学院文学研究科）

学外

外山潔（京都市立芸術大学）、齋藤龍一（大阪市立美術館）、山名伸生（京都精華大学）、大西磨希子（佛教大）、石松日奈子（東京国立博物館）、濱田瑞美（横浜美術大学）、北村一仁（河南農業大）、田林啓（白鶴美術館）、高橋早紀子（愛知学院大学）、苫名悠（大阪大谷大学）、黄盼（中国社会科学院）、上枝いづみ（金沢大学）、王珏人（大阪大学大学院）、佐藤智水（龍谷大学 客員教授（人文科学研究所非常勤講師））

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
			(3)	(1)	(2)	(2)		(1)	(22)	(5)	(17)
学内(法人内)	3	9	1	3	3	1	67	5	19	19	5
国立大学	1	1					4				
公立大学	1	1					1				
私立大学	6	6		2	2		30		2	2	
大学共同利用機関法人											
独立行政法人等公的研究機関	4	4	1	2	2		10	2	4	4	
民間機関	1	1		1			6		6		
外国機関	2	2	1	1	1	1	11	2	2	2	2
その他											
計	18	24	3	9	8	2	129	9	33	27	7
		(11)	(3)	(6)	(6)	(2)	(56)	(9)	(24)	(24)	(7)

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)				
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)				
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)				
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)				
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)		1		

11. 費目の30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由  
なし

#### 12. 次年度の研究実施計画

次年度は龍門北魏窟のうち、文字資料の質量において古陽洞に次ぐ存在である蓮華洞を取り上げ、その造像と造像記について網羅的な再確認・再検討作業を行う。古陽洞については過去四年間の成果を整理再編し、約 700 点の造像記すべての釈文や研究所蔵拓を集成した資料集の刊行に向けて、編集作業を進める。

#### 13. 次年度の経費

なし

#### 14. 研究成果公表計画および今後の展開等

次年度は本研究班の最終年度にあたり、古陽洞に関しては年度内に研究成果となる資料集の刊行を開始し、5年に及んだ期間終了後も継続する予定である。より信頼度の高い成果の創出につなげるべく龍門石窟研究院との交流を強め、研究面での連携の可能性も模索する。龍門北魏窟は古陽洞・蓮華洞にとどまらず引きつづき検討を要するため、2022 年度以降開始される新規班の活動にも、研究対象として組み込みたい。



# 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(4年計画の3年目)

## 1. 研究課

### 21世紀の人文学

Humanities in the 21st Century: An Attempt at Understanding Our Age

## 2. 研究代表者氏名

岡田暁生 小関隆 佐藤淳二

Akeo OKADA, Takashi KOSEKI, Junji SATO

## 3. 研究期間

2018年4月-2022年3月(3年目)

## 4. 研究目的

本研究の狙いは次の三点である： 1：私たちが今生きている、この息苦しく先が見えない世界 — それは一体なんであるのか、そしてそれはいつ始まったのかについて、それを「Humanitiesの危機」という相のもとに問う。それは同時に「21世紀の人文学 Humanitiesの可能性」についての存在論的問いともなるはずである。 2：本研究は必然的に、同時代についての社会科学的調査とは一線を画するものとして、人文学固有のアプローチを目指すこととなる。すなわち「この時代はいつ始まっていたのか」についての歴史的研究が中心となる。その際に1970年代が一つの焦点となるであろう。 3：本研究のもう一つの焦点は芸術である。すなわち「人文学の危機」と「芸術の危機」を、「人間性の危機」という点で同根のものと想定し、単に1970年代以後の芸術を研究対象とするのみならず、芸術創作に携わる人々との連携を深め、そこから人文学の可能性についての示唆を得ることを目標とする。本研究班は、歴史・思想・芸術という人文学研究の三本柱の間の密接な連携を深めるべく、敢えて岡田暁生・小関隆・佐藤淳二という三人の班長を立てることとする。これは、一人の班長（そしてその専門分野）へと研究成果を一元的に収斂させず、ディシプリン間の真の融合を目指すという意志を示すものである。

1. What is the current world in which we have been living without clear outlook for future? When did our age commence? These are the primary questions the project would investigate. The main hypothesis the project posits is that our age has been an age of the crisis of humanities. The hypothesis implies an inquiry into the validity of humanities as a distinct academic field in the 21st century. 2. In its examination of our age the project would adopt a historical approach. It is expected that the 1970s, a likely starting point of our age, will be a period to be most

intensively examined. 3. The project would pay much attention to the field of art, for the crisis of humanities and that of art seem to be two faces of the same phenomenon. The collaboration with artists is one of the characteristic aspects of the project.

#### 5. 本年度の研究実施状況

本年度はコロナ禍のため対面研究会は中止せざるを得なかったが、6回の研究会をもち、そのほかに「生きるための人文学」と題した三回シリーズの動画を制作してYoutubeにアップした。後者はコロナ禍の人文学の発信の可能性を問うものとして、疫病と世界史（藤原辰史）、コロナ禍のEU（遠藤乾）、未来の音楽の可能性（三輪眞弘）を論じた。また研究会においてはズームはもちろん、テキスト回覧式の形式（あらかじめ発表者が原稿を参加者に回覧し、それに基づいて参加者がMLで応答する）が極めて充実した議論を可能にする形式であることを確認した。また現場のアーティストへの多様な分野の研究者からの聞き取りも実り多いものであった。共同研究においては、今後の人文学が「近代」のみならず、人間世界自体の終焉の可能性を見据えたものにならざるをえないという点に、議論が収斂しつつある。なお制作した動画は11月末にアップしたが、12月末日において合計約700回のアクセスがあった。

#### 6. 本年度の研究実施内容

2020-06-05 オンラインによる音楽はいかにして可能か？ 発表者 三輪眞弘 情報科学芸術大学院大学

2020-06-21 ルーマン社会学紹介 発表者 藤井俊之 人文科学研究所

2020-07-10 山中透氏に1980年代日本のサブカルチャーを聞く 発表者 山中透 フリーアーティスト/DJ

2020-10-03 来し方と行く末：「未来は生きうるか」という問いからいまを考える 発表者 小野塚知二 東京大学経済学部

2020-09-23 動画制作「生きるための人文学」第二回 「コロナ危機下の欧州」 発表者 遠藤乾 北海道大学法学部 コメントーター 小関隆

2020-12-19 岡田暁生『音楽の危機』をめぐって 発表者 岡田暁生 発表者 森本淳生

2021-03-12 藤原辰史『農の原理の史的研究』をめぐって 佐藤淳二

#### 7. 共同研究会に関連した公表実績

遠藤乾（講師）／小関隆（コメントーター）による動画『コロナ危機下の欧州』をYoutubeにアップした（「生きるための人文学」シリーズ第二回）：  
<https://www.youtube.com/watch?v=feBTA0qQMcI&t=1002s>

## 8. 研究班員

所内

岡田暁生、佐藤淳二、小関隆、森本淳生、藤原辰史、立木康介、藤井俊之、伊藤順二、上尾真道

学内

吉岡洋(こころの未来研究センター)

学外

王寺賢太(東京大学文学研究科)、長谷川貴彦(北海道大学文学研究科)、中野耕太郎(東京大学教養学部)、田辺明生(東京大学教養学部)、三輪眞弘(情報科学芸術大学院大学)、上田和彦(関西学院大学)、橋本伸也(関西学院大学)、坂本雄一郎(関西学院大学)

## 9. 共同利用・共同研究の参加状況

	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
学内(法人内)	2	7	0	1	1	0	25		1	6	
国立大学	2	5			1		19		1	2	
公立大学	1	3					12				
私立大学	2	3					14				
大学共同利用機関法人											
独立行政法人等公的研究機関											
民間機関											
外国機関											
その他											
計	7	18	0	1	2	0	70	0	2	8	0
		(1)	(0)	(0)	(0)	(0)	(3)	(0)	(0)	(0)	(0)

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数	
		うち国際学術誌掲載論文数
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	6	1
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)		
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	3	
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)	1	1
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)		

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

雑誌名	掲載論文数	掲載年月日	論文名	発表者名
『環世界の人文科学』(人文書院)	1	R. 2. 3	炭坑化する世界——空気を満たすテクノロジー	瀬戸口明久
Zinbun	1	R3. 2	European Crisis in Historical Perspective',	Serena Ferente&Takashi Koseki
西洋史学 270 号	1	R. 3. 2	「書評：ローベルト・ゲルヴァルト『敗北者たち：第一次世界大戦はなぜ終わり損ねたのか、1917-1923』」	小関隆
East Asian Journal of British History	1	R. 3. 2	Book Review: David Cannadine, Victorious Century: The United Kingdom, 1800-1906,	Takashi Koseki



『yomyom』 65 巻	1	R. 2. 11	空白の恐怖と地球の危機 コロナ禍での思考	藤原辰史
『論点・西洋史学』 金澤周作監修 (ミネルヴァ書房、2020年4月)	3	R. 2. 4	「移民史論」、「ナショナリズム論」、「革新主義とニューディール」	中野耕太郎

共同利用・共同研究による成果として発行した研究書

研究書の名称	編著者名	発行年月	出版社名
モーツァルト	岡田暁生	R2. 9	ちくま書房
音楽の危機	岡田暁生	R2. 9	中公新書
グレアム・ハーマン『思弁的实在論』：翻訳とあとがき	上尾真道	R2. 7	人文書院
イギリス 1960 年代：ビートルズからサッチャーへ	小関隆	R. 3. 2	中公新書
縁食論——孤食と共食のあいだ	藤原辰史	R. 2. 11	ミシマ社
農の原理の史的研究——「農学栄えて農業減ぶ」再考	藤原辰史	R. 3. 1	創元社

11. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由  
なし

12. 次年度の研究実施計画

四年目になる来年度はこれまで 3 年間の研究で焦点化していた「終末」をキーワードとした研究会を 8 回開催すると同時に、最終とりまとめへ向けた論点の収斂を行う。近代を支えていたあらゆる制度が崩壊しつつある現在、「人間」概念の解体は必然的に「人文学 Humanities」の瓦解をもたらさずにはおれない。来年度はポストモダンが喧伝されるようになった 1970 年代を歴史的に振り返ると同時に、当時すでに予感されていた人間の終焉が現実のものとなりつつある今日、果たして歴史学や思想や芸術学といった「人間」前提の諸学はいかにして生き残り得るか、その可能性と不可能性が 2021 年度の主題となる。

13. 次年度の経費

なし

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

来年度も引き続き「生きるための人文学」シリーズの動画を制作してアップロードすると同時に、論文集の構想を具体化する。

# 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の3年目)

## 1. 研究課題

帝国日本の「財界」形成についての研究：1895年-1945年

A Study about the formation of business circles in Imperial Japan: 1895-1945

## 2. 研究代表者氏名

籠谷 直人

Kagotani Naoto

## 3. 研究期間

2018年4月-2021年3月(3年目)

## 4. 研究目的

研究目的 19世紀後半の日本において、政治形態は徳川幕府から明治政府へと移行する。そして、経済的本質としては資本主義とそれを支える政権が登場する。あわせて国民を統合する「主権国家」が、1899年の明治憲法体制によってつくられた。こうした近代日本の形成と拡張にたいして列強先進国は強く警戒する。実際に日本は、日清戦争(1894-95年)と日露戦争(1904-05年)によって、台湾と朝鮮を統合し、「帝国日本」へと変質する。この共同研究では、「帝国」の経済的基盤となる、「財界」の求心的性格を議論したい。明治政府の形成は、近世日本の「薩摩」と「長州」の連合体によって主導された。長州では伊藤博文、山県有朋などが代表的である。西郷隆盛や大久保利通を失った薩摩にあっては、松方正義などの活動が注目される。なかでも経済政策においては、松方正義の施策の貢献が大きい。財政難という問題をかかえた新政府において、松方の多様な政策は、三井や三菱といった「財閥」の成長をうながし、日本に「財界」をつくりあげる経済的背景となる。この共同研究の目的は、「政界」概念とならんで表現されるようになる「財界」をとりあげて、その実態を定義し、あわせて「財界」と「政界」との均衡的關係を解明することにある。権力の支援を受けて誕生する「財界」には政府とのバーティカルな關係がみられるが、地域ごとには資産家のネットワークの伸張という水平な關係も有していた。この共同研究では、『日本全国諸会社役員録』、『商工資産信用録』によってマクロの視点から財界を定義する。そしてミクロの視点としては、実業家の残した『当用日記』(博文館)などの第一次史料を使いたい。第一次史料文書として、「堤林数衛(ジャワ)」、「三好徳三郎(台北)」、「三輪常次郎(名古屋)」の記録類を用意している。

In the last half of the 19th century, Japan saw the transfer of power from Tokugawa to the imperial court, and the transformation from a system of government based on the bakufu (幕府) domains to a unified state. This was also the period that witnessed the transition to a capitalist economy and the establishment of a modern Japanese state system. After the Meiji Constitution was promulgated in 1889, laying the foundations for the political structure of the state, Japan gradually became unified under the force of nationalism. Therefore, friction increased with Western countries that opposed Japan's advances. In the Meiji period, Japan entered into the first Sino-Japanese War (日清戦争, 1894-95) and the Russo-Japanese War (日露戦争, 1904-05), and went on to annex Taiwan in 1895 and Korea in 1910. After these two wars, Imperial Japan emerged. The Meiji leadership was assumed by men such as Ito Hirofumi (伊藤博文) and Yamagata Aritomo (山県有明) who came from Choshu (長州) Matsukata Masayoshi (松方正義), who came from Satsuma (薩摩). Especially Matsukata brought to the government comprehensive financial skills. Although many positions were open to outsiders from other domains, the senior statesmen (genro, 元老) came from the Satsuma and Choshu circle. On the other hand, the Meiji government was still in a precarious position, faced with the runaway inflation incurred by printing an excess of paper monies. A campaign of retrenchment began under the direction of Matsukata, who devoted more than sixteen years of his career to Meiji finances. A new land tax (地租改正) and the campaign "Increase Production and Promote Industry (殖産興業)," management of the currency, the establishment of the Bank of Japan (日本銀行, 1882), and adherence to the Global Gold Standard (国際金本位制) were all carried out under his direction. However, starting in 1886, government notes were converted to silver, and a silver standard was established. To help put an end to inflation, factories in the industrial sector, excluding strategic industries such as munitions, minting of currency and communications, were sold off comparatively cheap, to private businessmen, such as Mitsui and Mitsubishi. Close to government leaders and sharing their goals, these men emerged as leaders of future Zaibatsu (財閥), centered on the Japanese business circle. This Japanese business circle has been called Zaikai (財界). Our new joint research project aims to analyse the role of Zaikai in Imperial Japan's expansion until 1945. We will use primary materials, especially the diaries of Japanese businessmen. We will focus on the diaries of Tatumibayashi Kazue (Jakaruta), Miyoshi Tokusaburo (Taipei), and Miwa Tunesaburo (Nagoya)

5. 本年度の研究実施状況

本年度は、コロナウィルス蔓延の影響下で研究会を開催することができなかった。

6. 本年度の研究実施内容

なし

7. 共同研究会に関連した公表実績

なし

8. 研究班員

所内

岩井茂樹、村上衛、都留俊太郎

学外

陳来幸（兵庫県立大学）、上田貴子（近畿大学）、泉川普、鍾淑敏（中央研究院・台湾史研究所）

9. 共同利用・共同研究の参加状況

なし

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

なし

11. 費目の30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

なし

12. 次年度の研究実施計画

昨年度、今年度と研究代表者の病気のための休職、新型コロナウイルスの感染拡大の影響で当初の計画予定より大幅に進捗が遅れているため、次年度は主に「日本財界と台湾」を主題として研究会を開催し、報告書をまとめられるようにする。

13. 次年度の経費

なし

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

研究成果の一部を中央研究院台湾史研究所にて図書として発行する予定にしている。



# 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(5年計画の3年目)

## 1. 研究課題

前近代ユーラシア東方の戦争と外交

Warfare and Diplomacy in Pre-modern Eastern Eurasia

## 2. 研究代表者氏名

岩井 茂樹・古松 崇志

Iwai Shigeki, Furumatsu Takashi

## 3. 研究期間

2018年4月-2023年3月(3年目)

## 4. 研究目的

ユーラシア東方は、草原・砂漠から成る乾燥地帯の中央ユーラシア東部と世界屈指の農耕地帯である中国本土とにまたがる地域である。そこは、古くから北の遊牧・狩猟民と南の農耕民という異なる生態環境に根ざした生業を持つ人びとが接触・交流する場であった。北方の遊牧・狩猟民集団は、前近代には最強だった騎馬軍事力を武器として、何度も強大な遊牧王朝を形成して南の中国王朝と対峙し、ときには中国本土を軍事制圧して支配下に入れることもあった。北方草原の遊牧民と中国本土の農耕民とあいだの対立・共存・支配被支配・融合といった多様な関係性は、ユーラシア東方の歴史の基調をなすといつてよい。本研究では、12世紀前半にマンチュリアより勃興してユーラシア東方に覇を唱えた金(女真)と宋朝との関係をおもに記した南宋時代の史書『三朝北盟会編』を取り上げる。文献の精読をつうじて、ユーラシア東方における遊牧王朝と中国王朝とのあいだの戦争と外交の実態を実証的に解明するとともに、金の華北征服という北方からの衝撃が、当時の中国の政治・社会・文化にいかなる影響を及ぼし、いかなる変容をもたらしたのかという、中国史上の重要な問題を考究することをも目指すものである。

In Eastern Eurasia, there have been constant exchanges and interactions between pastoral nomads of the eastern part of the Eurasian Steppe and settled agriculturalists of China proper. Northern pastoral nomads founded several powerful nomadic dynasties, based on a strong cavalry force, which was the most preeminent military technology in pre-modern times; they confronted the Chinese dynasties and even conquered China several times. Relations between pastoral nomads from the steppe and agrarian people of China were dynamic and diverse, including military

conflict, domination, coexistence and fusion. They can be regarded as the basic patterns of Eastern Eurasian history. This project will focus on the Southern Song history book "Sanchao beimeng huibian", which mainly deals with the diplomatic relations of the Song dynasty with the Jin dynasty of the Jurchen people during the first half of the 12th century, when the Jin dynasty established hegemony in the multi-state system of Eastern Eurasia. We will use the documents included in this book to analyze the characteristics of warfare and diplomacy between Nomadic dynasties and Chinese dynasties. In addition, we will examine the impact and influence of the Jin conquest of Northern China on the politics, society and culture of China, including Northern China under the Jin and Southern China under the Southern Song.

#### 5. 本年度の研究実施状況

研究テーマの「前近代ユーラシア東方の戦争と外交」について具体的に考察するための題材として、南宋時代の史書『三朝北盟会編』の会読を進めた。16回にわたって『三朝北盟会編』の会読をおこない、『中華再造善本』所収の中国国家図書館（北京図書館）所蔵の明鈔本を底本に、テキストの校訂・訳注作業を進め、巻九から巻十三までを読み終えた。

#### 6. 本年度の研究実施内容

2020-04-14	『三朝北盟会編』巻九会読	発表者	齊藤茂雄
2020-04-28	『三朝北盟会編』巻九会読	発表者	濱野亮介
2020-05-12	『三朝北盟会編』巻九会読	発表者	藤原崇人
2020-05-26	『三朝北盟会編』巻九会読	発表者	武田和哉
2020-06-09	『三朝北盟会編』巻十会読	発表者	伊藤一馬
2020-06-23	『三朝北盟会編』巻十会読	発表者	矢木毅
2020-07-07	『三朝北盟会編』巻十会読	発表者	高井たかね
2020-07-21	『三朝北盟会編』巻十一会読	発表者	古松崇志
2020-10-13	『三朝北盟会編』巻十一会読	発表者	毛利英
2020-10-27	『三朝北盟会編』巻十一会読	発表者	井黒忍
2020-11-24	『三朝北盟会編』巻十二会読	発表者	城地孝
2020-12-08	『三朝北盟会編』巻十二会読	発表者	福谷彬
2020-12-22	『三朝北盟会編』巻十二会読	発表者	藤本猛
2021-01-12	『三朝北盟会編』巻十三会読	発表者	小野達哉
2021-01-26	『三朝北盟会編』巻十三会読	発表者	岩本真利絵
2021-02-09	『三朝北盟会編』巻十三会読	発表者	遠藤総史



7. 共同研究会に関連した公表実績

なし

8. 研究班員

所内

古松崇志、岩井茂樹、矢木毅、村上衛、高井たかね、福谷彬、

学外

飯山知保(早稲田大学文学学術院)、井黒忍(大谷大学文学部)、伊藤一馬(大阪大学大学院文学研究科)、岩本真利絵(釧路公立大学)、遠藤総史(大阪大学大学院文学研究科)、小野達哉(同志社大学文学部)、加藤雄三(専修大学法学部)、木村可奈子(滋賀県立大学人間文化学部)、小林隆道(神戸女学院大学文学部)、齊藤茂雄(京都大学人文科学研究所)、承志(追手門学院大学基盤教育機構)、城地孝(同志社大学文学部)、武田和哉(大谷大学文学部)、橋本雄(北海道大学文学研究科)、濱野亮介(大谷大学文学部)、藤本猛(京都女子大学文学部)、藤原崇人(龍谷大学文学部)、船田善之(広島大学文学研究科)、古畑徹(金沢大学人間社会研究域)、水越知(関西学院大学文学部)、毛利英介(京都大学人文科学研究所)、渡辺健哉(大阪市立大学文学研究科)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数				延べ人数					
		総計	外国人	若手研究者	若手研究者	大学院生	総計	外国人	若手研究者	若手研究者	大学院生
				(40歳未満)	(35歳以下)				(40歳未満)	(35歳以下)	
学内(法人内)	1	8		1	1		121		16	14	
		(1)					(16)				
国立大学	4	5		1	1		40		10	9	
公立大学	3	3			2		21		17		
		(2)			(2)		(17)		(17)		
私立大学	9	12	1				114				
大学共同利用機関法人											
独立行政法人等の研究機関											
民間機関											
外国機関											
その他											
計	17	28	1	2	4	0	296	0	43	23	0
		(3)	(0)	(0)	(2)	(0)	(33)	(0)	(17)	(0)	(0)

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

なし

11. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

なし

12. 次年度の研究実施計画

研究テーマの「前近代ユーラシア東方の戦争と外交」について具体的に考察するための題材として、南宋時代の史書『三朝北盟会編』の会読を継続する。『中華再造善本』所収の中国国家図書館（北京図書館）所蔵の明鈔本を底本に、テキストの校訂・訳注作業を進め、巻十四から読み進める予定である。

13. 次年度の経費

なし

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

これまでに『三朝北盟会編』を会読した成果をとりまとめ、校訂テキストを整理し、ウェブ上に掲載する。そのうち一部については、校訂テキストと訳注を公刊する。

# 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画(4年に延長)の3年目)

## 1. 研究課題

3世紀東アジアの研究

A Study of East Asia in the Third Century

## 2. 研究代表者氏名

森下 章司

MORISHITA Shōji

## 3. 研究期間

2018年4月-2022年3月(3年目)

## 4. 研究目的

3世紀の東アジアは、中国における漢王朝の滅亡、三国への分裂をきっかけとして韓・倭の地域勢力が勃興、地域社会が独立性を強めた変動の時代であった。そうした状況を物語る資料として『三国志』をはじめとする文献があるほか、とくに近年は各地の考古資料も増大し、多くの研究成果が蓄積された。こうした3世紀における地域社会の特色や相互関係に関して、考古学・文献史・思想史の各分野と各地域の専門研究者による共同研究と議論を通じ、多角的な視点から検討をおこなう。①『三国志』烏丸鮮卑東夷伝のテキスト読解、②考古学による各地の生活形態・社会制度復元との対比、③各地域の独自性と共通性の比較、④地域間交流の検討などを軸として、東アジア世界において3世紀という時代が果たした意義について総合的な研究を推進する。

The purpose of this seminar is to clarify the regional features and the relationships among the societies of China, Korea and Japan in the 3rd century. In this age, after the collapse of the Han dynasty and the formation of Three Kingdoms, the tribal societies of Korea and Japan had developed to the Chiefdom stage. San-Guo-Zhi (三国志) describes these local societies and their changes in detail; also, the number of archaeological records of this area has been increasing recently. Through textual, historical and archaeological studies, we will point out the significant role played by local societies in 3rd century Asian history.

## 5. 本年度の研究実施状況

本年度は新型コロナウイルス感染症の影響により、4月から6月の研究会は休会とし、7月から研究会を再開した。研究会は、原則として分館大会議室での対面研究会とZoomによる中継とを併用したハイブリッド形式を採用し、合計8回を実施した。班員による研究報告では、後漢から魏晋のころに生じた墓制の変革や車騎行列の変化に着目し、考古・画像資料と出土文字資料・文献史料をもとに3世紀の中国における社会的・制度的変化を明確にしようとした。また、近年、曹操高陵や洛陽西朱村曹魏大墓から出土した石牌に着目し、いくつかの石牌銘文の釈読と考証を試みるとともに、その研究状況の把握と基礎的な整理をおこなった。そのほか、高句麗をはじめとする3～4世紀東北アジア地域の状況について、文献史料と考古資料の立場からそれぞれ検討会を実施し、さらに外部から講師を招いて東アジアの動物考古学・機織技術・葬具などをテーマに最新の研究成果を講演してもらい、中国・朝鮮半島・日本列島の研究状況について知見を深めた。

## 6. 本年度の研究実施内容

2020-07-10 漢魏の墓制変革：近年における曹魏大型墓の発見と関連するいくつかの問題  
発表者 向井佑介 京都大学人文科学研究所

2020-10-30 紫綬について 発表者 森下章司 大手前大学

2020-11-13 遼陽と高句麗の壁画墓にみえる車騎行列 発表者 岡村秀典 京都大学人文科学研究所

2020-11-27 曹魏と高句麗：高句麗遠征と当該期の高句麗王系 発表者 井上直樹 京都府立大学

2020-12-11 日韓の動物考古学：日韓の卜骨と犬骨の比較研究を前提に 発表者 宮崎泰史 大阪府立狭山池博物館

2020-01-22 日本列島における木槨の受容と展開 発表者 岡林孝作 奈良県立橿原考古学研究所

2020-02-05 古代日本とアジア諸国の機織技術 発表者 東村純子 福井大学

2020-03-05 馬具からみた3・4世紀の東北アジア：慕容鮮卑と高句麗を中心に 発表者 諫早直人 京都府立大学

## 7. 共同研究会に関連した公表実績

なし

## 8. 研究班員

所内

向井佑介、岡村秀典、稲本泰生、宮宅潔、古勝隆一、古松崇志、藤井律之、高井たかね、目黒杏子

学内

吉井秀夫（文学研究科）、下垣仁志（文学研究科）、坂川幸祐（文学研究科）

学外

長友朋子（立命館大学）、井上直樹（京都府立大学）、諫早直人（京都府立大学）、金宇大（滋賀県立大学）、田中一輝（立命館大学）、大谷育恵（金沢大学）、山本堯（泉屋博古館）、馬渕一輝（黒川古文化研究所）

## 9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数				延べ人数					
		総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
学内(法人内)	2	10		1	1	1	68		6	6	6
		(2)					(14)				
国立大学	3	3		1			9		7		
		(2)		(1)			(8)		(7)		
公立大学	2	5		2	1	1	15		6	4	4
		(1)		(1)	(1)	(1)	(4)		(4)	(4)	(4)
私立大学	3	3					20				
		(1)					(6)				
大学共同利用機関法人	1	1					1				
独立行政法人等公的研究機関	3	3					5				
民間機関	2	2		2	2		10		10	10	
外国機関		1	1	1	1	1	3	3	3	3	3
		(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(3)	(3)	(3)	(3)	(3)
その他		1					4				
計	16	29	1	7	5	3	135	3	32	23	13
		(7)	(1)	(3)	(2)	(2)	(35)	(3)	(14)	(7)	(7)

## 10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

なし

## 11. 費目の30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

なし

## 12. 次年度の研究実施計画

今年度の研究会を実施するなかで、近年発見された洛陽西朱村曹魏大墓と曹操高陵出土の石牌が、新たな研究対象・課題として浮かびあがってきた。これら曹魏大墓出土の石牌にはさまざまな副葬器物の名称・特徴・数量などが記され、考古学的に発掘された実物資料の少ない3世紀魏晋代の文物を検討する上で貴重な情報を提供してくれる。身分や制度に関わる器物名も多く含まれており、政治体制・制度が大きく変貌を遂げたこの時期の社会を理解する上でも重要な位置を占める。こうしたことから、今年度を実施した石牌の基礎的整理

をふまえ、石牌銘文—文献史料—考古遺物をつきあわせた総合的な検討を、次年度も研究班を1年間延長して継続的に実施していく計画である。さらに、今年度まで3年間をかけて実施してきた東アジア社会の多角的・総合的な検討成果を報告論文集にまとめるべく、個別のテーマにもとづいた資料集成・整理の成果報告や研究報告もあわせておこない、ゲストを招いての研究講演会も随時実施していく予定である。

#### 13. 次年度の経費

なし

#### 14. 研究成果公表計画および今後の展開等

次年度の研究期間終了後に、最終報告論文集の公刊、および学会でのシンポジウム開催を計画している。これまでに検討してきた都城・墓制・飲食・車馬・儀礼など各分野の研究をさらに発展させつつ、今年度から検討を開始した曹魏大墓出土の石牌銘文—文献史料—考古遺物をつきあわせた検討の成果を反映させることで、3世紀東アジアの文化・社会・制度の研究に新たな地平を切りひらくことができると考えている。

# 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の2年目)

## 1. 研究課題

前近代内陸アジアとその隣接地域の文化と社会

Studies on the Cultures and Societies in Premodern Inner Asia and its Adjacent Areas

## 2. 研究代表者氏名

稲葉 穰

Inaba, Minoru

## 3. 研究期間

2019年4月-2022年3月(2年目)

## 4. 研究目的

いわゆる古代文明発祥の地であり、伝統的に独自の歴史文化を形成してきたとみなされる西アジア、南アジア、東アジアは地理的には海上と内陸アジア（中央アジア、中央ユーラシアとほぼ同義で用いる）の陸上ルートを通じて様々な形で接触してきた。その接触の場を提供し、時にこれら大陸縁辺の世界に多大な影響をおよぼした内陸アジア世界もまたそれらの地域と同等に一つの文化世界、歴史世界であるかのように措定されてきたが、そのイメージは砂漠とステップと遊牧部族が支配的な空間、というものであった。しかし20世紀末にソヴィエト連邦が崩壊し、パミール以西の内陸アジアが世界の研究者に対して門戸を開き、また東トルキスタンにおいて中国の非常に活発な研究が進んだことにより、当該地域を研究するための材料や視点は漸次増大してきている。このような状況を踏まえ、今後進められねばならないのは、上述のようにステレオタイプ的に理解されてきた内陸アジア内部の地理的な diversity や、社会結合のあり方、都市に関するより詳細な研究である。本研究班は古代から近代に到る内陸アジアとその隣接地域に関する様々な社会研究、文化研究のケーススタディを積み重ねることで、多様な内陸アジア像を描き出し、ステレオタイプ的な理解の克服を目指す。

West, South, and East Asia, traditionally regarded as "civilizational centers", have been in contact with each other through maritime and inland routes. Inner Asia (almost synonymous with Central Asia/ Central Eurasia), which served as a contact zone for these areas and at times greatly influenced them, has also been perceived as an independent historico-cultural world. Even today, the common image

of Inner Asia is one of deserts and steppes where monolithic, nomadic tribal societies and cultures prevail. However, starting with the last two decades of the 20th century, materials for further researching the history of the area in question have started to become increasingly available. Based on such materials, the issue of the diversity of societies and cultures within Inner Asia has been attracting more and more attention. The purpose of our research project is to shed light on the history and culture of Inner Asia through case studies of its societies and cultural interactions, etc. from antiquity to the early modern period.

#### 5. 本年度の研究実施状況

本年度は新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、対面式での研究会を開くことが困難となった。そこで基本的にオンラインにて、課題としている資料である 11 世紀の Fami によるペルシア語地方史『ヘラート史』の新発見写本の会読を中心として研究会を運営した。オンラインでの開催は史料会読にとっては利点もあり（各参加者が自分の研究室にある研究資源を随時利用できるなど）、予想以上にうまく運営できたと考えている。一方研究発表の方はオンラインもしくはハイブリッドでの開催は一回に留まっているが、これは会場までの移動にかかるリスクや、ハイブリッド型の研究会を行うための環境整備が不十分であることなどから、改善の余地は大いにあると考えている。

#### 6. 本年度の研究実施内容

- 2020-05-08 前近代内陸アジアとその隣接地域の文化と社会 ヘラート史会読 発表者 角田哲朗 京都大学大学院文学研究科 ヘラート史会読 発表者 稲葉稯
- 2020-05-22 前近代内陸アジアとその隣接地域の文化と社会 ヘラート史会読 発表者 稲葉稯
- 2020-06-12 前近代内陸アジアとその隣接地域の文化と社会 ヘラート史会読 発表者 稲葉稯
- 2020-06-26 前近代内陸アジアとその隣接地域の文化と社会 ヘラート史会読 発表者 稲葉稯
- 2020-07-10 前近代内陸アジアとその隣接地域の文化と社会 タルマシリーン・ハンの時代-チャガタイ・ウルスのイスラム化をめぐって- 発表者 川本正知 奈良大学
- 2020-07-26 前近代内陸アジアとその隣接地域の文化と社会 国際ワークショップ Remains and Memories of Buddhists in Islamizing West Asia コメンテーター 稲葉稯
- 2020-09-25 前近代内陸アジアとその隣接地域の文化と社会 ヘラート史会読 発表者 稲葉稯 ヘラート史会読 発表者 小倉智史 東京外国語大学
- 2020-10-23 前近代内陸アジアとその隣接地域の文化と社会 ヘラート史会読 発表者 小倉智史 東京外国語大学



- 2020-11-14 前近代内陸アジアとその隣接地域の文化と社会 パンジャーブ北部土着集団の千年 発表者 小倉智史 東京外国語大学
- 2020-11-27 前近代内陸アジアとその隣接地域の文化と社会 ヘラート史会誌 発表者 中西竜也
- 2020-12-11 前近代内陸アジアとその隣接地域の文化と社会 ヘラート史会誌 発表者 中西竜也 ヘラート史会誌 発表者 稲葉穰
- 2021-01-22 前近代内陸アジアとその隣接地域の文化と社会 ヘラート史会誌 発表者 稲葉穰
- 2021-02-12 前近代内陸アジアとその隣接地域の文化と社会 ヘラート史会誌 発表者 角田哲朗 京都大学大学院文学研究科
- 2021-02-26 前近代内陸アジアとその隣接地域の文化と社会 ヘラート史会誌 発表者 杉山雅樹 京都外国語大学
- 2021-03-26 前近代内陸アジアとその隣接地域の文化と社会 ヘラート史会誌 発表者 川本正知 奈良大学

#### 7. 共同研究会に関連した公表実績

7月26日、科研費基盤研究A「グプタ朝期以降のインド仏教の僧院に関する総合的研究」(代表:久間泰賢氏)の主宰する国際ワークショップ「Remains and Memories of Buddhists in Islamizing West」(オンライン開催)を共催し、班長である稲葉が、Convenerとして参加した。

#### 8. 研究班員

所内

船山徹、稲本泰生、中西竜也、宮本亮一

学内

檜山智美(白眉センター)、井谷鋼造(大学院文学研究科)、吉田豊(文学研究科)、帯谷知可(東南アジア地域研究研究所)、内記理(文学研究科)、角田哲朗(文学研究科)、今松泰(アジア・アフリカ地域研究研究科)

学外

大津谷馨(リエージュ大学)、川本正知(奈良大学)、和田郁子(岡山大学)、入澤崇(龍谷大学)、小野浩(京都橘大学)、真下裕之(神戸大学)、伊藤隆郎(神戸大学)、岩井俊平(龍谷大学)、井上陽(相愛大学)、影山悦子(奈良文化財研究所)、上枝いづみ(金沢大学)、杉山雅樹(京都外国語大学)、田中悠子(ロンドン大学)、Erika Forte(Austrian Academy of Sciences)、小倉智史(東京外国語大学)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
学内(法人内)	3	12	1	5	4	2	90	2	45	15	15
国立大学	4	5		1			40		15		
公立大学											
私立大学	6	9	1	2	2		42				
大学共同利用機関法人											
独立行政法人等公的研究機関											
民間機関											
外国機関											
その他	1	2					4				
計	14	28	2	8	6	2	176	2	60	15	15
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	1		0	
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)	0		0	
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	11		6	
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)	1		1	
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0		0	

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

雑誌名	掲載 論文数	掲載 年月日	論文名	発表者名
東方学報 94	27	R1.12	フロンティアと驚異	稲葉穰
敦煌學 36	10	R2.8	融通文理，一以貫之：二十世紀初期魏思納（Julius Wiesner）庫車、和闐出土古紙研究撮述	<u>慶昭蓉</u>
Buddhism in Central Asia I: Patronage, Legitimation, Sacred Space, and Pilgrimage	11	R2.4	Images of Patronage in Khotan	Forte, Erika
Iran and Central Asia in the First Millenium: Continuity and Change from the Pre-Islamic to the Islamic Period	12	R3.3	Xian temples of the Sogdian Colonies in China	<u>影山悦子</u>
西南アジア研究 90	4	R2.6	ガンダーラの石製小皿と工人集団	<u>岩井俊平</u>
The Global Connections of Gandharan Art	10	R2.10	Buddhist temples in Tukharistan and their relationship with Gandharan traditions	<u>岩井俊平</u>
メトロポリタン史学 15	5	R2.12	ムガル帝国宮廷における贈与儀礼とマンサブ制度	<u>真下裕之</u>
NTM Zeitschrift für Geschichte der Wissenschaften 28-3	8	R2.7	Transmission of the “World” : Sumeru Cosmology as Seen in Central Asian Buddhist Paintings Around 500 AD	檜山智美

佛教藝術 5	5	R2.9	敦煌莫高窟第 285 窟西壁 壁画に見られる星宿図像 と石窟全体の構想につい て	檜山智美
Iran and Central Asia in the First Millenium: Continuity and Change from the Pre-Islamic to the Islamic Period	12	R3.3	Central Asia in the eighth century: Wukong's itineraries between China and India	稲葉穰

11. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

なし

12. 次年度の研究実施計画

状況の推移を見ながら、オンラインによる史料会読と対面式による研究報告を並行して行うという方向で研究を進める予定である。特に史料会読は予想以上に順調に訳注原稿の作成が進んでおり、これを取りまとめる作業をも行う。

13. 次年度の経費

なし

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

次年度末までに作成できた資料の訳注について、東方学報等での成果公開を計画している。

# 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の2年目)

## 1. 研究課題

20世紀中国史の資料的復元

Reviving the History of Twentieth-Century China by Reviewing the Source Materials

## 2. 研究代表者氏名

石川禎浩

ISHIKAWA Yoshihiro

## 3. 研究期間

2019年4月-2022年3月(2年目)

## 4. 研究目的

中国における近現代史の叙述は、領域によって程度の差はあるものの、イデオロギー型革命政党によって統制され、方向付けられてきた。かれらは党派ごとに自己中心的、あるいは独善的解釈による歴史像を持つだけでなく、そうした歴史像を支えるべく、歴史資料の収集やその編纂、刊行にも力を入れてきた。ただし、そのさいに資料はしばしばその歴史像に符合するよう編纂（改竄を含む）されてきたため、政治史にせよ、思想史にせよ、あるいは文学史にせよ、既存の公刊史料に基づく限り、研究者はどうしてもその枠組みから脱却できないという隘路に行き着いてしまう。それゆえ、近代の中国がどのようなものであったのかを知るためには、まず基本的な史料を編纂状態以前にもどすという気の遠くなる作業から始めなければならない。本研究班は、20世紀の中国の政治、運動、文学、芸術といった領域で、それぞれ根本資料と見なされてきた基本文献に関して、その生成や編纂、刊行の経過を洗い直したうえで本来の姿にもどし、それによって中国20世紀史全般を復元し、再構築することを目指す。

The history of 20th century China, whether good or bad, has been written under the dictates of the political parties which have an ideological mindset of the revolutionary. They not only had their own self-centered narratives of the modern history, but also collected and compiled historical materials concerned to reinforce their narratives. The problem is, however, that they often made the falsifications when they edited those source materials into the official documents. Because of this, we should understand how their narratives were formed along with the compilation of the historical materials in the century. In this research

seminar, we shall investigate and restore various source documents which has been considered to be the basic materials in each area of modern China, such as politics, revolutionary movement, literature, art and so on. This type of research, which makes full use of original sources scattered around the world to revive the primary documents of twentieth-century China, would open the way for us to have a refreshing understanding of how the modern Chinese history really was.

## 5. 本年度の研究実施状況

隔週金曜午後に研究班例会を開催することを中心に活動を進めた。班員は30数名、毎回の研究班例会の出席者は20名程度であった。新型コロナウイルスの感染拡大のため、オンラインあるいはハイブリッド方式による開催となったが、幸い平常時と同様の規模・質を維持することができた。特にオンライン開催であることをいかして、東京で活躍する複数の研究者による積極的な参加を得られたのは収穫であった。12月末時点で開催した例会は12回を数え、毎回事前にレジュメを班員に配布し、またコメンテーターをつけて、専門的見地から議論を深められるよう工夫した。研究班では、まず報告者が1時間半程度の報告を行ったあと、コメンテーターが30分程度の批評を加え、その上で全体討論を実施するという形式を取った。報告用レジュメを事前に班員に配布していることもあり、議論が活発に行われた。また、複数の外国人研究者・院生（主として中華人民共和国出身）が継続的に参加していることも本研究班の特色であり、彼らとの討論を通じて、中国の近現代史関連の基本的な文献や資料集の成り立ちについての理解をいっそう深めることができた。資料的復元として、注目すべき研究・対象としては、内山完造『花甲録』や、農村部における工作の状況を伝える『喬欽起工作筆記』などが俎上にあげられ、それらを資料として扱う場合の問題点や注目点が提示された。また、中国共産党史にかかわる「若干の歴史問題に関する決議」や「国家構成員」概念など、従来の研究蓄積の前提を問い直す試みも行われた。さらに、前身の研究班の成果である『毛沢東に関する人文的研究』について2度の合評会を開催、8名の評者によるコメントを得て、中国現代史研究の蓄積の継承・深化の道筋を探った。

## 6. 本年度の研究実施内容

2020-05-08 毛沢東時代の読書規範——伝統からの離脱と回帰 発表者 比護遥 教育学研究科 コメンテーター 水羽信男 広島大学

2020-05-22 20世紀中国の政治・思想史研究を発展させるための出版政策史研究——『中華人民共和国出版史料』の活用 発表者 中村元哉 東京大学 コメンテーター 瀬戸宏 摂南大学

2020-06-05 『毛沢東に関する人文的研究』合評会（1） 毛沢東と胡適 発表者 森川裕 貫 関西学院大学 毛沢東と巨大水利建築——1950年代の官庁ダムと十三陵ダムを中心に 発表者 島田 美和 慶応義塾大学

2020-06-19 『毛沢東に関する人文的研究』合評会（2） 政治家・芸術家：1940年代

- の延安における全体主義芸術の確立 発表者 漆 麟 人文科学研究所 文化大革命と毛沢東の水泳 発表者 高嶋航 文学研究科 ”
- 2020-07-03 史料としての『花甲録』——特に戦時期の検証 発表者 金丸裕一 立命館大学 コメンテーター 谷雪妮 文学研究科
- 2020-07-17 『劉少奇派』とは何であったのか 発表者 谷川真一 神戸大学 コメンテーター 林礼釗 大阪大学
- 2020-10-02 『喬欽起工作筆記』から見る現代中国政治の転換 発表者 田中仁 大阪大学 コメンテーター 河野正 東京大学
- 2020-10-16 『台湾之農具』と帝国の視角 発表者 都留俊太郎 人文科学研究所 コメンテーター 菊地暁 人文科学研究所
- 2020-10-30 中国共産党が使用する国家構成員の概念についての歴史的検討 発表者 和田英男 大阪大学 コメンテーター 谷川真一 神戸大学
- 2020-11-13 上海市檔案館所蔵史料から考えるある「民族資産階級」の軌跡（1949-1965） 発表者 水羽信男 広島大学 コメンテーター 江田憲治 人間・環境学研究科
- 2020-11-27 橘樸の人物像の再構成：大正知識人、民族誌家、社会民主主義者 発表者 谷雪妮 文学研究科 コメンテーター 福家崇洋 人文科学研究所
- 2020-12-11 “若干の歴史問題に関する決議”に関する若干の考察 発表者 石川禎浩 人文科学研究所 コメンテーター 小野寺史郎 埼玉大学
- 2021-01-15 中華人民共和国成立初期の復員軍人と栄誉軍人模範——「栄軍旗幟」張樹義の物語と基層革命関係者集団 発表者 丸田孝志 広島大学 コメンテーター 森川裕貴 関西学院大学 ”
- 2021-01-29 林彪派将軍回想録の資料価値：邱会作回憶録を中心に 発表者 瀬戸宏 摂南大学 コメンテーター 鄭成 早稲田大学
- 2021-02-12 日独合作映画『新しき土』の中国上映騒動について：民国外交部档案を手がかりに 発表者 楊韜 仏教大学 コメンテーター 韓燕麗 東京大学
- 2021-02-26 中華人民共和国初期における肺結核医学資料の編纂と出版（1949-1957） 発表者 瞿艷丹 人文科学研究所 コメンテーター 飯島涉 青山学院大学
- 2021-03-12 ふたたび、「路線」について 発表者 江田憲治 人間・環境学研究科 コメンテーター 李ハンキョル 文学研究科

#### 7. 共同研究会に関連した公表実績

なし

#### 8. 研究班員

所内

岩井茂樹、村上衛、福家崇洋、漆麟、王剛、郭まいか

学内

江田憲治（人間・環境学研究科）、瞿艶丹（文学研究科）、谷雪妮（文学研究科）、高嶋航（文学研究科）、太田出（人間・環境学研究科）、比護遙（教育学研究科）、貴志俊彦（東南アジア地域研究研究所）、李ハンキョル（文学研究科）、秋田朝美（経済学研究科）

学外

韓燕麗（東京大学）、菊池一隆（愛知学院大学）、島田美和（慶應義塾大学）、鄒燦（大阪大学）、瀬戸宏（摂南大名誉教授）、瀬辺啓子（佛教大学）、田中仁（大阪大学）、谷川真一（神戸大学）、団陽子（神戸大学）、都留俊太郎（同志社大）、土肥歩（同志社大）、中村元哉（東京大学）、丸田孝志（広島大学）、三田剛史（明治大学）、水羽信男（広島大学）、宮内肇（立命館大学）、森川裕貫（関西学院大学）、山崎岳（奈良大学）、楊韜（佛教大学）、林礼釗（大阪大学）

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	外国人	若手研究者	若手研究者	大学院生	総計	外国人	若手研究者	若手研究者	大学院生
				(40歳未満)	(35歳以下)				(40歳未満)	(35歳以下)	
学内(法人内)	5	16	4	4	4	2	105	44	55	46	15
		(6)	(4)	(4)	(2)	(2)	(39)	(39)	(39)	(25)	(4)
国立大学	9	17	1	3	2	2	87	27	38	17	7
		(4)	(1)	(2)	(1)	(1)	(18)	(14)	(17)	(7)	(3)
公立大学	1	1					1				
		(1)					(1)				
私立大学	8	9		2			22		11		
		(1)		(1)			(2)		(2)		
大学共同利用機関法人											
独立行政法人等公的研究機関											
民間機関											
外国機関	1	1					1				
その他		5					18				
		(2)					(2)				
計	24	49	5	9	6	4	234	71	104	63	22
		(14)	(5)	(7)	(3)	(3)	(62)	(53)	(58)	(32)	(7)



10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	7		0	
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)	1	(0)	0	(0)
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	8		0	
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)	0	(0)	0	(0)
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0		0	

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

雑誌名	掲載論文数	掲載年月日	論文名	発表者名
東洋学報	1	2020年6月	広西省における壬寅奇災とアメリカ救済遠征隊	土肥歩
「亡国の越境者」の100年	1	2020年10月	越境者たちの神戸と「華僑」社会：「反攻」「解放」「独立」を巡るせめぎあい	岡野翔太
文化資源学	1	2020年6月	日仏美術品交換の企図と挫折(1882-1885)：外務省記録から見る国際文化交流の事例として	比護遥
現代中国研究	1	2020年10月	抗戦期中国の読書と動員：政治コミュニケーションから見る『読書生活』(1934-1936)	比護遥

20 世紀研究	1	2020 年 12 月	女性史の三通りの読み方	梁秋虹 著、 都留俊太郎 訳
駒込武編『生活綴方で編む「戦後史」』	1	2020 年 6 月	台湾語 王育徳における大衆と「チャンポン語」	都留俊太郎
飯島渉編『大国化する中国の歴史と向き合う』	1	2020 年 8 月	通史と歴史像	石川禎浩
転換期中国における社会経済制度	1	2021 年 2 月	寄付する人と使う貨幣——清代後期の貨幣使用と格差社会	村上衛
社会経済史学	1	2020 年 5 月	書評：豊岡康史・大橋厚子編『銀の流通と中国・東南アジア』	村上衛
歴史と経済	1	2020 年 10 月	書評：古田和子編著『都市から学ぶアジア経済史』	村上衛

11. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由  
なし

#### 12. 次年度の研究実施計画

本年度同様、隔週金曜午後に研究班例会を開催することを中心に活動を進める。新型コロナウイルスの感染拡大のため、オンラインあるいはハイブリッド方式による開催の見通しである。年度末に高質の音響設備の導入をはかり、平常時と同様の質の議論を維持できるよう努める。本年度までに班員による報告は一巡し、班員間で相互のテーマ・問題関心の共有が図られており、二巡目の報告となる今年度は、それぞれ研究の深化を目指して進める。また、オンラインであることを生かして東京から新たに研究班に参加することになった班員も報告を行うことが決まっている。中国現代史、とくに今日の学界で盛んに再検証が進められている 1950 年代の政治・文化面について議論を深めていく。コロナ禍のもとにあって、研究活動の維持には様々な困難が予想されるが、主にオンライン環境を積極的に生かしながら、従来以上に多様で充実した研究成果を得られるようにする。

13. 次年度の経費  
なし

#### 14. 研究成果公表計画および今後の展開等

本年度までに正規班員による研究報告がほぼ一巡し、班員の目指している研究テーマや問題意識がおおむね共有できたのを受け、二回目の報告を順にやってもらう。開催日は本年度同様の金曜午後とし隔週開催、予定では年間 16 回開催である。

本研究班はそのテーマの性質上、各地に散在する資料をその版本を含めて精査することが欠かせない。ただし、目下のコロナウィルスの感染拡大という状況の中、出張によって資料収集、発掘をするのが困難な状況が、今後もしばらくの間続くであろう。したがって、次年度の公表計画としては、オンライン中継を活用した定期例会を継続するとともに、本年度に実施したオンラインシンポジウム（講演会）に似た企画を策定することを考えている。



# 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の1年目)

## 1. 研究課題

古典中国語のコーパスの研究

Study of Classical Chinese Corpora

## 2. 研究代表者氏名

安岡 孝一

Koichi YASUOKA

## 3. 研究期間

2020年4月-2023年3月(1年目)

## 4. 研究目的

2010年以来、われわれが構築を続けてきた古典中国語(漢文)コーパスは、MeCabを用いた形態素解析を古典中国語に適用した上で、UDPipeを用いた依存文法解析を適用するものである。これにより、単語の品詞や、単語と単語の係り受け関係を、自動で解析できるようになった。

本共同研究では、古典中国語に対する形態素解析と依存文法解析をさらに押し進め、単語より大きな単位、すなわち句や文について、それらの振る舞いや関係性を解析すべく、さらなる古典中国語解析手法を研究・開発する。”

Since 2010, we have developed Classical Chinese Corpora. We first constructed the Corpora using MeCab-Kanbun, a morphological analyzer for Classical Chinese texts. Then we applied UD-Kanbun, a dependency parser based on Universal Dependencies, into the Corpora. Using the Corpora, now we can analyze Classical Chinese texts in word-level: word segmentation (tokenization), Part-Of-Speech tagging, and dependency parsing.

In this study, we will investigate to analyze Classical Chinese texts in phrase- and sentence-levels, enhancing the Classical Chinese Corpora.

## 5. 本年度の研究実施状況

『禮記』の Universal Dependencies コーパスを完成し、つづいて『十八史略』の Universal Dependencies コーパスに着手した。これらのコーパスと、過去に製作した『孟子』『論語』コーパスを合わせ、カレル大学との国際協力により、Universal Dependencies 2.6 (2020

年5月15日リリース)および Universal Dependencies 2.7 (2020年11月15日リリース)として、WWW で公開した。

これらの古典中国語コーパスをもとに、古典中国語形態素解析エンジン「MeCab-Kanbun」および古典中国語係り受け解析エンジン「UD-Kanbun」の解析精度を上げ、PyPI から python3 モジュールとして公開した。また、スタンフォード大学との国際協力により、多言語係り受け解析エンジン「Stanza」に、古典中国語モジュールを実装した。さらに、カレル大学との国際協力により、多言語係り受け解析 API 「UDPipe 2」にも、古典中国語モジュールを実装中である。

## 6. 本年度の研究実施内容

2020-04-10 MeCab-Kanbun と UD-Kanbun

2020-04-24 研究班活動方針

2020-05-08 UD-Chinese の試作

2020-05-22 Universal Dependencies 2.6 リリース

2020-06-05 『禮記』 Universal Dependencies 化完了

2020-06-19 Universal Dependencies Workshop

2020-07-03 『An Advanced Introduction to Semantics: A Meaning-Text Approach』

2020-07-17 Enhanced Universal Dependencies

2020-09-18 『形態素解析部の付け替えによる近代日本語(旧字旧仮名)の係り受け解析』

2020-10-02 CoNLL-U SVG Editor RtoL

2020-10-16 変体漢文の XPOS を UniDic 品詞にする

2020-11-06 『Is POS Tagging Necessary or Even Helpful for Neural Dependency Parsing?』

2020-11-20 Universal Dependencies 2.7 リリース

2020-12-04 『Universal Dependencies v2: An Evergrowing Multilingual Treebank Collection』

2020-12-18 じんもんこん:-)2020 報告

2021-01-15 COMBO-pytorch と UniDic-COMBO

2021-03-05 東洋学へのコンピュータ利用

## 7. 共同研究会に関連した公表実績

Universal Dependencies 2.6 [<http://hdl.handle.net/11234/1-3226>]

Universal Dependencies 2.7 [<http://hdl.handle.net/11234/1-3424>]

## 8. 研究班員

所内

池田巧、ウィッテルン・クリスティアン、守岡知彦、白須裕之

学外

山崎直樹(関西大学外国語学部)、二階堂善弘(関西大学文学部)、師茂樹(花園大学文学部)、鈴木慎吾(大阪大学言語文化研究科)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	外国人	若手研究者	若手研究者	大学院生	総計	外国人	若手研究者	若手研究者	大学院生
				(40歳未満)	(35歳以下)				(40歳未満)	(35歳以下)	
学内(法人内)	1	6	1				60	16			
国立大学	1	1					1				
公立大学											
私立大学	2	3					28				
大学共同利用機関法人											
独立行政法人等公的研究機関											
民間機関											
外国機関											
その他											
計	4	10	1	0	0	0	89	16	0	0	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	4(4)			
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)				
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)				
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)				
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)				

11. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

なし

12. 次年度の研究実施計画

『十八史略』の Universal Dependencies コーパスを完成したい。また、これに合わせ、カレル大学との国際協力により、Universal Dependencies 2.8 (予定)として、何とか WWW 公開したい。ただ、これらのコーパスにより、古典中国語の文法解析の精度が上がるかどうかは、正直なところ五里霧中であり、必要ならば新たな手法の開発と並行して、句や文の範囲を超える文法解析に挑戦したい。

13. 次年度の経費

なし

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

カレル大学との国際協力による Universal Dependencies の公開は、今後も継続しておこなう予定である。また、解析エンジンなどは、python3 モジュールであれば PyPI から、それ以外は GitHub から、それぞれ公開する予定である。



# 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の1年目)

## 1. 研究課題

北朝石窟寺院の研究Ⅱ

Studies on the Buddhist Cave-temples in the Northern Dynasties Ⅱ

## 2. 研究代表者氏名

岡村 秀典

Hidenori OKAMURA

## 3. 研究期間

2020年4月-2023年3月(1年目)

## 4. 研究目的

中国山西省にある雲岡石窟は、5世紀の北魏時代に開鑿の始まった仏教寺院である。1938年から1944年までの7年間、人文研の水野清一と長廣敏雄らは、その大小すべての石窟を対象に測量・写真撮影・拓本を作成し、戦後にその報告書『雲岡石窟』全16巻32冊を公刊した。そのPDFを京都大学リポジトリに公開した結果、各界から大きな反響が寄せられ、なかでも中国から中国語版の出版について打診があり、人文研と中国社会科学院考古研究所との共同編集により旧版の中文訳に加えて旧版未収録の写真・拓本類を増補した『雲岡石窟』全20巻を出版しつつある。これをふまえて本研究班では、龍門石窟や響堂山石窟など北朝石窟にかんする人文研所蔵写真・拓本類の整理と公開を継続して進める。

The Yungang Caves, located near the city of Datong in Shanxi province in China, are a group of Buddhist cave-temples excavated in the latter half of the fifth century by the Northern Wei dynasty. Between 1938 and 1944, following on from investigations of the Xiangtangshan Caves in Hebei province and the Longmen Caves in Henan province, the Research Institute of Oriental Culture, the predecessor of the Institute for Research in Humanities, Kyoto University, carried out investigations of the Yungang Caves and neighboring sites. A report of these investigations was published in the form of the voluminous Yunkang (1951-1956) in 16 volumes and 32 fascicules by Mizuno Seiichi and Nagahiro Toshio. This research seminar set about researching on the visual materials and field notes collected from such investigations with the goal of systematically digitizing and

actively promoting the further use of these research resources, and making them available to the public.

#### 5. 本年度の研究実施状況

前の研究班に引きつづき中国山西省大同市に所在する雲岡石窟の原報告（水野清一・長廣敏雄『雲岡石窟』全十六卷三二冊、一九五一～一九五六年）の図版解説を会読しながら、関連写真の整理を進めた。今年度は京都大学人文科学研究所・中国社会科学院考古研究所編『雲岡石窟』第二〇卷（科学出版社東京、二〇一七年）の研究成果をもとに、原報告の第十五卷西方諸洞について検討した。共同研究に関連した公表実績としては、岡村秀典著・徐小淑訳『雲岡石窟的考古学研究』（四川人民出版社、二〇二一年、原著『雲岡石窟の考古学 遊牧国家の巨石仏をさぐる』京大人文研東方学叢書3、臨川書店、二〇一七年）および石松日奈子著・王雲訳「雲岡石窟の皇帝大仏—從鮮卑王到中国皇帝」（『故宮博物院院刊』二〇二一年第一期、原著「雲岡石窟の皇帝大仏—鮮卑王から中華皇帝」『國華』一四五一号、二〇一六年）がある。

新型コロナウイルス感染症の拡大により、研究会はZOOMにより共同研究室でのオンラインとオンラインのハイブリッド形式で実施した。オンラインでは参加のむずかしい中国や東京など遠隔地の研究者がオンラインで参加できたのは意義深いことであった。

#### 6. 本年度の研究実施内容

2020-10-06 雲岡石窟西端諸洞 発表者 岡村秀典  
2020-10-20 雲岡石窟西端諸洞 発表者 岡村秀典  
2020-11-17 雲岡石窟西端諸洞 発表者 岡村秀典  
2020-12-01 雲岡石窟西端諸洞 発表者 岡村秀典  
2021-01-19 雲岡石窟西端諸洞 発表者 岡村秀典

#### 7. 共同研究会に関連した公表実績

岡村秀典著・徐小淑訳『雲岡石窟的考古学研究』（四川人民出版社、二〇二一年）石松日奈子著・王雲訳「雲岡石窟の皇帝大仏—從鮮卑王到中国皇帝」（『故宮博物院院刊』二〇二一年第一期）

#### 8. 研究班員

所内

岡村秀典、安岡孝一、稲本泰生、向井佑介、檜山智美、倉本尚徳、常鈺熙

学内

内記理(文化財総合研究センター)、折山桂子(文学研究科)、

学外

高橋早紀子(愛知学院大学)、外山潔(泉屋博古館)、齋藤龍一(大阪市立美術館)、山名伸生(京都精華大学)、大西磨希子(佛教大学)、石松日奈子(清泉女子大学)、濱田瑞美(横浜美術大学)、佐藤智水(龍谷大学)、田林 啓(白鶴美術館)、上枝いづみ(金沢大学)、高志 緑(大阪大学)、王珏人(大阪大学)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
学内(法人内)	1	8	1	2	0	0	33	3	5	0	0
		(2)	(1)	(1)	(0)	(0)	(8)	(3)	(5)	(0)	(0)
国立大学	2	3	1	2	1	1	15	5	10	5	5
		(3)	(1)	(2)	(1)	(1)	(15)	(5)	(10)	(5)	(5)
公立大学	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
私立大学	8	8	0	0	0	0	24	0	0	0	0
		(4)	(0)	(0)	(0)	(0)	(23)	(0)	(0)	(0)	(0)
大学共同利用機関法人	0										
独立行政法人等公的研究機関	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
民間機関	2	2	0	0	0	0	10	0	0	0	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
外国機関	4	4	2	2	2	1	5	5	5	5	5
		(2)	(2)	(2)	(2)	(1)	(5)	(5)	(5)	(5)	(5)
その他	0	0					0				
計	17	25	4	6	3	2	87	13	20	10	10
		(11)	(4)	(5)	(3)	(2)	(51)	(13)	(20)	(10)	(10)

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

なし

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

雑誌名	掲載 論文数	掲載 年月日	論文名	発表者名
故宮博物院院刊	1	2021. 1	雲岡石窟的皇帝大佛	石松日奈子

共同利用・共同研究による成果として発行した研究書

研究書の名称	編著者名	発行年月	出版社名
中国文明 農業与礼制的 考古学 (中国語版)	岡村秀典	2020. 9	上海古籍出版社

雲岡石窟的考古学研究 (中国語版)	岡村秀典	2021. 1	四川人民出版社
----------------------	------	---------	---------

11. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由  
なし

12. 次年度の研究実施計画

引きつづき中国山西省大同市に所在する雲岡石窟の原報告（水野清一・長廣敏雄『雲岡石窟』全十六卷三二冊、一九五一～一九五六年）第十五卷「西端諸洞」の図版解説、および京都大学人文科学研究所・中国社会科学院考古研究所編『雲岡石窟』第二〇卷（科学出版社東京、二〇一七年）の研究成果をもとに、洛陽遷都後の雲岡石窟について検討する。また、前期には米国フロリダ国際大学の Lidu YI 氏を招聘し、北朝石窟寺院について六回の連続セミナーを計画している。

新型コロナウイルス感染症の影響が読めない中、研究会は ZOOM により共同研究室でのオンラインとオンラインのハイブリッド形式で実施する予定である。東京など国内の遠隔地や海外の研究者も参加できるため、共同研究のネットワークを広げる試みにも取り組んでみたい。

13. 次年度の経費  
なし

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

水野清一・長廣敏雄『龍門石窟の研究』（座右宝刊行会、1941 年）の中国語版を中国鄭州の大象出版社から出版する準備を進め、本学との間で出版契約を締結したほか、岡村秀典『雲岡石窟の考古学』（臨川書店、2017 年）の中国語版について四川人民出版社との間で出版契約を締結し、2020 年の刊行をめざしている。東京大学東洋文化研究所と協力して 100 年前の中国石窟写真を集大成した『中国文化遺産』石窟卷（中国語版全 5 卷）の執筆・翻訳と編集を進め、2020 年に清華大学出版社から刊行する予定である。

# 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の1年目)

## 1. 研究課題

芸術と社会

Art and Society: The Various Aspects of Creative Activities in the Modern Age

## 2. 研究代表者氏名

高階 絵里加

Takashina Erika

## 3. 研究期間

2020年4月-2023年3月(1年目)

## 4. 研究目的

芸術を歴史・文化・社会との関連から多角的に考察し、広い意味での近代における芸術と社会の多様な結びつきの一端を明らかにすることをめざす。諸分野の研究者の交流を通じて、社会の中での芸術の諸相を考える。

In recent years, there has been a growing amount of research to examine art from a more multifaceted perspective by looking into its connection with history, culture, and the society. For example, while conducting research on artists and artworks is fundamental to the field of art, a variety of other approaches to the subject are also being examined, such as, various art movements, urban and lifestyle culture, the shifts in the art market, changing patrons, cultural support, development of journalism and critiques, advertisement and art, diversification of exhibition spaces, widening activities at museums and art galleries, as well as research on recipients of art. This joint research project will contribute towards this effort by inviting researchers from other fields catering to art, such as that of history, literature, film, and design to participate in workshops which attempt to clarify, in a broad sense, the various segments of connections that artworks and artists have with our society in the modern age. Essentially, we would like to explore the various aspects of art in the society by examining specific works and materials, or perhaps the artists and events. Depending on the situation, these meetings will be conducted at an art gallery or museum and make the area where displays and exhibits are held as the place of study.

## 5. 本年度の研究実施状況

三年計画の第一年目である本年は、当初4月の開始を予定していたがコロナ禍のため開始が延期され、9月よりオンラインによる開催を実施することとなった。今年度はすべての研究会をオンラインによる開催した。第一回研究会は9月26日(土)に開催、岡田暁生氏「パウル・ベッカーと音楽社会学のはじまり」および藤井俊之氏「芸術と社会、自律と媒介——アドルノの音楽論に注目して」の2名の発表者による音楽と社会に関連する発表が行われた。第二回研究会は10月17日(土)に開催、近代日本における絵葉書をテーマとして、大原由佳子氏「絵葉書アルバム」から見る第1回渡欧時の黒田重太郎」および小嶋ひろみ氏「竹久夢二とエハガキ—月刊夢二カードと月刊夢二エハガキ—」の2名による発表が行われた。第三回研究会は11月21日(土)に開催、京都文化博物館で開催中の「舞妓モダン展」に関連し、植田彩芳子氏による発表「日本近代における描かれた舞妓について」が行われた。第四回研究会は宮下規久朗氏により、ヨーロッパと日本の歴史的疫病流行と美術の関連についての発表「疫病と美術」が行われた。第五回研究会は2021年3月6日(土)に、三宅拓也氏による発表「芸術と社会の接点としての商品陳列所」が行われた。いずれの研究会においても、発表後に芸術と社会に関わる活発な議論が交わされた。

## 6. 本年度の研究実施内容

2020-09-26 第1回 パウル・ベッカーと音楽社会学の始まり 発表者 岡田暁生 人文科学研究so 芸術と社会、自律と媒介——アドルノの音楽論に注目して 発表者 藤井俊之 人文科学研究so

2020-10-17 第2回 「絵葉書アルバム」から見る第1回目渡欧時の黒田重太郎 発表者 大原由佳子 滋賀県立近代美術館 竹久夢二とエハガキ—月刊夢二カードと月刊夢二エハガキ— 発表者 小嶋ひろみ (公益財団法人) 両備文化振興財団 夢二郷土美術館

2020-11-21 第3回 日本近代における描かれた舞妓について 発表者 植田彩芳子 京都文化博物館

2020-12-05 第4回 疫病と美術 発表者 宮下規久朗 神戸大学

2020-03-06 第5回 芸術と社会の接点としての商品陳列所 発表者 三宅拓也 京都工芸繊維大学

## 7. 共同研究会に関連した公表実績

なし

## 8. 研究班員

所内

高階絵里加、池田さなえ、岡田暁生、小関隆、高木博志、立木康介、福家崇洋、藤原辰史、森本淳生、藤井俊之

学内

花田史彦(教育学研究科)

学外

有賀茜(京都府京都文化博物館)、植田憲司(京都府京都文化博物館)、植田彩芳子(京都府京都文化博物館)、大久保恭子(京都橘大学 発達教育学部)、大原由佳子(滋賀県立近代美術館)、小川佐和子(北海道大学大学院文学研究院)、國賀由美子(大谷大学文学部)、久保豊(富山大学)、郷司泰仁(香雪美術館)、小嶋ひろみ(公益財団法人 両備文化振興財団 夢二郷土美術館)、実方葉子(泉屋博古館)、柴田就平(笠岡市竹喬美術館)、清水智世(京都府京都文化博物館)、鈴木千栄子(毎日放送)、孝岡睦子(大原美術館)、高階秀爾(大原美術館)、竹内幸絵(同志社大学)、竹嶋康平(泉屋博古館)、多田羅多起子(広島大学 大学院人間社会科学研究科/教育学部 造形芸術系コース)、永井隆則(京都工芸繊維大学 デザイン・建築学系)、中野慎之(文化庁文化財第一課 文部科学)、林洋子(文化庁)、藤本真名美(和歌山県立近代美術館)、古田理子(①景聴園(現代作家グループ) ②株式会社高島屋 京都店 販売第1部 化粧品売場)、イリナ・ホルカ(東京大学大学院総合文化研究科国際日本教育研究機構)、松原史(北野天満宮北野文化研究所)、三宅拓也(京都工芸繊維大学デザイン・建築学系)、宮下規久朗(神戸大学大学院人文学研究科)、森光彦(京都市学校歴史博物館)、山口真有香(滋賀県立近代美術館)、山田真規子(目黒区美術館)、VOLK, Alicia (アリサ・ヴォルク)(University of Maryland (メリーランド大学))、河本真理(日本女子大学)、久保昭博(関西学院大学)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
			(0)	(0)	(0)	(0)		(0)	(0)	(0)	(0)
学内(法人内)		11	0	2	2	1	26	0	10	10	5
		(2)	(0)	(1)	(1)	(0)	(10)	(0)	(5)	(5)	(0)
国立大学		7	1	2	2	0	23	3	6	6	0
		(3)	(1)	(1)	(1)	(0)	(8)	(3)	(4)	(4)	(0)
公立大学		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
私立大学		5	0	0	0	0	15	0	0	0	0
		(4)	(0)	(0)	(0)	(0)	(12)	(0)	(0)	(0)	(0)
大学共同利用機関法人		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
独立行政法人等公的研究機関		11	0	5	4	0	19	0	7	7	0
		(8)	(0)	(4)	(3)	(0)	(17)	(0)	(7)	(6)	(0)
民間機関		11	0	5	2	0	30	0	11	8	0
		(7)	(0)	(3)	(2)	(0)	(23)	(0)	(9)	(8)	(0)
外国機関		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
その他		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
計	0	45	1	14	10	1	113	3	34	31	5
		(24)	(1)	(9)	(7)	(0)	(70)	(3)	(25)	(23)	(0)

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	2		0	
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)	0		0	
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	52		3	
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)	0		0	
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0		0	

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

雑誌名	掲載論文数	掲載年月日	論文名	発表者名
『史林』	1	R3. 1	史料紹介 川島織物セルコン・川島織物文化館所蔵「二代・川島甚兵衛関係文書」品川弥二郎書翰	池田さなえ
大高保二郎、永井隆則（編）『ピカソと人類の美術』三元社	1	R2. 4	ピカソ／剽窃／コラージュー〈造形的インターテクスチュアリティ〉の論理	河本真理
『西洋美術研究』	1	R2. 9	美術史学／フェミニズム／ポストコロニアリズムのインターフェース	河本真理
石田勇治ほか（編）『ドイツ文化事典』丸善出版	1	R2. 11	闘争の芸術——第一次大戦に参加した美術家たち	河本真理



木俣元一・松井裕美（編）『古典主義再考 II 前衛美術と「古典』』中央公論美術出版	1	R2. 12	前衛／古典主義／プリミティヴィスム——両大戦間期の美術の問題系をめぐって	河本真理
『須田記念 視覚の現場』	1	R3. 2	スペインインフルエンザ／大戦(グレート・ウォー)／美術——〈忘れられた〉パンデミック再考	河本真理
『近代』(神戸大学近代発行会)	1	R3. 2	ハンナ・ヘーヒ——美術史の〈語り〉とコラージュ／モンタージュをめぐって	河本真理
岩城卓二、石井美保、田中祐理子、藤原辰史編著『環世界の人文文学』人文書院	1	R3. 3	震災後文学の動物と書き直し—中森明夫、川上弘美、古川日出男のテキストを中心に—	ホルカ イリナ
Irina Holca, Carmen Sapunaru Tamas, <i>Forms of the Body in Contemporary Japanese Society, Literature, and Culture</i>	1	R2. 5	Home Is Where Mother Is, and the Way to a Man's Heart Goes through His Stomach: Bodies in the Kitchen (Yoshimoto Banana)	ホルカ イリナ
『美術フォーラム 21』	1	R2. 12	セザンヌ・コレクションの社会学	永井隆則
『鹿島美術研究年報』	1	R2. 11	セザンヌ芸術の展開にジャズ・ド・ブッフアンのセザンヌ家旧邸を中心とするエクス・アン・プロヴァンスの環境がもたらした創造的作用に関する研究	永井隆則

Les actes du colloque international :Peut-on parler d'une amitié créative entre Cezanne et Zola ? ( <a href="https://www.societe-cezanne.fr/2020/05/06/zola-accuse-par-sa-plume-cezanne-par-son-pinceau/">https://www.societe-cezanne.fr/2020/05/06/zola-accuse-par-sa-plume-cezanne-par-son-pinceau/</a> )	1	R2.5	Zola accuse par sa plume, Cezanne par son pinceau	Takanori NAGAI
『國華』	1	R2.9	岡本神草筆 口紅	植田彩芳子
『鹿島美術研究年報（別冊）』	1	R2.11	太田喜二郎の研究—雑誌『徳雲』をめぐる京阪神文化人ネットワーク—	植田彩芳子
『日本美術のつくり方 佐藤康宏先生の退職によせて』羽鳥書店	1	R2.11	描かれた舞妓—竹内栖鳳筆《アレタ立に》の史的位置	植田彩芳子
『京都メディア史研究年報』	1	R2.4	稗史を構想する—原武史『「松本清張」で読む昭和史』	花田史彦
『社会教育学研究』	1	R2.5	勤労者を対象としたメディア社会教育の「受け手」研究	花田史彦
駒込武（編）『生活綴方で編む「戦後史」—〈冷戦〉と〈越境〉の1950年代』岩波書店	1	R2.8	「大衆」と「民族」のあいだ—映画《山びこ学校》をめぐる市場	花田史彦
谷川建司（編）『映画産業史の転換点—経営・継承・メディア戦略』森話社	1	R2.7	グラビアと啓蒙—戦後初期の『近代映画』が伝えたもの	花田史彦

『民衆史研究』	1	R3.2	映画史と民衆史のあいだー藤木秀朗著『映画観客とは何者かーメディアと社会主体の近現代史』	花田史彦
近藤和都・森田のり子・大塚英志 (編)『牧野守 在野の映画学ー戦時下・戦後映画人との対話』太田出版	1	R3.1	映像論から戦後知へー江藤文夫の1980年代	花田史彦
木島俊介編『モネとマティスーもうひとつの楽園』求龍堂	1	R2.5	マティスの楽園表象と切り紙絵	大久保恭子
『日仏美術学会会報』	1	R2.9	第二次世界大戦期の『フランス性』をめぐる芸術的地政学	大久保恭子
『京都市京セラ美術館開館記念展 京都の美術 250年の夢』京都市京セラ美術館	1	R2.4	近代京都日本画を育んだ場所ー明治前中期における画家組織ー	森光彦
『幸野楳嶺展図録』海の見える杜美術館	1	R2.10	幸野楳嶺の人物表現について	森光彦
川口幸也編『ミュージアムの湯鬱ー揺れる展示とコレクション』水声社	1	R2.6	追悼絵馬とその展示	宮下 規久朗
東京造形大学ダ・ヴィンチ・プロジェクト編『よみがえるレオナルド・ダ・ヴィンチ 作品復元プロジェクト』東京美術	1	R2.9	レオナルドとカラヴァッジョ	宮下 規久朗

久保豊・『渋谷実 巨匠にして異端』・ 水声社	1	R2.10	「渋ジイ」が描く女性の古い ——『もず』の淡島千景を代 表例に	久保豊
『キネマ旬報』	1	R2.10	渡哲也と石原裕次郎 秘められ た優しさ、憂愁	久保豊
『キネマ旬報』	1	R2.8	日本映画における男性同性愛 表象の過去・現在・未来	久保豊
久保豊・『映画産業 史の転換点——経 営・継承・メデ ィア戦略』・森話社	1	R2.7	興行戦略としての「青春余命 映画」:『愛と死をみつめて』 と吉永小百合	久保豊
『ユリイカ』	1	R2.4	ドロシーの友だち同士の往復 書簡	久保豊
谷川建司編『映画 産業史の転換点— 経営・継承・メデ ィア戦略』森話社	1	R2.7	映画『地獄門』と和田三造	高階絵里加
『京都市京セラ美 術館開館記念展京 都の美術 250 年の 夢 第1部 江戸か ら明治へ:近代への 飛躍』	1	R2.5	作品解説 (分担執筆)	中野慎之
『京都市京セラ美 術館開館記念展京 都の美術 250 年の 夢 2部 明治から 昭和へ:京都画壇の 隆盛』	1	R2.10	作品解説 (分担執筆)	中野慎之
『京都の美術 250 年の夢 第1部 江戸から明治へ: 近代への飛躍』	6	R2.4	塩川文麟 作家解説、作品解説 森寛斎 作家解説、作品解説 山元春挙 作家解説、作品解説 伊藤小坡 作家解説、作品解説 山元春挙「ロッキーの雪」 竹内栖鳳「ベニスの月」 都路華香「吉野の桜」作品解説	大原由佳子

『近江の画人 海北友松から小倉遊亀まで』	3	R2.6	横井金谷「張 月樵」「玉 湍」	大原由佳子
『京都の美術 250年の夢 第2部 明治から昭和へ：京都画壇の隆盛』	1	R2.10	川村曼舟 作家解説、作品解説	大原由佳子
『滋賀県立近代美術館研究紀要』	1	R3.3	黒田重太郎 絵葉書アルバム 翻刻（2）	大原由佳子
『鹿島美術研究』	1	R2.11	京都画壇の19世紀—幸野楳嶺 私塾資料を中心に—	多田羅多起子
『近代京都画壇の開拓者 幸野楳嶺』展図録（海に見える杜美術館）	1	R2.10	受け継がれた私塾資料 楳嶺から栖鳳へ	多田羅多起子
<i>Slavic and East European Journal</i>	1	R2 spring	Recent Trends and Advancements in Slavic Studies in Japan: Film Studies,	Sawako Ogawa
谷川建司（編）『映画産業史の転換点—経営・継承・メディア戦略』森話社	1	R2.7	絵師と映画監督：時代考証にみる甲斐庄楠音と溝口健二の通底性	小川佐和子
『北海道大学文学研究院紀要』	1	R2.12	戦間期ベルリン・オペレッタの重層性：メロドラマ化と自己パロディ	小川佐和子
『蘇った世界の映画』	1	R2.12	ロシア	小川佐和子
『演劇研究』	1	R3.3	ハプスブルク帝国末期のユートピア：ウィーン・オペレッタにおける多民族・多文化表象	小川佐和子
『人文学報』	1	R3.3	二重の神話化：日本における『戦艦ポチョムキン』上映史	小川佐和子

『映画学』	1	R3.3	義理の葛藤：翻案における新派映画の「メロドラマ的想像力」	小川佐和子
Revue A	1	R2. octobr e- décemb re	Le «style de tableau bouddhiste» chez Gentaro Komaki	Shimizu Tomoyo
弘中智子・清水智世編『さまよえる絵筆—東京・京都戦時下の前衛画家たち』みすず書房	1	R3.2	塗られない画布—転換期・京都の再断面	清水智世
伏見稲荷大社『朱』	1	R3.3	小牧源太郎と稲荷と狐—前衛画家の描く稲荷信仰	清水智世
『刺繍の近代—輸出刺繍の日欧交流史—』思文閣出版	1	R3.3		松原史
『香雪美術館 研究紀要』	1	R3.3	二つの聖徳太子像 —香雪本と弘川寺本—	郷司泰仁
Breen, Maruyama, Takagi, eds., <i>Kyoto's Renaissance Ancient Capital for Modern Japan</i> , Renaissance books, London	1	R2	Nihonga in Kyoto at the dawn of the modern era	Kuniga Yumiko
石丸正運編『近江の画人』サンライズ出版	1	R2.5	「商いと文化の伝播」「円山四条派と岸派の隆盛」ほか	國賀由美子
『史学雑誌』129編5号	1	R2.7	2019年の歴史学界—回顧と展望— 日本・中世・美術	國賀由美子
大谷大学日本史の会『歴史の広場』23号	1	R2.12	研究の原点—コロナ災禍に思う—	國賀由美子
『湖国と文化』174	1	R3.1	問われる県の知性	國賀由美子

号				
『大谷大学図書館・博物館報 書香』38号	1	R3.3	《破来頓等絵巻》のこと	國賀由美子
『大谷学報』第100巻第2号	1	R3.3	破来頓等絵巻考—大谷大学博物館本の紹介をかねて—	國賀由美子
『近江八幡の歴史』第9巻 地域文化財・年表・便覧	1	R3.3	「『桑実寺縁起絵巻』の成立」「『長命寺参詣曼荼羅』と『熊野観心十界図]」「塩川文麟の来幡」「近世の画人たちと近江八幡」	國賀由美子
三木順子、平芳幸浩、井戸美里編 『芸術の価値創造 京都の近代からひらける世界』昭和堂	1	R3.3	京狩野研究と土居次義の眼	多田羅多起子
『人文学報』	1	R3.3	青年の理想主義について—映画『若者たち』とポスト高度成長期のサークル文化運動	花田史彦
『美学の事典』	1	R2.12	フランス近代美術を中心とする、西洋近代美術の日本での受容	永井隆則他 (共著)
『近代京都日本画史』	1	R2.8	近代京都日本画略史・各論・作品解説	植田彩芳子・中野慎之・藤本真名美・森光彦
『舞妓モダン』	1	R2.10	日本近代における描かれた舞妓・作品解説	植田彩芳子 (編著)
『開校140周年 京都府画学校への道』	1	R2.4	概論及び作品解説	森光彦(編著)
『Inside/Out——映像文化とLGBTQ+』	1	R2.9	あの虹に届くまで、リンゴの木を植えつつける	久保豊(編著)

11. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

なし

12. 次年度の研究実施計画

本年度はコロナ禍のため実質秋からの始動となり研究会開催回数が少なくなりましたが、次年度は引き続きオンラインシステムも活用しつつ年間 10 回程度の開催を予定している。内容としては、複製芸術と社会に関する発表、芸術と第一次産業に関する発表、京都の歴史画に関する発表、戦争と前衛芸術に関する発表、広告・デザインと社会に関する発表、明治の刺繍芸術に関する発表、オペレッタと近代社会に関する発表その他を行う予定である。

13. 次年度の経費

なし

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

コロナ禍により研究会の開始が遅れたこともあり、次年度はいまのところ研究成果公表の予定はない。今後の展望としては、次年度も引き続き、歴史、思想、建築、文学、音楽、美術と多岐にわたる研究領域を専門とする班員が「芸術と社会」という共通テーマにもとづく発表と活発な議論により視野を広げ、それぞれの研究テーマに本質的な変革をもたらす場となる研究会の開催をめざす。次年度にかけては、いかに新たな問題意識を多彩に広げ得るかという点に研究会の主眼を置き、それをどのようにまとめて成果としてゆくかについては三年目に入ってから具体的に案を練ってゆく予定である。



# 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(4年計画の1年目)

## 1. 研究課題

中国在家の仏教観：唐道宣撰『広弘明集』を読む

Chinese Laity's View of Buddhism: Reading the Expanded Collection of the Propagation of Light compiled by Daoxuan in the Tang

## 2. 研究代表者氏名

船山徹

Funayama Toru

## 3. 研究期間

2020年4月-2024年3月(1年目)

## 4. 研究目的

本研究班は、共同研究班「中国在家の教理と経典」の方法と成果に基づき、唐の道宣撰『広弘明集』に収める中国在家の著作から彼らの仏教観を検討する。四～七世紀頃の中国で仏教は様々な発展を遂げた。出家僧だけでなく文人等の在家信者が果たした役割も大きかった。出家者が学んだ経典や論書は現在の大蔵経の全貌を理解することから知られるが、一方、在家者の仏教知識がどの程度のものであったか、それは出家社の理解と相違する点があったのか、在家者に共通の得手不得手があったか等の問いに答えることは予想以上に難しく、現在に至るまで確かな答えは得られていない。人文研ではかつて六朝隋唐時代の知識人や庶民の仏教を知るため、『肇論』『弘明集』等の会読が行われた。本研究班はその流れを継承しながら、多くの在家仏教徒の著作を収める道宣撰『広弘明集』(7世紀)を主な素材として中国在家仏教の実態解明を目ざす。

Based on the methodology and results conducted by "Buddhist Sutras and Doctrines for the Chinese Laity" (2016-20), this projects attempt to shed a new light on the acutal situation of Buddhist Laity in medieval China. As Chinese Buddhism underwent various developments between the fourth and seventh centuries, not only monastics but also laypeople played a large role. Although we can learn about the sutras and treatises studied by monastics through the entire Buddhist canon that is extant today, with regard to lay Buddhists, various questions remain unexpectedly difficult to answer, such as: To what extent did laypeople possess knowledge of

Buddhism? On what points was that knowledge similar to and different from the knowledge held by monastics? Were there any shared likes and dislikes of particular Buddhist scriptures and ideas among laypeople? Previous seminars held in this institute studied texts such as the Zhao lun and Hongming ji in order to understand the Buddhism of intellectuals and ordinary people during the Six Dynasties, Sui, and Tang periods. The present research seminar aims to continue this line of inquiry, taking as its main source text the Expanded Collection of the Propagation of Light (Guang hongming ji, 7th c.) - in which the compiler Daoxuan gathered the writings of many lay Buddhists - in order to clarify the real conditions of lay Buddhism in China.

#### 5. 本年度の研究実施状況

昨年は、六朝隋唐時代の知識人や庶民の仏教を知るため、唐の道宣撰『広弘明集』巻 26 に収める以下の文献を会読し、(1)漢語原典の校訂本・(2)現代日本語訳・(3)重要原語の語注を作成した。――南斉の周顒「與何胤書」、梁の武帝「斷殺絶宗廟犠牲詔」、顔之推「誠殺家訓」、梁武帝「斷酒肉文」。このうち南斉の周顒の書は、仏教では生き物を殺さないことを実践するので肉食してはいけないことを説く。梁の武帝の「斷殺絶宗廟犠牲詔」と同じく武帝の「断酒肉文」は、飲酒と肉食が過ちであることを、在家者である皇帝が出家者に説く内容である。その内容から、当時の出家者は男女を問わず肉食していたという実態を描き、武帝はあるべき仏教を実現すべく、肉食と飲酒の過から逃れる打開策を主張する。顔之推の文も基本的に同じ趣旨である。いずれも5～6世紀の在家仏教徒であるが、彼らにとって菜食主義は宗教観と生命観に根ざすものであることが様々な角度から説明されており、在家仏教観の大きな一面を浮き彫りにする資料として意義がある。今年度は梁の武帝「断酒肉文」の残りの部分を読了する。この文献は、内容も意義深い語彙の点からも6世紀前半の生きた語彙が見られ、仏教に関する制度史の資料ともなる。今年度の研究班回数は14回。

#### 6. 本年度の研究実施内容

- 2020-05-29 会読：周顒「與何胤書」 発表者 船山徹
- 2020-06-19 会読：梁武帝「斷殺絶宗廟犠牲詔」 発表者 河上麻由子
- 2020-07-03 会読：顔之推「誠殺家訓」 発表者 中村慎之介
- 2020-09-18 会読：梁武帝「斷酒肉文」(1) 発表者 古勝隆一
- 2020-10-02 会読：梁武帝「斷酒肉文」(2) 発表者 魏 藝
- 2020-10-16 会読：梁武帝「斷酒肉文」(3) 発表者 趙ウニル
- 2020-10-30 会読：梁武帝「斷酒肉文」(4) 発表者 中西俊英
- 2020-11-20 会読：梁武帝「斷酒肉文」(5) 発表者 船山徹
- 2020-12-04 会読：梁武帝「斷酒肉文」(6) 発表者 久永昂央

- 2021-01-15 会読：梁武帝「斷酒肉文」(7) 発表者 倉本尚徳  
 2020-01-29 会読：梁武帝「斷酒肉文」(8) 発表者 船山徹  
 2020-02-19 会読：梁武帝「斷酒肉文」(9) 発表者 ウィッテルン Ch.  
 2020-03-05 会読：梁武帝「斷酒肉文」(10) 発表者 河上麻由子

7. 共同研究会に関連した公表実績

なし

8. 研究班員

所内

船山 徹、稲本 泰生、稲葉 穰、ウィッテルン、クリスティアン、古勝 隆一、中西 竜也、石垣 明貴杞、李 瑄

学内

趙ウニル(大学院文学研究科(非常勤講師))、中村 慎之介(文学研究科(院生))、上島 享(文学研究科)

学外

桐原 孝見(龍谷大学)、中西久味(新潟大学)、松岡寛子(仏教伝道教会)、村田みお(近畿大学)、中西 俊英(東大寺)、河上 麻由子(奈良女子大学)、山田 周(京都府立大学)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数				延べ人数					
		総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
学内(法人内)	1	7	1			1	91	13			13
国立大学	1	1		1			13		13		
公立大学											
私立大学	1	2	1	1		1	26		13		13
大学共同利用機関法人											
独立行政法人等公的研究機関	1	1	1				13	13			
民間機関	1	2					26				
外国機関											
その他	1	1					13	13			
計	6	14	3	2	0	2	182	39	26	0	26
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数  
なし

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

雑誌名	掲載論文数	掲載年月日	論文名	発表者名
東方學報	1	R2. 12	『出要律儀』佚文に見る梁代佛教の音寫語	船山徹

11. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由  
なし

12. 次年度の研究実施計画

本年度と同じ手法によって、来年度も『広弘明集』に収める在家者が執筆した仏教書を取り上げ、漢語原典の校訂・現代日本語訳・語注を作成する会読を毎回行う。ただし次に『広弘明集』のどの箇所を取り上げるかは、本年度の会読が終了する3月に班員が集まって討論して決める予定である。とりあえず読むのが決まっている箇所は、『広弘明集』巻26の梁の武帝「断酒肉文」の最終部分（本年度に読み切れずに残る部分）である。

13. 次年度の経費  
なし

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

研究成果については、一度にすべてを公表するのではなく、会読したものの中から公開し易いものとして、まずは梁の武帝「断酒肉文」の原文校訂・現代語訳・語注を『東方學報』京都に掲載するつもりでいる。その後も、年次毎に『東方學報』に研究成果を公表する。さらに四年計画の二年目に当たる年として、一度、2021年度には前半2年に会読した箇所の内容を整理し、他の文献との内容的連携を解明する研究会をもちたいと考えている。

	班	班 長	副班長	研 究 課 題	期 間
1	課題公募班（一般A班）	長野 仁	平岡隆二 高井たかね	日本鍼灸医術の形成—近世医学史の再構築	2018.4～ 2021.3
2		諫早 直人	向井佑介	東アジア馬文化の研究	2020.4～ 2021.3
3		朴 沙羅	福家崇洋	西部講堂を中心とする戦後文化空間の研究	2020.4～ 2021.3
4		正清 健介	森本淳生	小津安二郎映画の欧米における批評的受容に関する研究	2020.4～ 2021.3
5		高橋 早紀子	稲本泰生	東アジアにおける阿弥陀如来の表象	2020.4～ 2021.3
6		小川 道大	村上衛	「長い19世紀」におけるインド・中国の社会経済史の比較—税制に注目して	2020.4～ 2021.3
7	班員公募班（B班）	池田 巧	-	チベット文明の継承と史的展開の諸相	2018.4～ 2021.3
8	基盤研究班（C班）	矢木 毅	-	東方文化学院京都研究所旧蔵漢籍の整理と研究	2016.4～2021.3
9		Wittern Christian	-	漢籍リポジトリの基礎的研究	2016.4～2021.3
10		宮宅 潔	-	秦代出土文字史料の研究	2016.4～2021.3



## 京都大学人文科学研究所共同研究最終報告書

### 1. 研究課題

日本鍼灸医術の形成—近世医学史の再構築

Formation of Japanese acupuncture-moxibustion : Reconstruction of the medical history in medieval and early modern Japan

### 2. 研究代表者氏名

長野 仁

Nagano Hitoshi

### 3. 研究期間

2018年4月-2021年3月(3年目)

### 4. 研究目的

現代鍼灸は、極端な欧化政策による鍼灸廃絶の危機を回避するために、医科学的アプローチによる臨床研究を最優先課題とし、医道の伝統を継承しつつも歴史的な側面は置き去りにしている。日本医学の通史を振り返る時にも、近代医学の系譜として先駆的業績を顕彰するに止まり、近世に大いに発展した鍼灸医術の種々の流儀や理論的構造に論及することはない。しかし、京都大学の富士川文庫をはじめとして、数多くの流儀書、理論書が伝存しており、日本医道における技術的伝統は手がつけられないままに埋没している。そこで、本研究では、鍼灸関連の古医書の総合的な考察を試み、鍼灸医術の形成、伝承形態の具体的様相を明らかにし、多角的なアプローチによって鍼灸医術の本質的特色を探る。そして、「日本鍼灸学」という新分野を開拓し、医薬、鍼灸の学界に遡及的考察を行う研究基盤を構築することによって、近世医学史の再構築を図る。

In order to avoid the crisis of the abolition of acupuncture and moxibustion due to Europeanization policy, the modern proponents and practitioners of the field have made clinical research from a medico-scientific perspective a top priority, while they have not made much of historical research in spite of inheriting from the tradition. When looking back on history, they have only praised the pioneering achievements related to modern medicine, and have seldom discussed diverse methods and theories that have been greatly developed in the early modern period. However, in such collection of medical books as the Fujikawa collection of Kyoto University, there remain many books on such methods and theories and these technical traditions are still buried untouched.

In this study, we aim to comprehensively evaluate these medical books, clarify the specific aspects of the formation and tradition of acupuncture and moxibustion medicine, and explore the essential features of the medicine from historical perspective. Through these, we will attempt to reconstruct the history of early modern medicine, as well as to develop a new field of “Japanese acupuncture and moxibustion studies” which would provide a foundation to reflect the research results in the fields of medicine, pharmacy, and acupuncture and moxibustion.

## 5. 研究成果の概要

研究開始当初は現存最古の鍼道伝授書である『針聞書』を考究対象に取り上げ、著者である茨木元行が唱えた今新流の伝播を追跡し、近世鍼術の流派がどのように分岐していったのかを系譜づけながら、その著作に図解されたハラノムシの病理観や治療法、診断術をめぐる諸問題を討議した。また、『五体身分抄』『五体身分集』という中世の抄物医書について、『医心方』から『福田方』に至る間の空白を埋める資料的価値を見出し、東京国立博物館資料館等の資料調査を行うとともに、研究会で討議した。そのほか、特別講師や班員の研究発表を通して、近世社会に大いに発達した針術、灸法について遡及的な考察を試み、その源流と発展の具体的様相を探ることができた。

本研究班での研究成果は、2020年1月12日に北里大学で開催された第7回鍼灸医学史研究発表会で『五体身分抄』『五体身分集』に関する研究発表（長野仁、富田貴洋の共同発表）を行ったほか、明智光秀の『針薬方』めぐっては、NHK京都放送局と連携した公開イベントを企画して、2020年2月8日に芝蘭会館山内ホールにて開催し、研究期間中に広く一般にも公開することができた。また、本研究による史料発掘と研究調査の成果として、後藤良山、香川南洋の門人録をはじめとする新出資料について、その影印版を解題、索引等を附し、近世医家資料集として三冊を本年度末に刊行する予定である。

## 6. 共同研究会に関連した主な公表実績

2018年5月12日、茨木元行顕彰会発足式（茨木市鍼灸師会と共催、於茨木神社）  
同13日、茨木元行『針聞書』編纂450周年・完全覆刻版刊行記念イベント（於茨木市立生涯学習センターきらめきホール、研究班発足に先立つ『針聞書』完全覆刻版刊行の記念イベント）  
同9月9日、茨木神社復旧支援チャリティー講演会（後援、於茨木神社参集殿）  
2020年2月8日 一般公開セミナー「明智光秀は名医!?だった一転換期の医術と戦国武将一」（於京都大学芝蘭会館山内ホール）



同9日 府民公開講座「鍼の聖地いばらき in OSAKA 早春ハラノムシまつり」(後援、於茨木市福祉文化会館オークシアター)

同3月1日 富山鍼灸学会学術講演会(富山鍼灸学会との共催、於富山県民会館701号室)

同3月『香川南洋門人録』(近世医家新出史料集第二冊)(担当:永塚憲治・松岡尚則)刊行

2021年3月

近世医家新出史料集Ⅰ 武田時昌監修・長野仁編集『改訂版 儒医姓名録—後藤良山門人録の影印・翻刻』(長野仁解説の加筆訂正)

近世医家新出史料集Ⅱ 武田時昌監修・永塚憲治編集『一本堂南洋先生 門人録 増補版』(人名索引の補正及び附録として新出資料『修庵香川先生易弁』の影印・翻刻および解題(武田時昌))

#### 7. 研究成果公表計画および今後の展開等

中医学、韓医学と比較しながらの検討を目的に、台湾、韓国からの特別講師を招いた講演会を今年度に予定であったが、感染症拡大の影響により延期となったため、来年度中に、可能であれば対面方式も取り入れた形態での開催を予定している。同様に計画通りの作業が困難となった松江歴史館・いづも財団・島根県立盲学校と協力しての芦田家文書の目録作成については、やはり予定を繰り下げて来年度以降も作業を継続する。また、班員によるこれまでの研究成果をまとめた論文集刊行のための編集作業を進め、来年度中の刊行を目指している。今後は、本研究班に参加した中堅、若手研究者を中心に国内各所の鍼灸関連書の発掘と研究調査をおこなうグループを組織し、研究に資する基礎資料と成果の蓄積、人的資源の継続的な発展、拡充を図り、日本鍼灸医術研究進展への布石としたい。



## 京都大学人文科学研究所共同研究最終報告書

### 1. 研究課題

東アジア馬文化の研究

A Study of Horse Culture in East Asia

### 2. 研究代表者氏名

諫早 直人

ISAHAYA Naoto

### 3. 研究期間

2020年4月-2021年3月(1年度目年度目)

### 4. 研究目的

東アジアの諸地域は、中国でさえも家畜馬や馬車の利用において先進地域ではなく、西方からの直・間接的な影響を受けて二次的に始まったことが明らかとなつて久しい。またおおむね前1千年紀後半から後1千年紀前半にかけて、馬車から騎馬へと戦争における利用形態が大きく変化するとともに、家畜馬や騎馬の風習がそれまで認められなかった地域に急速に拡散していく。日本列島における馬の出現は、この変化の最終局面として捉えられる。このように個別の地域・時代に対する研究成果を紡ぎ合わせることで、ある程度の概観は可能ではあるが、東アジアにおける家畜馬や馬車・騎馬利用の出現や普及、その後の展開のプロセスについて、資料の実態に即しつつも一貫した視野のもとに論じた体系的な研究はまだほとんどみられない。本研究は、こうした問題点に鑑み、中国・朝鮮半島・日本列島の馬車・騎馬文化と馬匹生産について、ユーラシア草原地帯と比較しつつ、関連する考古資料と文献史料の検討をもとに明らかにしようとするものである。

It has been shown that eastern Eurasia was not especially advanced in the use of domestic horses and chariots, and that even China was a secondary region compared to the direct and indirect influences derived from the West. From the latter half of the 1st millennium B.C. to the first half of the 1st millennium A.D., the way horses were used in war changed drastically as horse-riding replaced chariots and the customs associated with domestic horses and horseback riding rapidly spread to new areas. The appearance of horses on the Japanese Islands can be seen as the final phase of this change. In this way, it is possible to present a rough overview of horse culture in East Asia by collating

research results for different regions and time periods. However, there are relatively few comprehensive studies focusing on the emergence, popularization and subsequent development of domestic horses, chariots and horse-riding in Eastern Eurasia, based on actual archaeological data. In view of these problems, this study compared horse culture and horse production in China, the Korean Peninsula and the Japanese Islands with that in the Eurasian Steppes, using archaeological materials and historical documents.

#### 5. 研究成果の概要

本研究では、1年の研究期間を通じて3回の研究会を実施し、それぞれユーラシア草原地帯、中国魏晉南北朝、日本古代の馬文化について、班員による研究報告と議論をおこなった。これにより、ユーラシアにおける家畜馬や馬車・騎馬利用の出現と展開の過程について近年の認識を共有することができた。また、東方の中国や日本列島における馬車・騎馬文化と馬匹生産の様相については、関係する考古資料と文献史料を集成・整理し、先行研究の到達点を追認するにとどまらず、鞍馬・馬車・牛車などの社会的役割や馬具の変化などいくつかの視点について、過去の研究とは異なる新たな認識を提示することができた。

#### 6. 共同研究会に関連した主な公表実績

なし

#### 7. 研究成果公表計画および今後の展開等

昨年度の若手A班「東北アジアの騎馬文化と馬匹生産の研究」および今年度の若手A班「東アジア馬文化の研究」において蓄積した知識と経験をふまえ、その研究領域をさらに拡大・発展させるかたちで、2021年度から共同研究A班「東方ユーラシア馬文化の研究」を新たに発足し、3年計画で研究を進めていく予定である。そのなかで、今年度までに実施してきた若手A班の研究成果については、まず2021年度に一般向けの公開シンポジウムとして成果を公表し、その後、さらに一般向けの書籍などのかたちで公刊していく計画である。

## 京都大学人文科学研究所共同研究最終報告書

### 1. 研究課題

西部講堂を中心とする戦後文化空間の研究

A study of post-war cultural space focusing on SEIBUKODO

### 2. 研究代表者氏名

朴沙羅

Park Sara

### 3. 研究期間

2020年4月-2021年3月(1年度目)

### 4. 研究目的

冷戦後の世界における世界的な価値観の動揺が、人文・社会科学の研究者から指摘されるようになって久しい。近年の「先進国」における経済成長の停滞と貧困問題は左右のポピュリズムを生み、それらは反権威・反エスタブリッシュメントとして、今や政治的・社会的に主流となった多様性の寛容を攻撃している。しかし「かつての価値観」や対抗文化の動揺がしばしば指摘されるのに比べて、実際のところそれらは何であったのかについて具体的な研究は多くない。本研究は、西部講堂という自主管理空間に関わった人々の回想を通じて〈ポスト68年〉の中で再生産されてきた価値観の内実を明らかにすることを試みる。こうした空間は「広い意味での5月の運動やその伝播の中で示された価値転換」（宮島喬「新しい社会運動とポスト68年の社会学」p.178）の産物である。地域社会において、またそこに関わった個々人の歴史においてこうした空間は一体何であるのか、それは価値観の動揺が指摘される現代社会において何を教えるのかを明らかにする。

Scholars in humanities and social sciences have been pointing out the shake of values in post-Cold War world. Recession and poverty in “developed” countries generates populism in both right and left sides, leading to attacks to diversity that is now a political/social mainstream. However, compared to the academic suggestions of uneasy “old values” in counterculture, scholars are lacking empirical studies to support the claim. This project tries to cast lights on values of “post-68” and practices that have reproduced them in Seibu Kodo, a milieu of autogestion, through personal recollections of the people who have joined there. A place like Seibu Kodo is a product of

“transformation of values indicated in May Events and its spread” (Takashi Miyajima, *Atarashi shakai undo to posuto 68 nen no shakaigaku*, p.178). The research project will clarify the meaning of the autonomous place in local community, personal histories, as well as its lessons to contemporary society, where certain values has no longer seem stable.

## 5. 研究成果の概要

本共同研究は西部講堂の歴史を調査することを目的として資料収集及び聞き取り調査を精力的に行った。その概要は以下の通りになる。2020年6月に新開純也に対して駒込武と本研究班員の田所大輔、福家崇洋が戦後京大学生運動について人文研で聞き取りを実施。7月10日には「21世紀の人文科学」研究班と共催で人文研において、ダムタイプで音楽を担当してきたDJ山中透へのインタビューをIAMASの松井茂と伊村靖子、本研究班員の伊藤存、田所、福家をインタビュアーとして行った。10月21～23日には飯田俊を東京より招いてインタビュー及び共同研究会を実施した。10月21日に今後の打ち合わせを行ったうえで、22日午後には白樺において高瀬照美、新開純也、飯田俊で高瀬泰司及び西部講堂について鼎談及び田所、福家をインタビュアーとしてインタビューを実施した。そのあと人文研で新開純也に対して田所、福家が戦後京大学生運動につきインタビューを実施した。同日夜には飯田、木下千花、小関隆、本研究班から朴、伊藤、田所、福家のメンバーで西部講堂及び戦後文化運動について共同研究を行い今後の方針などを協議した。10月23日午前には人文研で飯田に対し戦後音楽文化につき田所、福家がインタビューを実施、午後からはキーヤンスタジオで木村英輝に対して飯田、田所、福家で西部講堂及び戦後文化運動につきインタビューを実施した。同日夕刻から人文研で飯田に対し福家が飯田所蔵の資料にもとづきインタビューを実施。10月30日には京大においてシモーヌ深雪、BUBU、山中に対して田所、福家を今後の戦後京都文化のインタビューに向けて打ち合わせ等を行った。これらの聞き取り調査を行うなかで、西部講堂に関する新聞、雑誌、ビラなど多くの資料収集の提供を得た。また以上のインタビューは録音させていただき今後公開の許可を得られたものに関しては資料紹介のような形で学術雑誌等に投稿できればと考えている。

## 6. 共同研究会に関連した主な公表実績

なし

## 7. 研究成果公表計画および今後の展開等

2021年7月開催の、日本学生新左翼運動史に関する国際ワークショップで西部講堂と京大学生運動について成果報告をする予定である。またインタビューの文字起こしを適宜行い、解説を付すなどして、西部講堂関係資料として紹介していくことができれば

と考えている。





## 京都大学人文科学研究所共同研究最終報告書

### 1. 研究課題

小津安二郎映画の欧米における批評的受容に関する研究

Studies of the critical reception of Yasujiro Ozu' s films in the Occident

### 2. 研究代表者氏名

正清 健介

Masakiyo Kensuke

### 3. 研究期間

2020年4月-2021年3月(1年目)

### 4. 研究目的

本研究の目的は、小津安二郎映画が英国で公開された1957年から、米国のD. ボードウェルが『映画の詩学』を発表し小津研究がピークを迎える1988年までの欧米における小津受容の実態を当時の映画批評の考察を通して明らかにすることである。

小津研究は既に多くあるが、その殆どは1970・80年代の研究に代表される作品研究である。しかし本研究は、作品が歴史的にどのように受容されたかを明らかにする受容研究であり、中でも欧米での受容に着目する。このような受容研究は、生前の小津の国際的評価の低さもあってか未だ進んでいない。またそもそも、本研究が考察対象とする欧米の小津映画批評の殆どは未邦訳であり、その存在自体が日本では知られていないという現状がある。本研究は、その未だ手付かずの小津批評を今回初めて網羅的に調査・考察しようと試みる点で有意義であり、小津作品の最初期の国際的評価を新たに提示するものとなる。

The purpose of this study is to analyse film criticism in order to shed new light on the reception of Yasujiro Ozu' s films in the Occident, from 1957 when his crowning achievement Tokyo Story (1953) was shown in London for the first time through to 1988 when the American film historian David Bordwell wrote Ozu and the Poetics of Cinema (1988) - the definitive work on Ozu' s films in English.

Although there are many studies of Ozu' s films, almost all of them, especially 1970s-' 80s works, consist of analysis of both the narrative and the cinematic textuality of the films. In contrast, this study is a study examining how Ozu' s films were received historically overseas, especially in the Occident (the United States, England, and France). Such historical

reception studies of Ozu's films have not been carried out before because of Ozu's lag in terms of overseas popularity. Also, since Western criticism of Ozu's films has not been translated into Japanese, it is almost unknown in Japan. This study intends to analyze this previously untouched Western criticism for the first time, thereby highlighting the beginnings of international appreciation for Ozu's cinematic art.

## 5. 研究成果の概要

研究成果の概要は次の通りである。

### ・仏語圏

フランスの映画批評誌『カイエ・ドゥ・シネマ』において1960年代から80年代にかけて小津映画を対象とした主な批評（作品評）は8本あった。その特徴は、作品と「日本的なもの」との関連を否定した上で、映画スタイルの独自性を主張するものだった。論は、映画の映像と音声の構成をめぐって展開する傾向にある。また新聞『ルモンド』において1960年代から80年代にかけて小津映画を対象とした主な批評（作品評・作家評）は6本あった。その特徴は、作品と「日本的なもの」あるいは小津個人のエピソードとの関連を指摘すると同時に、テーマ（家族愛など）の普遍性を主張するものだった。論は、物語とテーマをめぐって展開する傾向にある。以上のフランスの小津映画批評は、1980年代の小津映画研究に大きな影響を与えていると推察される。

一方、映画批評誌『ポジティブ』では、1960年代から80年代にかけて、小津安二郎の映画に関する批評は8本あった。批評の特徴は論者によって様々だが、作品の物語に沿うのではなく、そこから抽出したテーマを中心に論じている点にある。そこでは主に、①制限や抑制、礼儀作法といった、論者らが保守的＝東洋的なものとして定義するもの、②東洋と西洋、大人と子どもといった二項の対立構造、③そうした対立構造の一方から他方への移行や、そこに現れるズレや逸脱に目を向けるもの、などがテーマとなっている。

### ・英語圏

アメリカでは、1950年代末から80年代にかけて、『Film Criticism』『Film Quarterly』などの学術雑誌に小津映画に対する批評がみとめられる。その初期には、ドナルド・リチーが主に『Film Quarterly』において小津の紹介、批評を行っており、アメリカにおける小津の周知、議論の活性化に貢献したと考えられる。

イギリスに関しては、映画雑誌『サイト&サウンド』を対象に、1957～1988年の範囲で小津安二郎に関する批評的言説を調査した。小津の名前に言及している号は66号、言及のあるページ総数は153ページに及ぶ。「日本的な監督」というステレオタイプに基づいた紹介が多く見られるなか、詳細なテキスト分析に基づく本格的な小津論も確認された。そのうちの何本かの記事は、日本語に翻訳して刊行する価値があると思われる。

#### 6. 共同研究会に関連した主な公表実績

なし

#### 7. 研究成果公表計画および今後の展開等

本研究は 2021 年 3 月に終了するが、それ以降、4 人の班員それぞれは、研究期間中に得た研究成果を論文ないし研究ノートとして公表する予定である。その発表媒体は、4 人の班員が所属する学会（日本映画学会、表象文化論学会、日本映像学会等）の学会誌、もしくは所属研究機関の紀要・機関誌になる。

今後の展開としては、今回の研究で対象とした欧米の小津映画批評のいくつかを班員自ら邦訳し、「欧米小津映画批評集」として集成し、共訳書として刊行することを目指したい。



## 京都大学人文科学研究所共同研究最終報告書

### 1. 研究課題

東アジアにおける阿弥陀如来の表象

The Representation of the Amitabha Tathagata in East Asia

### 2. 研究代表者氏名

高橋早紀子

Takahashi Sakiko

### 3. 研究期間

2020年4月-2021年3月(1年目)

### 4. 研究目的

西方極楽浄土の教主である阿弥陀如来は、大乘仏教の中心的な尊格である。阿弥陀如来に関する造形芸術は独尊形式や三尊形式の尊像、浄土変相図や来迎図と多様で、そこには阿弥陀如来に対する様々な思想や信仰の反映が考えられる。

そこで本研究の目的は、東アジアにおける阿弥陀如来の表象についての考察を通じて、阿弥陀如来に対する多様な思想や信仰の一端を追究することにある。具体的には、中国や日本の作例を主な対象として阿弥陀如来の像容や極楽浄土の様相について検討し、図像上の特色や思想的背景に関する議論を深めることを目指す。

日本・中国・西域・ガンダーラ美術史学や考古学を専門とする班員を中心に、広い視野から阿弥陀如来の造形芸術について考究する本研究には、分野横断的学際研究としての意義がある。さらに、当該分野の第一線で活躍する若手研究者の講演を計画する本研究班には、研究期間終了後にも持続可能な若手研究者の学術ネットワークを構築するという意義もある。

The Amitabha Tathagata, the ruler of the Western Pure Land, is one of the primary Buddhas of Mahayana Buddhism. The various artworks that have been created, such as the images of individual Amitabha or the Amitabha Triad, the representation of the Western Pure Land, and the image of the descent of Amitabha, all reflect various thoughts or expressions of faith in the Amitabha Tathagata. This research team seeks to investigate these various aspects of religious thought or faith by examining how the Amitabha Tathagata and the Western Pure Land have been represented in East Asia. For instance, we will hold two workshops and discuss the various iconographic and religious functions,

based on the differing imagery and representations of the Amitabha Tathagata and the Western Pure Land in China and Japan. This research team, including art historians and archaeologists who specialize in Gandhara, the Western Regions, China, and Japan, will also help advance interdisciplinary studies. .

#### 5. 研究成果の概要

年度内に二回企画した研究討論会では、若手研究者によって東アジアにおける阿弥陀如来の表象に関する最新の調査・研究成果が発表され、約 60 名の参加者とともに多様な表象・思想・信仰について実りある討論を行うことができた。Zoom によるオンラインの公開研究会の実施には不安もあったが、全国各地・海外から多くの研究者の参加が得られ、充実した研究討論会となった。本研究討論会での成果を取り込んだ論文 2 件（山口隆介「兵庫・浄土寺裸形阿弥陀如来立像」『鹿園雑集』23、高橋早紀子「広隆寺講堂阿弥陀如来像の造像背景と道昌」『京都美術史学』2）が、年度内に刊行される予定である。また、本研究班の目指す持続可能な若手研究者の学術ネットワークの構築についても、二回の研究討論会の企画・実施を通して一定の成果が得られた。

#### 6. 共同研究会に関連した主な公表実績

なし

#### 7. 研究成果公表計画および今後の展開等

次年度の研究成果公表計画として、高橋が広隆寺講堂阿弥陀如来像に関する研究内容を進展させ、広隆寺講堂地藏菩薩・虚空蔵菩薩像に関する論文を執筆する計画である。また、今後の展開として、阿弥陀の印相の問題に焦点を当てた共同研究を構想している。本研究班の研究発表で施無畏与願印・説法印・定印・来迎印の作例が取り上げられたが、儀礼における機能の問題については今後の課題とする点も多く、本研究班を通じて形成した若手研究者の学術ネットワークを活用して共同研究の推進を図りたい。

## 京都大学人文科学研究所共同研究最終報告書

### 1. 研究課題

「長い 19 世紀」におけるインド・中国の社会経済史の比較 -税制に注目して

A Comparative Study of the Socio-Economic History of India and China throughout the Long Nineteenth Century - with Special Reference to Tax Systems

### 2. 研究代表者氏名

小川 道大

Ogawa Michihiro

### 3. 研究期間

2020 年 4 月-2021 年 3 月(1 年目)

### 4. 研究目的

本研究の目的は「長い 19 世紀」におけるインドと中国の社会経済史を比較する注目点を見出すことである。近年のアジア経済の興隆の中で、アジアからの世界史再考が近年の歴史学の重要な課題となっている。特に欧米による植民地支配が展開された 18 世紀後半から 20 世紀前半にかけての「長い 19 世紀」に関して、アジア間貿易研究の進展などによりアジア史の見直しが進められている。アジアの大国であるインドと中国の「長い 19 世紀」における社会経済史研究も個別にこの文脈で進展してきたが、日本における両国の歴史研究は交流が極めて少なく、アジアという枠組みで歴史を論じる研究視座も整っていないのが現状である。本研究が目指す「長い 19 世紀」における中印史の比較は、欧米からのアジア史観に捉われずに、アジア史が内包する多様性やアジアという枠組み自体を日本から再考するものであり、アジアからの世界史再考の一助となる。比較に当たっては、国家を支えた税制に注目し、前年度よりもより具体的に中印の史的比較を行う。

This project aims to compare key points of Chinese and Indian socio-economic history throughout “the long nineteenth century”. Due to the recent growth of Asian economies, it has now become important to review global history from Asian perspectives - especially the way in which intra-Asian trade and other characteristics developed throughout the period of colonial rule by Europe during “the long nineteenth century”. Although much research has been carried out on the socio-economic history of China and India, which are both great Asian powers, the study of Asian history as a whole during “the long nineteenth

century” has yet to be established in Japan because of the limited amount of academic communication between scholars and historians who study each of these countries. By comparing Chinese and Indian history during the nineteenth century, Japanese scholars in this project reconsider the diversity of Asian history within a purely Asian framework, independent from Western views of Asian History. This project compares Chinese and Indian history by focusing specifically on the tax systems which not only supported both states financially, but greatly affected socio-economic relations in both states.

#### 5. 研究成果の概要

オンラインの開催ではあったが、2回の研究会を通じて、中国史研究者・インド史研究者とも相互の歴史に対する理解をいっそう深めることができた。中印の共通項として巨大国家であることのみならず、清朝やムガル帝国、イギリス東インド会社といった外来の勢力の統治を受けたものの、既存の制度も根強く残りハイブリッドな国家であったことなどがあらためて確認された。一方で、人口変動など、中印に大きな違いがあることも確認できた。また、中印の比較史にふさわしいテーマは、土地制度・労働力・航運・財政・金融・商業に絞り込むことができた。これらのテーマについてはそれぞれの担当者によって比較の作業が進展しており、中印の共通点と相違点も明らかになりつつある。本年の社会経済史学会大会、来年の世界経済史会議においてその成果を報告する準備もととのった。

#### 6. 共同研究会に関連した主な公表実績

なし

#### 7. 研究成果公表計画および今後の展開等

2021年5月の社会経済史学会大会、2022年7月の世界経済史会議のパネルにおいてその成果を報告する予定である。



## 京都大学人文科学研究所共同研究最終報告書

### 1. 研究課題

チベット文明の継承と史的展開の諸相

Aspects of Historical Development and Transmission of the Tibetan Civilization

### 2. 研究代表者氏名

池田 巧

IKEDA Takumi

### 3. 研究期間

2018年4月-2021年3月(3年目)

### 4. 研究目的

チベット文明は、周辺諸地域との歴史的交流を通じて、宗教・儀礼・言語・社会制度などを広く浸透させ、独自の文明圏を築きあげた。本共同研究班では、交流史の諸相に関する研究成果を学際的に集積し、チベット文明の史的展開を多角的に分析して、ユーラシア世界におけるその位置づけの再評価を行なう。7世紀以降、チベット・ヒマラヤ地域は周囲の先行文明の影響を受けつつ、独自の文明を展開させてきた。11～12世紀に仏教を完全に消化して以降、より強固となったチベット文明は周辺文化と交流を繰り返しつつモンゴル～東アジアにその影響力を伸張させた。さらに20世紀半ば以降もその発信力は欧米社会までにも影響を与えている。このような発信力と柔軟性をチベット文明は如何に獲得したのか、また周辺諸文明とどのように相克・調和してきたのか。その具体像を探るべく、多様な視点からチベット文明の諸相と継承を学際的に分析する。

From the 7th century, the Tibetan civilization—its unique religions, rituals, languages, and social systems—gradually permeated the neighboring cultural areas via direct communications and trade. Our project compiles the results of interdisciplinary research carried out on the inter-cultural communication among these areas, reviewing and evaluating the aspects of the historical development and expansion of the Tibetan civilization in the Eurasian world. The Tibeto-Himalayan area, while influenced by preceding Asian civilizations, has developed an individual civilization. The Tibet civilization grew stronger after assimilating Buddhism in the 11–12th century, and by communicating with the neighboring cultural areas, it spread through Mongol to East Asia; Moreover,

its influence proved effective even in the modern European world of the late 20th century. How did the Tibetan civilization maintain such power and flexibility? How did the Tibetan civilization come in conflict and how did it attain reconciliation with neighboring civilizations? And how have elements of the Tibetan civilization been transmitted in modern society, even after the country itself ceased to exist? To find answers to such questions, we shall analyze the historical aspects and transmission of the Tibetan civilization from various academic angles.

#### 5. 研究成果の概要

日本のチベット学を構成する歴史学、宗教学、人類学、言語学などの諸分野における優れた蓄積と成果を統合する学際的協力体制の構築をめざし、将来における当該分野の発展の礎を築くことを目標に研究活動を展開してきた。そのうえで、チベット文明とは何かを相対的に記述するべく最新の研究成果に基づく知見を手際よく整理して、日本のチベット学が何をどこまで明らかにしてきたのかを丁寧に論述した一般向けの概論書を刊行した。

#### 6. 共同研究会に関連した主な公表実績

岩尾一史・池田 巧（編）『チベットの歴史と社会』上下（臨川書店、2021年）

#### 7. 研究成果公表計画および今後の展開等

研究報告書の『チベットの歴史と社会』を商業出版として刊行するほか、関係機関や研究成果を共有すべき個人研究者に寄贈する。また同書の構成に基づき、歴史篇、宗教篇、社会篇、言語篇ごとに執筆者を登壇者として出版記念講演会を4回にわたり開催したいと考えている。講演会はウェブセミナー形式で行うべく準備を進めている。

## 京都大学人文科学研究所共同研究最終報告書

### 1. 研究課題

東方文化学院京都研究所旧蔵漢籍の整理と研究

A Bibliographic Research on Old Chinese Books Previously Housed in the Kyoto Institute of the Academy of Oriental Culture

### 2. 研究代表者氏名

矢木 毅

Yagi, Takeshi

### 3. 研究期間

2016年4月-2021年3月(5年目)

### 4. 研究目的

東方文化学院京都研究所は1929年に外務省の助成により設立された。今日の人文科学研究所東方学研究部（東アジア人文情報学研究センター）の前身である。旧蔵の漢籍はすべて東方学研究部に継承されており、その内容は『東方文化学院京都研究所漢籍目録』（1938年）によって詳細に知ることができる。なかでも天津の蔵書家・陶湘の旧蔵書、特に叢書を多く含むことで学術的にもその価値が高い。本研究班はこの目録に掲載された漢籍の書誌情報を再吟味し、これに詳細な典拠情報を加えることによって、現行の電子目録（KANSEKI）の情報精度をさらに向上させることを目的とする。序跋等のテキスト・データを含めた典拠情報は逐次インターネットを通して発信し、蔵書印については図録を作成して刊行する。来るべき90周年、100周年の節目に向けて、近代東アジアにおける学知の原風景を探り、学術史の再構築を図るための展示会、企画展なども開催したい。

The Kyoto Institute of the Academy of Oriental Culture was established in 1929 using a grant-in-aid from the Ministry of Foreign Affairs of Japan, and it has hence developed into the Department of Oriental Studies of the Institute for Research in Humanities, Kyoto University. The Institute has inherited all the old Chinese books that were once housed in the old one, and the details of the collection can be seen in the Catalogue of the Old Chinese Books housed in the Kyoto Institute of the Academy of Oriental Culture, published in 1938. This collection is well known and is highly valued in the academic world, particularly because it contains a series of books that were once housed by

Tao Xiang, a famous bookkeeper in Tianjin, China. Our research project reexamines the information in the Catalogue and attempts to enhance the accuracy of the KANSEKI database, an online catalogue based on the Catalogue. The project involves the creation of an additional database on the prefaces and postscripts of the books. It will also involve the collection of information about Ex-libris Ownership Stamps and their publication in pictorial books. In the near future, as part of the celebrations of the 90th and 100th anniversaries of the institute, exhibitions will be held with the objective of reviewing and restructuring oriental studies in Japan.

#### 5. 研究成果の概要

毎回の会読の成果を「典拠情報」にまとめ、漢籍データベースの書誌情報にリンクさせた形でウェブ上に公開している。また蔵書印については『京大人文研蔵書印譜』と題する図録のシリーズを東アジア人文情報学研究センターより刊行しており、本年度はその第四冊を刊行した。

#### 6. 共同研究会に関連した主な公表実績

京大人文研蔵書印譜（一）（東方学資料叢刊第 16 冊、2008 年、漢字情報研究センター）、京大人文研蔵書印譜（二）（東方学資料叢刊第 21 冊、2016 年、東アジア人文情報学研究センター）、京大人文研蔵書印譜（三）（東方学資料叢刊第 25 冊、2018 年、東アジア人文情報学研究センター）、京大人文研蔵書印譜（四）（東方学資料叢刊第 28 冊、2020 年、東アジア人文情報学研究センター）、朝鮮本十選（東方学資料叢刊第 22 冊、2016 年、東アジア人文情報学研究センター）、排印本十選（東方学資料叢刊第 23 冊、2017 年、東アジア人文情報学研究センター）、字書十選（東方学資料叢刊第 27 冊、2019 年、東アジア人文情報学研究センター）。

#### 7. 研究成果公表計画および今後の展開等

次年度より新規に「東方文化研究所旧蔵漢籍の整理と研究」班を組織し、引き続き序跋・蔵書印等の調査・研究を進める。

## 京都大学人文科学研究所共同研究最終報告書

### 1. 研究課題

漢籍リポジトリの基礎的研究

Fundamental research of the Kanseki Repository

### 2. 研究代表者氏名

ウィットイルン クリスティアン

Christian Wittern

### 3. 研究期間

2016年4月-2021年3月(5年目)

### 4. 研究目的

平成 25 年 4 月から平成 28 年 3 月開催された研究班「人文情報学の基礎研究」では文献学的な手法に基づいた漢籍電子テキストの集合である漢籍リポジトリ ([www.kanripo.org](http://www.kanripo.org)) の構築に取り組み、初歩的な形で公開ができた。しかし、テキスト集合の完成度または各テキストの適切な記述などにまた課題が残された新研究班は引き続き漢籍リポジトリの基本的な整理と研究が行う予定だ。利用者の立場からも漢籍リポジトリの全体に関わる研究または特定な研究課題に絞った研究を支援するや、個人研究者や研究者グループに行う漢籍の解読を支援するなツールの研究・開発も計画されている。それ以外には現時点で特に課題になると思われるのは、複数の版からなる批判校訂版の作成と画面上の表示や印刷様の組版のワークフローの検討や、漢籍リポジトリ全体の文字使用とその規範、正字と異体字の対応などを検討するが、具体的な課題とその進め方は班員の関心に沿ってきめる。

The research seminar “Fundamental Topics in Digital Humanities” held from April 2013 to March 2016 produced as one of its results a first preliminary release of a comprehensive repository of premodern Chinese texts based on clear philological principles called “Kanseki Repository” ([www.kanripo.org](http://www.kanripo.org)). However, due to the limited time, only a very rough draft could be produced and some important texts are still missing. This seminar will follow up on these results by improving the scope and descriptive depth of the texts and by developing exemplary methods for using the repository for answering specific research questions. Among these, support for the creation of text-critical editions and a general survey of the characters used in the Repository are on

the agenda, but the actual plan will be developed by the members upon start of the seminar.

## 5. 研究成果の概要

この研究班ではあらゆる角度から漢籍リポジトリについての研究が行うとともに研究者の共同研究に行えるプラットフォームの開発を目ざした。そのためにディスタント・リーディング、テキスト分析、トピック・モデリングなどの方法を検討して、可能な限り漢籍リポジトリに取り入れた。

しかし、より利用者からの要望に応じて漢籍リポジトリ本体のファイル形式についての検討が行った。その結果としては新しい機能と現行のリポジトリの両立を考慮して、これから実行可能な運営形態を検討しました。その結果としては基本的には漢籍リポジトリをそのままの運営を続ける上で、新しい形の XML 版に基づいて別途の API とインタフェースを立ち上げることが望ましいという結論を得た。今年度はその形式の基本的な枠組に必要なを作成して、GitHub で公開しました。

関連プロジェクトとしては「漢學文典」(通称 TLS、Thesaurus Linguae Sericae) の支援も継続した。具体的にはプリンストン大学の東アジア研究所(米国)とボーフム大学の中國傳統文化研究センター(ドイツ)との共同研究で「漢學文典」の新しい共同研究・共同作業のためのウェブサイト(hxwd.org)の構築と実験運用をはじめました。

## 6. 共同研究会に関連した主な公表実績

論文:

Christian Wittern: Public and Private Views of Texts in Digital Editions - The Case of the Kanseki Repository, in: Digital Humanities 2016.

Christian Wittern: The Digital Tripitaka and the Modern World. In Jiang Wu and Greg Wilkinson (eds.) Reinventing the Tripitaka: Transformation of the Buddhist Canon in Modern East Asia, Lexington 2017, p 150-162.

ウィッティルン クリスティアン:《景德傳燈錄》から《五燈會元》へ — 禅宗の変遷と燈史の編集 東方学報(京都) 第94冊 2019年12月

Christian Wittern, Digital Texts in Practice, Journal of the Text Encoding Initiative, Volume 13 (2020), <https://journals.openedition.org/jtei/3187>

(2018年度のTEI国際学会の基礎講演に基づいて)

Christian Wittern, KanripoX: A tagset for connecting digital texts, 東洋学への

コンピュータ利用 第 33 回研究セミナー (2021), p35-67.

ウェブサイト :

漢籍リポジトリ : <https://www.kanripo.org>

漢學文典 : <https://hxwd.org>

#### 7. 研究成果公表計画および今後の展開等

研究班の成果としてはデータ交換の XML 形式は GitHub など公開中 (<https://github.com/kanripox/kanripox-dev/blob/master/KRX.odd>)、又は漢籍リポジトリ (<https://www.kanripo.org>) と漢學文典 (<https://hxwd.org>) にも引き継ぎ研究成果が公開中。

これらの研究成果を踏まえて、4 月から発足予定の研究班「漢籍共同研究システムの構築」で以上のデータベースなどの資料を統合する作業を計画しています。





## 京都大学人文科学研究所共同研究最終報告書

### 1. 研究課題

秦代出土文字史料の研究

Study on the Excavated Manuscripts of the Qin Dynasty

### 2. 研究代表者氏名

宮宅 潔

MIYAKE Kiyoshi

### 3. 研究期間

2016年4月-2021年3月(5年目)

### 4. 研究目的

中国湖南省龍山県里耶鎮で戦国時代から漢代にかけて使用された都城遺跡が発掘され、そこから秦の行政文書を中心とする簡牘史料（総計 38,000 余簡）が発見されたのは、2002年のことであった。簡牘には始皇帝（秦王政）25年（前 222）から二世皇帝 2年（前 208年）までの紀年が現れる。里耶鎮は湖南・湖北・重慶市が接する境界付近の、険しい山間部に位置するが、始皇帝による東方六国の征服（前 221）の後、この山深い離郷にも郡県制の網の目が及び、秦帝国の統治下に組み入れられたことを物語る。本研究班は、この貴重な史料を会読形式で精読し、中国古代帝国の統治制度やその実際のありように迫ることを、主な目的とする。これと併せて、岳麓書院所蔵簡の会読も進めている。こちらの史料は、2003年に湖南大学岳麓書院が香港において購入した盗掘簡である。すでに5部の報告書が出版され、第4・5部の報告書には律令条文が収録されている。この法律史料を併せて精読し、如上の目的を達成する一助としたい。

In 2002, a city remain from the Zhanguo period to the Han was excavated at the town of Liye, Longshan, Hunan province, over 38,000 strips and boards were discovered here. These strips comprise administrative documents, dated from 222BCE to 208BCE. It follows that the area around Liye, a small mountain village located near the boundary among Hunan, Hubei, and Chongqing, was incorporated into the Qin administrative system after the unification by the First Emperor. In this project, we will read this manuscript closely, investigate the political system of the early Chinese emperor and its reality. In addition to the Liye discoveries, the Qin strips of unknown place were smuggled to Hong Kong and repatriated by the Yuelu Academy of Hunan University in 2003. Several parts of

this material have been already published, which comprise the calendars and the records of judicial process during the Qin. The photos and transcriptions of the Qin statutes and ordinances among these strips will also appear soon. Utilizing this material, we intend to achieve our above-mentioned goal.

#### 5. 研究成果の概要

まず岳麓書院所蔵簡《秦律令（壹）》の会読を進め、約 300 簡を読了した。その成果は「訳注稿 その（一）～その（三）」として、『東方学報』誌上に発表した。あわせて里耶秦簡〔壹〕の会読も行い、これについては関係論文を研究班HP (<http://www.shindai.zinbun.kyoto-u.ac.jp/index.html>) に掲載するとともに、『東方学報』をはじめとした学術誌や、中国・武漢大学のHP「簡帛網」にも投稿し、掲載された。

#### 6. 共同研究会に関連した主な公表実績

人文研アカデミーの連続セミナーとして「秦帝国の実像 同時代資料が語る始皇帝の時代」（2020年10月1日、8日、15日、22日）をオンラインで開催し、研究の一端を広く一般に向けても発信した。

#### 7. 研究成果公表計画および今後の展開等

本年度の会読分を「岳麓書院所蔵簡《秦律令（壹）》譯注稿 その（四）」として『東方学報』誌上に発表する。併せて、《秦律令（壹）》（第四冊）分の訳注に校訂を加え、再整理して単行本として刊行する。第四冊分の残りの部分の会読は、次年度から新たに組織する研究班において行う。

## 国際研究ミーティング 実績・活動報告書

	主催者氏名	申請者	国際研究ミーティング 名称
1	マルタン, ノゲラ・ラモス	中西 竜也	北白川EFE0サロン: 日本における信仰と「知」のはざま — 中世・近世・近代を中心に —
2	Harald Fuess	藤原 辰史	環境史研究の可能性
3	Gilles Philippe	森本 淳生	〈ポスト=ヒューマン〉の人文学
4	天野恭子		古代文献の言語分析から読み解く社会背景のダイナミズム



## 京都大学人文科学研究所国際研究ミーティング実施報告書

### 1. 国際研究ミーティングの名称

北白川 EFEO サロン: 日本における信仰と「知」のはざま — 中世・近世・近代を中心に —

### 2. 主宰責任者氏名

マルタン, ノゲラ・ラモス(フランス国立極東学院、京都大学人文科学研究所客員准教授)、鈴木堅弘(京都精華大学)、平岡隆二(京都大学人文科学研究所)

### 3. 開催日時等およびプログラム(講演者名または報告者名を明記してください)

#### ①日時:2020年9月25日 18:00~19:30

場所:フランス国立極東学院京都支部

演題等:室町時代の密教と現世利益—茶枳尼天曼荼羅をめぐって

講演者または報告者:ガエタン・ラポー(京都大学人文科学研究所白眉特定准教授、EFEO 共同研究員)

#### ②日時:2020年10月16日 18:00~19:30

場所:フランス国立極東学院京都支部

演題等:阿弥陀の秘密空間——隠さざるをえなかった儀礼空間の機能と教義的な背景(近世を中心に)

講演者または報告者:マルクス・リュウシュ(龍谷大学世界仏教文化研究センター博士研究員)

#### ③日時:2020年10月30日 18:00~19:30

場所:フランス国立極東学院京都支部

演題等:湯殿山信仰に登場する身体とモノ

講演者または報告者:アンドレア・カスティリオーニ(名古屋市立大学講師)

#### ④日時:2020年11月27日 18:00~19:30

場所:フランス国立極東学院京都支部

演題等:京坂キリシタン事件の主要人物——入信の動機と宗教活動を中心に

講演者または報告者:宮崎ふみ子(恵泉女学園大学名誉教授)

### 4. 概要(400字程度)

日本の歴史における「信仰」と「知」の交点に着目し、双方が未分化の時代における「民間習俗の実態」や「民衆の思想観」がどのようなものであったのかという問題を取り上げた。本題における「知」とは、近代学問が成立する以前の医術、占星術、本草学、陰陽道、呪術、修験道、和算、茶道、仏教教理、職工技術、もの語り、詩文、画道など多岐にわたるものである。科学や医学、文学などの近代学問が成立する以前に、これらの「知」の祖型は、いかにして人びとの生活に根ざし、世俗民の生々しい信仰と結びつくなかで、独自の発展をとげてきたのか、その理由や経緯を、14世紀から19世紀の日本における民衆社会の歴史を通じて検討してきた。四回の講演会を開催し、講師の報告をもとに参加者が議論を行うかたちで、当該問題の理解を深めた。

5. 参加者(別紙「参加状況」も記載してください。)

①学外

マルタン、ノゲラ・ラモス(フランス国立極東学院、京都大学人文科学研究所客員准教授)、鈴木堅弘(京都精華大学)、リュウシュ・マルクス(龍谷大学博士研究員)、宮崎ふみ子(恵泉女学園大学名誉教授)、Andrea Castiglioni(名古屋市立大学講師)、Polina Serebriakova(ケンブリッジ大学院生)、タム・チュイ・ジュン(ケンブリッジ大学院生)、Katja Triplett(University of Leipzig(German)教授)、カーター・ケイレブ(九州大学人文科学研究院講師)、詹晏怡(台湾中央研究院歴史語言所ポスドク)、Marta Sanvido(Ca'Foscari University of Venice (Italy) -Adjunct Professor)、ブライアン・ルバート(神奈川大学教授)、スティーブン・トレンソン(早稲田大学准教授)、Silvio VITA(ISEAS 所長)、Didier DAVIN(国立国文学研究資料館)、青原彰子(広島大学科博士課程後期)、久留島元(京都精華大学特別任用講師)、シュタイネック 智恵(チューリッヒ大学客員研究員、チュービンゲン大学院生)、末松 憲子(名古屋大学研究員)、Catherine Ludvik(Stanford Japan center 教授)、丁嘉琪(同济大学(中国)院生)ほか

学内

上島享(文学研究科教授)、メナチェ・アンドレス(文学研究科修士課程)、齋藤珠乃(薬学部一回生)、亀山 隆彦(こころの未来研究センター研究員)

所内

平岡隆二、WITTERN, Christian

②学外

マルタン、ノゲラ・ラモス(フランス国立極東学院、京都大学人文科学研究所客員准教授)、鈴木堅弘(京都精華大学)、宮崎ふみ子(恵泉女学園大学名誉教授)、青原彰子(広島大学科博士課程後期)、三井秀子(Centro Incontri Umani (スイス) 研究員)、Wamae W. Muriuki(University of Nairobi 講師)、スポーレ マーシャ(ジュネーブ大学・東京大学大学院博士課程)、Makiko Tsunoda(Nottingham Trent University 博士課程)、鈴木紗江子(University of British Columbia 博士課程)、桑原泰枝(ノーザンケンタッキー州立大学教授)、Catherine Otachime(University of Colorado Boulder 修士課程)、堤邦彦(京都精華大学教授)、梁潔(東南大学(中国)講師)、エイヴリ・モロー(ブラウン大学博士課程)、詹晏怡(台湾中央研究院歴史語言所ポスドク)、寺田澄江(フランス国立東洋言語文化大学 INALCO 名誉教授)、ヴァネヤン・エリザヴェタ(モスクワ大学院生)、斎藤 喬(南山大学講師)、鈴木 正崇(慶應義塾大学名誉教授)、碧海寿広(武蔵野大学准教授)、渡瀬綾乃(筑波大学院生)、Jamie Hubbard(Numata Professor of Buddhist Studies, Smith College)、Catherine Ludvik(Stanford Japan center 教授)、Silvio VITA(ISEAS 所長)ほか

学内

東 まり子(京都大学文学部の留学生研究生)、上木 正博(事務職)、檜山智美(白眉センター

特定助教)、筈井 俊輔(経済学研究科特定助教)、ガエタン・ラポー(白眉センター特定准教授)、  
亀山 隆彦(こころの未来研究センター研究員)

所内

WITTERN, Christian

### ③学外

マルタン, ノゲラ・ラモス(フランス国立極東学院、京都大学人文科学研究所客員准教授)、鈴木堅弘(京都精華大学)、Jamie Hubbard(Numata Professor of Buddhist Studies, Smith College)、Schmid, Sarah Rebecca(University of Zurich, Switzerland 博士課程)、カーター・ケイレブ(九州大学講師)、Emanuela SALA(SOAS 博士課程)、三井秀子(Centro Incontri Umani (スイス) 研究員)、Alexander Vesey(明治学院大学准教授)、梅沢ふみ子(恵泉女学園大学名誉教授)、詹晏怡(台湾中央研究院歴史語言所ポスドク)、中野智恵子(University of Arizona 講師)、グエンツエ・ミン(名古屋大学文学部三回生)、Yui Suzuki(University of Maryland 教授)、リュウシュ・マルクス(龍谷大学博士研究員)、笹川花(名古屋大学文学部二回生)、坂知尋(龍谷大学リサーチ・アシスタント)、Marta Sanvido(Ca'Foscari University of Venice (Italy) -Adjunct Professor)、モリス・ジョン(駒沢女子大学准教授)、王琛(ブリティッシュコロンビア大学修士課程)、Silvio VITA(ISEAS 所長)、猪飼祥夫(北里大学客員研究員)、大内典(宮城学院女子大学教授)、Claudia Iazzetta(University of Naples "L'Orientale"教授)、Catherine Ludvik(Stanford Japan center 教授) ほか

学内

上木 正博(事務職)、ガエタン・ラポー(白眉センター特定准教授)

所内

WITTERN, Christian

### ④学外

鈴木 正崇(慶應義塾大学名誉教授)、乙井 遼平(仏教大学大学院生)、平澤 キャロライン(早稲田大学准教授)、白石 恵理(国際日本文化研究センター助教)、大橋 幸泰(早稲田大学教授)、Alexander Vesey(明治学院大学准教授)、Andrea Castiglioni(名古屋市立大学講師)、シュタイネック 智恵(チューリッヒ大学客員研究員、チュービンゲン大学院生)、布施倫英(ヘルシンキ大学講師)、伊藤モラレス杏子(Universidad de Granada (Spain)講師)、Chiara Ghidini(University of Naples L'Orientale (Italy)准教授)、小林亜未(デュッセルドルフ大学助教)、Paola CAVALIERE(大阪大学准教授)、岸本恵実(大阪大学准教授)、ベネディクト・ティモシー(関西学院大学助教)、黄昭淵(韓国国立江原大学教授)、リュウシュ・マルクス(龍谷大学博士研究員)、相良かおる(西南女学院大学准教授)、Silvio VITA(ISEAS 所長)、ペレス・リオボ アン

ドレス（同志社大学助教）、末松 憲子（名古屋大学研究員）、王琛（ブリティッシュコロンビア大学修士課程）、郭南燕（東京大学特任教授）、丁嘉琪（同济大学（中国）院生）ほか

学内

上木 正博（事務職）、柳一菲（文学研究科修士）、ガエタン・ラポー（白眉センター特定准教授）、メナチェ・アンドレス（文学研究科修士課程）

所内

平岡隆二

6.助成金の使途等

国内旅費に使用

7.その他(成果や今後の展開等、自由に記載してください)

別紙

参加状況

区分	機関数	参加人数					延べ人数				
		総計	海外研究者	40歳未満	35歳以下	大学院生	総計	海外研究者	40歳未満	35歳以下	大学院生
学内(法人内)	7	14 (3)	1 (0)	( )	( )	2 (0)	25 (3)	4 (0)	( )	( )	3 (0)
国立大学	5	13 (7)	4 (3)	( )	( )	3 (3)	16 (9)	5 (3)	( )	( )	4 (4)
公立大学	1	1 (0)	1 (0)	( )	( )	( )	3 (0)	3 (0)	( )	( )	( )
私立大学	18	22 (5)	5 (2)	( )	( )	( )	33 (8)	9 (2)	( )	( )	( )
大学共同利用機関法人	2	2 (1)	( )	( )	( )	( )	2 (1)	( )	( )	( )	( )
独立行政法人等公的研究機関		( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )
民間機関		( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )
外国機関	30	34 (26)	20 (15)	( )	( )	14 (11)	50 (33)	34 (22)	( )	( )	16 (11)
その他		26 (11)	( )	( )	( )	( )	42 (18)	( )	( )	( )	( )
学外 計	56	64 (24)	30 (20)			17 (14)					
計	63	78 (27)	31 (20)	( )	( )	19 (14)	171 (72)	55 (27)	( )	( )	23 (15)



【その他の参加状況】

※本務所属が海外の研究機関である研究者

※( )内には、女性数を記載

※受入機関、受入人数、延べ人数を区分に応じて記入してください。

※外国人、若手研究者(40歳未満)、若手研究者(35歳以下)、大学院生の人数はそれぞれ受入人数、延べ人数に対しての内数を記入してください。

※受入人数、延べ人数については上段に総数を下段に( )で女性の内数を記入してください。

※「学内」の所属機関数は「学部数」等を記入してください。

※【その他の参加状況】には「その他」区分に計上した、具体的な所属等を記載

※受入人数及び延べ人数の算出方法は、以下の例に基づき算出してください

国際研究ミーティングに参加者2人が3回参加した:受入人数2人、延べ人数6人



## 京都大学人文科学研究所国際研究ミーティング実施報告書

### 1. 国際研究ミーティングの名称

環境史研究の可能性

### 2. 主宰責任者氏名

藤原辰史(京都大学准教授)、Harald Fuess(ハイデルベルク大学教授)

### 3. 開催日時等およびプログラム(講演者名または報告者名を明記してください)

①日時:2020年10月23日 10:00~12:00

場所:京都大学人文科学研究所本館4階大会議室

演題等:明治期日本のコレラ

講演者または報告者:Harald Fuess(ハイデルベルク大学教授)

### 4. 概要(400字程度)

明治期日本のコレラエピデミックを、外交、科学、アジア史の文脈から考える。特に、16万人の日本人が感染したと言われるヒスペリア号事件について、さまざまな資料を利用しながら、それをめぐる日本とドイツの関係、東アジアの情勢、公衆衛生の状況などについて説明した。今日のパンデミックを歴史的にどう位置付けるかに関する重要な論点もあり、講演後、感染症に関心をもつ参加者で、他国・他の感染症との比較や、パンデミック研究の展望について議論した。

### 5. 参加者(別紙「参加状況」も記載してください。)

#### ①学外

小堀聡(名古屋大学准教授)、香西豊子(佛教大学准教授)、ルッシュ・マルクス(龍谷大学研究員)、ハラルト・フース(ハイデルベルク大学教授)

#### 学内

桑田昌宏(生命科学研究科助教)

#### 所内

小関隆、瀬戸口明久、ティル・クナウト、直野章子、藤原辰史

### 6. 助成金の使途等

国内からコメンテーターを呼ぼうと思っていたが、ウイルス感染を避けるために、急遽キャンセルとなった。よって使用しなかった。

### 7. その他(成果や今後の展開等、自由に記載してください)

今回の発表を中心にして、フース氏は『ZINBUN』で論文を発表する予定。さらに、コレラのみならず、日本のさまざまな感染症について資料を収集し、パンデミックの総合的研究へと繋げていきたい。

## 参加状況

区分	機関数	参加人数					延べ人数				
		総計	海外研究者	40歳未満	35歳以下	大学院生	総計	海外研究者	40歳未満	35歳以下	大学院生
学内(法人内)	2	5 (1)	1 ( )	1 ( )	1 ( )	0 (0)	5 (1)	1 ( )	1 ( )	1 ( )	0 ( )
国立大学	1	1 ( )	( )	1 ( )	( )	( )	1 ( )	( )	1 ( )	( )	( )
公立大学		( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )
私立大学	2	2 (1)	1 ( )	( )	1 ( )	( )	2 (1)	1 ( )	( )	1 ( )	( )
大学共同利用機関法人		( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )
独立行政法人等公的研究機関		( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )
民間機関		( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )
外国機関	1	1 ( )	1 ( )	( )	( )	( )	1 ( )	1 ( )	( )	( )	( )
その他		( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )
学外 計											
計	5	9 (2)	3 ( )	2 ( )	2 ( )	( )	9 (2)	3 ( )	2 ( )	2 ( )	( )
【その他の参加状況】											

※本務所属が海外の研究機関である研究者

※( )内には、女性数を記載

※受入機関、受入人数、延べ人数を区分に応じて記入してください。

※外国人、若手研究者(40歳未満)、若手研究者(35歳以下)、大学院生の人数はそれぞれ受入人数、延べ人数に対しての内数を記入してください。

※受入人数、延べ人数については上段に総数を下段に( )で女性の内数を記入してください。

※「学内」の所属機関数は「学部数」等を記入してください。

※【その他の参加状況】には「その他」区分に計上した、具体的な所属等を記載

※受入人数及び延べ人数の算出方法は、以下の例に基づき算出してください

国際研究ミーティングに参加者2人が3回参加した:受入人数2人、延べ人数6人

# 京都大学人文科学研究所国際研究ミーティング実施報告書

## 1. 国際研究ミーティングの名称

〈ポスト=ヒューマン〉の人文学

## 2. 主宰責任者氏名

ジル・フィリップ (Gilles Philippe、ローザンヌ大学)

森本淳生

## 3. 開催日時等およびプログラム(講演者名または報告者名を明記してください)

①日時:2020年11月14日(土)

場所:ウェビナー(講演者、通訳者は京都、東京、パリより参加)

森本淳生 Atsuo MORIMOTO (京都大学)

イントロダクション——〈ノン=ヒューマン〉から〈ポスト=ヒューマン〉へ

Introduction : Du « Non-humain » au « Post-humain »

ジル・フィリップ Gilles Philippe (ローザンヌ大学)

ポスト=ヒューマニズムと文体論

Posthumanisme et stylistique

塚本昌則 Masanori TSUKAMOTO (東京大学)

非人間の詩学——オルテガ・イ・ガセット「芸術の非人間化」からメルロ=ポンティ「制度化」まで

Poétique de l'inhumain : De « La Déshumanisation de l'art » d'Ortega y Gasset à «

L'Institution » de Merleau-Ponty

篠原雅武 Masatake SHINOHARA (京都大学)

世界の脆さの只中での post-humanities:川内倫子の写真実践とティモシー・モートンのエコロジー思考をめぐって

Le post humanisme au cœur de la fragilité du monde : la pratique photographique de Kawauchi Rinko et les idées de Timothy Morton sur l'écologie

## 4. 概要(400字程度)

深化するグローバリズム、遺伝子工学や AI など飛躍的發展を遂げたテクノロジー、深刻な環境破壊と気候変動、コロナウイルスが示したパンデミックの危機等々を示す現代のポスト=ヒューマン的状況、すなわち、近代的な「人間」の「終焉以後」の時代において人文学はいかなるものでありうるのかを考察した。森本はマラルメやウエルベックなど 19 世紀以来のフランス文学に見られる、人間の非=人間的な次元に対する関心を浮き彫りとし、フィリップは文体論的な観点よりコンピュータによって生成された文学作品やフローベールが夢想した「語り手のいない作品」を論じ、塚本はオルテガ・イ・ガセット、ヴァレリー、メルロ=ポンティを取りあげて人間と世界との相互連関的な生成の次元を明らかにし、篠原は気候変動や震災以後の人為的世界の脆さと、それを踏まえてこそ感じられる新たなリアル感覚を川内倫子の写真を例に論じた。

## 5. 参加者(別紙「参加状況」も記載してください。)

①学外

ジル・フィリップ (Gilles Philippe、ローザンヌ大学文学部)、塚本昌則(東京大学大学院人文社会系研究科)

学内

篠原雅武(京都大学大学院総合生存学館(思修館))

#### 6.助成金の使途等

- ・篠原雅武先生日本語原稿のフランス語訳作成(ブリス・フォコニエ氏):62829 円
  - ・謝金(篠原先生):16705 円
  - ・謝金(塚本先生):16705 円
- 合計:96239 円

#### 7.その他(成果や今後の展開等、自由に記載してください)

近年なにかと話題となる「人文学の危機」を、ポスト=ヒューマン的状况を踏まえて改めて考察し、21 世紀において今後いかなる方向と方法によって人文学を展開していくべきかのヒントを得ることができた。森本とフィリップが強調したように、ノン=ヒューマンなものをめぐる考察はすでに 19 世紀には文学の主要な関心対象だったのであり、それが、塚本がとりあげた 20 世紀の非人間的なものをめぐる考察を経て、篠原が分析した震災以後の思考のあり方にまでつながっている。こうした人文学にそもそも含まれていたノン=ヒューマンなものに関する考察を、現代のポスト=ヒューマン的状况において読み直し、新たな問題系に組み直すことが今日求められている。

また、フランスなど海外の視聴者を含む 100 名以上の参加者を得られたこと、ウェビナー上で日仏同時通訳を行えることを実地に検証できたことも収穫であり、今後の国際シンポジウムのあり方の考える上で有益な企画であった。

## 参加状況

区分	機関数	参加人数					延べ人数				
		総計	海外研究者	40歳未満	35歳以下	大学院生	総計	海外研究者	40歳未満	35歳以下	大学院生
学内(法人内)	3	19 (7)	0 (0)	2 (1)	11 (3)	5 (2)	19 (7)	0 (0)	2 (1)	11 (3)	5 (2)
国立大学	18	28 (11)	7 (5)	7 (2)	11 (8)	11 (8)	28 (11)	7 (5)	7 (2)	11 (8)	11 (8)
公立大学	0	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )
私立大学	10	12 (4)	0 (0)	3 (0)	2 (0)	2 (0)	12 (4)	0 (0)	3 (0)	2 (0)	2 (0)
大学共同利用機関法人	0	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )
独立行政法人等公的研究機関	0	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )
民間機関	3	3 (1)	0 ( )	0 ( )	2 (1)	0 ( )	3 (1)	0 ( )	0 ( )	2 (1)	0 ( )
外国機関	0	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )
その他	1	52 (15)	0 (0)	2 (0)	8 (1)	11 (3)	52 (15)	0 (0)	2 (0)	8 (1)	11 (3)
学外 計	32	95	7	12	23	24	95	7	12	23	24
計	35	114 (38)	7 (5)	14 (3)	34 (13)	29 (13)	114 (38)	7 (5)	14 (3)	34 (13)	29 (13)
【その他の参加状況】年代、職業、所属機関、性別等無回答の参加者を含む											

※本務所属が海外の研究機関である研究者

※( )内には、女性数を記載

※受入機関、受入人数、延べ人数を区分に応じて記入してください。

※外国人、若手研究者(40歳未満)、若手研究者(35歳以下)、大学院生の人数はそれぞれ受入人数、延べ人数に対しての内数を記入してください。

※受入人数、延べ人数については上段に総数を下段に( )で女性の内数を記入してください。

※「学内」の所属機関数は「学部数」等を記入してください。

※【その他の参加状況】には「その他」区分に計上した、具体的な所属等を記載

※受入人数及び延べ人数の算出方法は、以下の例に基づき算出してください

国際研究ミーティングに参加者2人が3回参加した:受入人数2人、延べ人数6人





## 京都大学人文科学研究所国際研究ミーティング実施報告書

### 1. 国際研究ミーティングの名称

Dynamism of Social Context Deciphered by a Linguistic Analysis of Ancient Literature

古代文献の言語分析から読み解く社会背景のダイナミズム

The 1st workshop of the SPIRITS project "Chronological and Geographical Features of Ancient Indian Literature Explored by Data-Driven Science"

—「データ駆動型科学が解き明かす古代インド文献の時空間的特徴」第1回ワークショップ—

### 2. 主宰責任者氏名

天野恭子(京都大学 白眉センター・人文科学研究所 特定准教授)

### 3. 開催日時等およびプログラム(講演者名または報告者名を明記してください)

2021年2月12日(金)、14:00~19:10、オンライン開催

第1部

14:00 – 14:30 オープニング:

Problems in the Formation of the Vedas, Ancient Indian Religious Texts

「古代インド宗教文献ヴェーダの成立を巡る諸問題」天野恭子(京都大学 白眉センター・人文科学研究所)

14:30 – 15:10

The Possibility of Information Visualization and Data Analysis for Ancient Indian Literature

「古代インド文献を対象とした情報可視化やデータ分析の可能性」夏川浩明(京都大学 学術情報メディアセンター)

15:10 – 15:50

Relationship Among Vedic Schools Deciphered by the Visualization of Mantra Collocation

「マントラ共起関係の可視化から読み解くヴェーダ学派間の関係性」天野恭子(京都大学 白眉センター・人文科学研究所)

15:50 – 16:30

Citation Prediction Using Academic Paper Data and Application for Surveys

「学術論文データを用いた引用数予測とサーベイへの活用」濱地瞬(京都大学 工学研究科)

第2部

16:50 – 17:30

Measuring the Semantic Similarity between the Chapters of Taittirīya Samhita Using a Vector Space Model

「ベクトル空間モデルによる『タイッティリーヤ・サンヒター』の章間類似度比較」京極祐樹(Leipzig University, Indology)

17:30 – 18:10

Dating Vedic Texts with Computational Models: Algorithmic Considerations and Data Selection

Oliver Hellwig (University of Zurich, Department of Comparative Language Science)

18:10 – 18:50

morogram: Background, History, and Purpose of a Tool for East Asian Text Analysis

「morogram: 東アジア文献分析ツールの開発の経緯と目的」師茂樹(花園大学 文学部)

18:50 – 19:10

ディスカッション(司会:夏川浩明)

#### 4. 概要(400字程度)

およそ文献を正しく読む上で、文献成立の背景となる社会への理解は根底となる要件である。しかし古代社会の場合は多くの場合において実態が謎に包まれ、そこでどのような過程によって文献が成立したかも明らかでない。古代インドの宗教文献ヴェーダはそのような例の一つである。このようなヴェーダ文献の言語を分析することで、古代インド社会の動き、地理的な移動や勢力圏の変化を読み解くという課題に、データサイエンスおよび可視化技術を援用することによって取り組むのが、京都大学学内ファンド SPIRITS 採択の学際型プロジェクト「データ駆動型科学が解き明かす古代インド文献の時空間的特徴」であり、本ミーティングはその第1回ワークショップである。本ワークショップでは、プロジェクトメンバーによるそれぞれの担当部分の研究の現状を紹介するとともに、今後取り入れる可能性のある新しい技術を検討した。本ワークショップの重要な目的の一つは、研究テーマおよび方法論に同じ関心を持つ研究者について新しい研究者コミュニティを創設することであったが、世界中から100名を超える参加者を得て議論も活発に行われ、大きな成果を得た。

#### 5. 参加者(こちらは主な参加者のみ。別紙「参加状況」に全員分を記載。)

##### ①学外

幅田弘美(国際仏教学大学院大学教授)  
堂山英次郎(大阪大学文学研究科教授)  
川村悠人(広島大学人間社会学研究科教授)  
真鍋智裕(早稲田大学高等研究所講師)  
永崎研宣(一般財団法人人文情報学研究所)  
高島淳(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所名誉教授)  
Tiziana Pontillo (Cagliari 大学教授)  
Maria Piera Candotti (Pisa 大学教授)  
Nirmala Kulkarni (Pune 大学教授)

##### 学内

横地優子(文学部教授)  
熊谷誠慈(こころの未来研究センター)

##### 所内

井狩弥助(名誉教授)

#### 6. 助成金の使途等

告知に関わる英文翻訳料 29,777 円。

英文チラシデザイン料 82,500 円。

#### 7. その他(成果や今後の展開等、自由に記載してください)

本ワークショップはプロジェクトに関わるミーティングの場として第1回目のものであったが、国内外で多くの注目を集め、10か国(イギリス、インド、イタリア、オランダ、スイス、タイ、ドイツ、ポーランド、中国、日本)から117名もの参加を得た。(オンライン開催であったことと、国際研究ミーティング助成により、海外への告知に力を入れることができたのが、その要因だと考えられる。)研究テーマや方法論に同じ関心を持つ研究者が積極的に議論に参加し、情報交換をするとともに、今後も議論や協力をもって互いの研究を発展させる関係の第一歩を築くことができた。データサイエンスの手法を用いた文献の言語分析および文献の成立過程解明について、同様の関心のプロジェクトがドイツで行われていることがわかり、今後協力していけることが大きな成果である。他にも、本ワークショップの講演者が、講演を聴いた研究者から他のシンポジウムの登壇に招待される運びとなるなど、研究者ネットワークの構築で成果を上げたと言える。また、本ワークショップの参

加者のレポートが、人文情報学研究所のメールマガジンで紹介される予定である。第2回、第3回の開催への参加を望む声も早々と届き、今後のプロジェクトの発展への期待も大きいと言える。

今回の7つの講演の発表資料を資料集としてまとめ、その pdf を参加者に配布する予定である。

別紙

参加状況

区分	機関数	参加人数					延べ人数				
		総計	海外研究者	40歳未満	35歳以下	大学院生	総計	海外研究者	40歳未満	35歳以下	大学院生
学内(法人内)	1	15 (3)	3 ( )	3 ( )	3 (1)	1 ( )	( )	( )	( )	( )	( )
国立大学	9	25 (2)	( )	2 ( )	3 ( )	7 (2)	( )	( )	( )	( )	( )
公立大学		( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )
私立大学	17	18 (6)	( )	3 (1)	( )	1 (1)	( )	( )	( )	( )	( )
大学共同利用機関法人		( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )
独立行政法人等公的研究機関		( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )
民間機関		3 ( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )
外国機関	32	45 (20)	45 (20)	6 (3)	16 (9)	7 (3)	( )	( )	( )	( )	( )
その他	4	11 (3)	( )	1 (1)	2 (1)	( )	( )	( )	( )	( )	( )
学外 計	62	102	45	12	21	15					
計	63	117 (32)	48 (20)	15 (5)	24 (11)	16 (6)	( )	( )	( )	( )	( )
【その他の参加状況】											

※本務所属が海外の研究機関である研究者

※( )内には、女性数を記載

※受入機関、受入人数、延べ人数を区分に応じて記入してください。

※外国人、若手研究者(40歳未満)、若手研究者(35歳以下)、大学院生の人数はそれぞれ受入人数、延べ人数に対しての内数を記入してください。

※受入人数、延べ人数については上段に総数を下段に()で女性の内数を記入してください。

※「学内」の所属機関数は「学部数」等を記入してください。

※【その他の参加状況】には「その他」区分に計上した、具体的な所属等を記載

※受入人数及び延べ人数の算出方法は、以下の例に基づき算出してください

国際研究ミーティングに参加者2人が3回参加した:受入人数2人、延べ人数6人

## 新型コロナウイルス感染防止などの行動自粛にともなう共同利用・共同研究拠点企画報告書

	主催責任者	申請者	企画の名称
1	松井 茂	小関隆	連続オンライン・セミナー「2020年の論点：生きるための人文学」(全3回)
2	田辺明生	竹沢泰子	『環太平洋地域における移動と人種』の英語版出版のための翻訳事業
3	小野寺史郎 森川裕貫	石川禎浩	ZOOMを用いたオンライン国際シンポジウム「中国学研究と翻訳」の開催
4	外村中	稲本泰生	国際ワークショップ：中国三教と日本神道の「見える」ものや「見えない」もの



京都大学人文科学研究所新型コロナウイルス感染防止などの行動自粛にとも  
なう共同利用・共同研究拠点企画報告書

1. 国際研究ミーティングの名称

「現代の論点:生きるための人文学」第1シリーズ(全3回)

「国際研究ミーティング」ではなく「オンライン連続セミナー」

2. 主宰責任者氏名

松井 茂(情報科学芸術大学院大学准教授)

3. 開催日時等およびプログラム(講演者名または報告者名を明記してください)

① 歴史学から考える新型コロナウイルス 藤原辰史 & 直野章子

② コロナ危機下の欧州 遠藤乾(北海道大学教授) & 小関隆

③ コロナ時代の未来の音楽 岡田暁生 & 三輪真弘(情報科学芸術大学院大学学長)

全3回ともに 2020 年 11 月 26 日に YouTube で公開

4. 概要(400 字程度)

全3回とも、新型コロナウイルスの感染拡大という大状況の中で人文学的思考がいかなるレゾンデートルを主張できるか、を課題意識として共有している。第1回は現下のコロナ禍を歴史的なパースペクティブの中でどう捉えるか、を、第2回は EU 諸国および EU を離脱したイギリスでコロナ禍へのいかなる対応が進められているか、を、第3回は人が集まること自体が難しいコロナ時代における芸術とりわけ音楽の在り方をどう構想するか、を主題とした。収録した講演および討論の映像をそのまま放映するのではなく、YouTube での公開に先立って、映像メディアの専門家によって編集し、さらに音楽を添えるなど、「作品」と呼びうる水準に仕上げることに意を尽くした。今後も同様の企画が続き、「生きるための人文学」を掲げる人文研の存在を広く社会に知らしめることに期待したい。

5. 参加者(別紙「参加状況」も記載してください。)

YouTube での公開のため、「参加者」は特定しがたい。したがって、別紙も空白とする。

6. 助成金の使途等

申請書のとおり

7.その他(成果や今後の展開等、自由に記載してください)

4で記した通り、今後も同様の企画が第2、第3シリーズとして継続されることが期待される。



## 参加状況

区分	機関数	参加人数					延べ人数				
		総計	海外研究者	40歳未満	35歳以下	大学院生	総計	海外研究者	40歳未満	35歳以下	大学院生
学内(法人内)		( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )
国立大学		( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )
公立大学		( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )
私立大学		( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )
大学共同利用機関法人		( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )
独立行政法人等公的研究機関		( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )
民間機関		( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )
外国機関		( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )
その他		( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )
学外 計											
計		( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )
【その他の参加状況】											

※本務所属が海外の研究機関である研究者

※( )内には、女性数を記載

※受入機関、受入人数、延べ人数を区分に応じて記入してください。

※外国人、若手研究者(40歳未満)、若手研究者(35歳以下)、大学院生の人数はそれぞれ受入人数、延べ人数に対しての内数を記入してください。

※受入人数、延べ人数については上段に総数を下段に( )で女性の内数を記入してください。

※「学内」の所属機関数は「学部数」等を記入してください。

※【その他の参加状況】には「その他」区分に計上した、具体的な所属等を記載

※受入人数及び延べ人数の算出方法は、以下の例に基づき算出してください

国際研究ミーティングに参加者2人が3回参加した:受入人数2人、延べ人数6人



# 京都大学人文科学研究所新型コロナウイルス感染防止などの行動自粛にとも なう共同利用・共同研究拠点企画報告書

## 1. 国際研究ミーティングの名称

『環太平洋地域における移動と人種』の英語版出版のための翻訳事業

## 2. 主宰責任者氏名

竹沢泰子(京都大学人文科学研究所教授)

田辺明生(東京大学大学院総合文化研究科教授)

## 3. 概要(400字程度)

本事業は、申請者の共編著『環太平洋地域における移動と人種』(京都大学学術出版会、2020.1刊行)をもとに、海外の読者向けに修正し、英語論文集として出版することを目標として、そのなかの一部の章を英語に翻訳するものであった。原稿の完成までには、2度の合評会(2020年8月24日、オンラインによる人文研アカデミーとして開催し、実質90名参加者をえた。2度目は2020年12月27日、対面とオンラインのハイブリッドによる非公開の合評会)を経て、さらに修正を加えた。いずれも第一線で活躍する評者らにより、海外の人種研究が環大西洋をモデルとするのに対し、環太平洋地域における移動による人種化は、環大西洋と環太平洋の人種関係が入れ子構造となっており、より広範性をもつモデルを提供していると評価された。本事業は、単なる英訳ではなく、2度の合評会や執筆者間の度重なる議論を通して、さらに進化させた形で海外発信を試みるものである。

## 4. 参加者等

翻訳事業の対象は、鬼丸、関口、土屋、成田の4論文。

以下は、事業全体の参加者

### ①学外

平野克哉(カリフォルニア大学ロサンゼルス校歴史学部准教授)

鬼丸武士(九州大学比較社会文化研究院教授)

関口寛(四国大学経営情報学部准教授)

内野クリスタル(同志社大学講師)

土屋和代(東京大学大学院総合文化研究科准教授)

成田龍一(日本女子大学名誉教授)

田辺明生(東京大学大学院総合文化研究科教授)

### 学内

徳永悠(京都大学地球環境学堂准教授)

### 所内

竹沢泰子(京都大学人文科学研究所教授)

## 5. 助成金の使途等

翻訳代 26000字 x12円 x8本=2,496,000円 そのうち4本=1,200,000円

## 6. その他(成果や今後の展開等、自由に記載してください)

特になし



# 京都大学人文科学研究所新型コロナウイルス感染防止などの行動自粛にとも なう共同利用・共同研究拠点企画報告書

## 1. 国際研究ミーティングの名称

オンライン・シンポジウム「中国学研究と翻訳」およびランチタイムトーク「グローバル化と翻訳の意義」

## 2. 主宰責任者氏名

小野寺史郎(埼玉大学准教授)・森川裕貫(関西学院大学准教授)

所内(申請者) 石川禎浩(京都大学人文科学研究所教授)

## 3. 開催日時等およびプログラム

### ①日時:2020年10月31日 10:30~12:15

場所:京都大学人文科学研究所本館4階大会議室を中継会場とし、ZOOMを用いてオンライン開催。

演題等:「"日本語は難しいでしょう"と言われて」、「どのような訳書を読者に届けるか」、「四面雲山皆入眼、  
万家煙火総関心」

講演者:ジョシュア・フォーゲル(カナダ ヨーク大学教授)、伊藤真(東洋大学非常勤講師)、楊韜(佛教大  
学准教授)

### ②日時:2020年10月31日 12:30~14:25

場所:京都大学人文科学研究所本館4階大会議室を中継会場とし、ZOOMを用いてオンライン開催。

演題等:「翻訳からグローバル化を考える」、「英書翻訳の新たな可能性」、「グローバル時代における日中  
翻訳」

講演者:ジョシュア・フォーゲル(カナダ ヨーク大学教授)、伊藤真(東洋大学非常勤講師)、楊韜(佛教大  
学准教授)

## 4. 概要(400字程度)

オンライン開催の利点を生かして、シンポジウム「中国学研究と翻訳」およびランチタイムトーク「グローバル化と翻訳の意義」のいずれについても、中国・アメリカから多数の研究者の参加を得ることができ、大変な盛会となった。時差や接続等の問題が当初懸念されたが、当日はプログラム通りに開催することができた。グローバル化に対応した学術・研究が求められる一方で、従来の国際交流を支えてきた翻訳の意義についてはこれまで十分に検討されてこなかった。日本の中国研究の英語圏への紹介において多大な貢献をしてきたフォーゲル氏、英書の日本語訳で多数の成果をものさされている伊藤氏、日本の研究成果の中国への紹介を積極的にされている楊氏の報告は、この点を考えるものとして意義深いものであった。報告後には、オーディエンスも交えて活発な対話がなされ、研究成果の国際発信のありかたについて意見が共有された。

## 5. 参加者(別紙「参加状況」も記載してください。)

### ①学外

李真(江蘇省常州工学院講師)、ジョシュア・フォーゲル(ヨーク大学教授)、蒲豊彦(京都橘大学教授)、伊藤真(東洋大学非常勤講師)、李楽(大学院生)、高莹莹(中国社会科学院近代史研究所編集部)、彭劍(華中師範大学副教授)、森川裕貫(関西学院大学准教授)、陳瑤(厦門大学助理教授)、小野寺史郎(埼玉大学准教授)、島田美和(慶応大学講師)、安东强(中山大学副教授)、荻恵里子(京都府立大学研究員)、久保亨(信州大学特任教授)、周俊(早稲田大学研究員)、ニコロヴァ・ヴィクトリヤ(東京大学院生)、姚忻如(NH 福岡局放送部)、陳健成(東京大学研究員)、張月(二松学舎大学院生)、範麗雅(中国社会科学院客員教授)、高柳信夫(学習院大学教授)、韓燕麗(東京大学准教授)、田中剛(帝京大学准教授)、前田環(美術史家・米国シアトル在住)、荆瑤(山西大学講師)、楊韜(佛教大学准教授)、関曉紅(中山大学教授)、菊地一隆(愛知学院大学名誉教授)、狭間直樹(京都大学名誉教授)

### 学内

江田憲治(人間環境学研究科教授)、小島泰雄(人間環境学研究科教授)、谷雪妮(非常勤講師)、中島大知(学部生)、巫靚(非常勤講師)、李ハンキョル(院生)、比護遥(京都大学院生)

所内

石川禎浩、永田知之、村上衛、菊地暁、都留俊太郎、瞿艷丹(人文学連携研究員)

②学外

李真(江蘇省常州工学院講師)、ジョンユア・フォーゲル(ヨーク大学教授)、伊藤真(東洋大学非常勤講師)、李楽(大学院生)、高莹莹(中国社会科学院近代史研究所編集部)、彭劍(華中師範大学副教授)、森川裕貫(関西学院大学准教授)、陳瑶(厦門大学助理教授)、小野寺史郎(埼玉大学准教授)、安东强(中山大学副教授)、楊韜(佛教大学准教授)、関暁紅(中山大学教授)、菊地一隆(愛知学院大学名誉教授)

学内

谷雪妮(非常勤講師)、李ハンキョル(院生)

所内

石川禎浩、村上衛、都留俊太郎、瞿艷丹(人文学連携研究員)

6.助成金の使途等

申請書の通り。

7.その他(成果や今後の展開等、自由に記載してください)

特に無し。

## 参加状況

区分	機関数	参加人数					延べ人数				
		総計	海外研究者	40歳未満	35歳以下	大学院生	総計	海外研究者	40歳未満	35歳以下	大学院生
学内(法人内)	4	12 (3)	( )	( )	7 (3)	2 (0)	( )	( )	( )	( )	( )
国立大学	3	7 (2)	( )	( )	2 ( )	2 (1)	( )	( )	( )	( )	( )
公立大学	1	1 (1)	( )	( )	1 (1)	( )	( )	( )	( )	( )	( )
私立大学	9	9 (2)	( )	1 ( )	2 ( )	3 (2)	( )	( )	( )	( )	( )
大学共同利用機関法人		0 ( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )
独立行政法人等公的研究機関		0 ( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )
民間機関	1	1 (1)	( )	1 (1)	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )
外国機関	10	19 (10)	( )	4 (2)	3 (2)	2 (1)	( )	( )	( )	( )	( )
その他	1	2 ( )	( )	1 (1)	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )
学外 計		39									
計	29	51 (19)	( )	7 (4)	15 (6)	9 (4)	( )	( )	( )	( )	( )
【その他の参加状況】											

※本務所属が海外の研究機関である研究者

※( )内には、女性数を記載

※受入機関、受入人数、延べ人数を区分に応じて記入してください。

※外国人、若手研究者(40歳未満)、若手研究者(35歳以下)、大学院生の人数はそれぞれ受入人数、延べ人数に対しての内数を記入してください。

※受入人数、延べ人数については上段に総数を下段に( )で女性の内数を記入してください。

※「学内」の所属機関数は「学部数」等を記入してください。

※【その他の参加状況】には「その他」区分に計上した、具体的な所属等を記載

※受入人数及び延べ人数の算出方法は、以下の例に基づき算出してください

国際研究ミーティングに参加者2人が3回参加した:受入人数2人、延べ人数6人





# 京都大学人文科学研究所新型コロナウイルス感染防止などの 行動自粛にともなう共同利用・共同研究拠点企画報告書

## 1. 国際研究ミーティングの名称

国際ワークショップ: 中国三教と日本神道の「見える」ものや「見えない」もの

## 2. 主宰責任者氏名

外村 中(ヴェルツブルク大学上級講師)

## 3. 開催日時等およびプログラム(講演者名または報告者名を明記してください)

日時: 2021年3月28日(日) 13:30~18:00

場所: 京都大学人文科学研究所分館考古芸術共同研究室及びオンラインミーティング  
研究発表①

演題: 道家系と儒家系と伊勢神道の「一なる」もの: 「一なる」ものは「道」か「気」か

報告者: 外村 中(ヴェルツブルク大学上級講師)

研究発表②

演題: 仏像と道教像の図像的關係性再考 — 南北朝~唐時代 —

報告者: 齋藤龍一(大阪市立美術館学芸員)

研究発表③

演題: 道学諸派における『太極図説』解釈

報告者: 福谷 彬(京都大学助教)

研究発表④

演題: 北宋真宗期の仏教美術と三教理解 — 舍利莊嚴を中心に —

報告者: 稲本泰生(京都大学教授)

## 4. 概要(400字程度)

本ワークショップは、人文科学研究所の共同研究一般 A 班: 『『見えるもの』や『見えないもの』に関わる東アジアの文物や芸術についての学際的な研究』(班長: 外村中、副班長: 稲本泰生) の関連企画であり、当該班の過去 2 年の研究成果を総括するとともに、これからの展開の可能性をさぐり、広く国内外に発信する場と位置づけている。具体的には、これまで個別に検証してきた仏・道・儒に日本神道を加えた四教の「交渉の様相」に焦点をあて、彫像や画像などの文物と対照させつつ考察を加える機会とする。ワークショップは人文研を拠点にオンラインミーティングで実施し、四人の研究者が四教それぞれに軸足をおいた研究発表を行って問題提起し、これに基づいて多分野の研究者が参加して討論を行う。その最大の目標は、当該テーマに関わる諸問題について、ジャンルの垣根をこえた国際レベルの共通認識を形成することに存する。

## 5. 参加者(別紙「参加状況」も記載してください。)

学外 横手裕(東京大学人文社会学系教授)、藤岡穰(大阪大学文学研究科教授)、塚本明日香(岐阜大学地域協学センター助教)、王杰(京都市立芸術大学美術学部 DC)、大平理紗(京都府立大学文学研究科 DC)、肥田路美(早稲田大学文学学術院教授)、原口志津子(奈良大学文学部教授)、大西磨希子(佛教大学仏教学部教授)、西林孝浩(立命館大学文学部教授)、中安真理(同志社大学文化情報学部准教授)、濱田瑞美(横浜美術大学准教授)、藤井淳(駒澤大学仏教学部准教授)、高橋早紀子(愛知学院大学文学部講師)、篠原典生(中央大学総合政策学部助教)、鈴木洋保(京都女子大学非常勤講師)、重田みち(京都芸術大学非常勤講師)、ベッティーナ・ゲーシュ(関西大学非常勤講師)、魏藝(龍谷大学大学院

文学研究科研究生)、稲葉秀朗(早稲田大学文学学術院 DC)、清水健(東京国立博物館主任研究員)、谷口耕生(奈良国立博物館教育室長)、岩井共二(奈良国立博物館美術室長)、折山桂子(九州国立博物館アソシエイトフェロー)、田中健一(文化庁文化財調査官)、長谷川貴信(京都府教育庁指導部文化財保護課技師)、齋藤龍一(大阪市立美術館主任学芸員)、森橋なつみ(大阪市立美術館学芸員)、八田真理子(岡山県立美術館学芸員)、中澤菜見子(石川県立美術館学芸員)、瀧朝子(大和文華館学芸部課長)、西谷功(泉涌寺宝物館学芸員)、外村中(ヴェルツブルク大学上級講師)、シビル・ギルモンド(ヴェルツブルク大学講師)、イマヌエル・スパー(ヴェルツブルク大学講師)、黄盼(中国社会科学院 PD)、常钰熙(北京大学考古文博学院 DC)

学内 上島享(文学研究科教授)、内記理(文学研究科助教)、檜山智美(白眉センター特定助教)、陳佑真、臧魯寧、王歆、王孫涵之、富岡采花(以上、文学研究科 DC)

所内 稲本泰生、安岡孝一、古勝隆一、倉本尚徳、向井佑介、高井たかね、福谷彬、高志緑

## 6.助成金の使途等

日本入国時における二週間待機の措置が継続される等、主催責任者の滞在費が想定をこえた価格となったため、全額を旅費にあてた。

## 7.その他(成果や今後の展開等、自由に記載してください)

3月28日のワークショップ当日は6名の外国人研究者を含む52名の参加を得て濃密な研究発表と活発な質疑応答が行われ、実りある研究交流の機会となった。開催に先立って『仏教と道家系の「見える」ものと「見えない」もの』と題する資料集の冊子(全100ページ)を制作刊行し、議論の参考に供することができた。

本企画の基盤となっている研究班(A班)は2021年度が最終年度であり、研究成果をとりまとめた論集の公刊に向け準備にあたるが、論集にはワークショップの発表に基づく論考も収録する予定である。

また当該班の関連企画としてドイツ・ヴェルツブルク大学で日独二国間学術交流セミナー『美術史学・考古学から見た伝統東アジアにおける「見えない」ものの変容』を開催すべく、ドイツ研究振興協会(DFG)と日本学術振興会(JSPS)の助成に応募したところ(ドイツ側代表:外村、日本側代表:稲本)、採択の通知(2021年3月初)があり実施が確定した。本セミナーは2021年12月10・11日に行われ、若手・中堅研究者の班員7名が研究発表し、同数のドイツ在住研究者と対論する。3月のワークショップのメンバーの中では福谷が研究発表、外村・稲本が総括・進行を行う予定である。本セミナーの最大の目標は、伝統東アジアの文物・芸術を解釈するための共通基盤が、若い世代の間で、また国際レベルで形成されることに存する。今回のワークショップ参加者には若年層が多く、一方で発表・討論では高い水準が確保されていたことから、セミナーの成功を確信させる手応えが得られた。

## 参加状況

区分	機関数	参加人数					延べ人数				
		総計	海外研究者	40歳未満	35歳以下	大学院生	総計	海外研究者	40歳未満	35歳以下	大学院生
学内(法人内)	3	16 (5)	4 (1)	9 (4)	8 (4)	5 (2)	( )	( )	( )	( )	( )
国立大学	3	3 (1)	( )	1 (1)	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )
公立大学	2	2 (2)	1 (1)	2 (2)	2 (2)	2 (2)	( )	( )	( )	( )	( )
私立大学	13	14 (9)	2 (2)	3 (2)	2 (2)	2 (1)	( )	( )	( )	( )	( )
大学共同利用機関法人		( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )
独立行政法人等公的研究機関	8	10 (4)	( )	6 (4)	4 (4)	( )	( )	( )	( )	( )	( )
民間機関	2	2 (1)	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )
外国機関	3	5 (3)	4 (3)	2 (2)	2 (2)	2 (2)	( )	( )	( )	( )	( )
その他		( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )
学外 計	31	36	7	14	10	6					
計	34	52 (25)	11 (7)	23 (15)	18 (14)	11 (7)	( )	( )	( )	( )	( )
【その他の参加状況】											

※本務所属が海外の研究機関である研究者

※( )内には、女性数を記載

※受入機関、受入人数、延べ人数を区分に応じて記入してください。

※外国人、若手研究者(40歳未満)、若手研究者(35歳以下)、大学院生の人数はそれぞれ受入人数、延べ人数に対しての内数を記入してください。

※受入人数、延べ人数については上段に総数を下段に( )で女性の内数を記入してください。

※「学内」の所属機関数は「学部数」等を記入してください。

※【その他の参加状況】には「その他」区分に計上した、具体的な所属等を記載

※受入人数及び延べ人数の算出方法は、以下の例に基づき算出してください

国際研究ミーティングに参加者2人が3回参加した:受入人数2人、延べ人数6人

